麗澤大学大学院

平成 29 年度　博　士　論　文

中・日母語話者同士の
会話展開の対照研究
―初対面場面の会話データをもとに―

言語教育研究科　日本語教育学専攻

指導教授　井上　優

学籍番号　1131110035　唐　瑩

目　次

第 1 章　問題提起・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

1.1　本論の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
1.2　初対面会話の意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
1.3　本研究のデータ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
1.4　研究の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
1.5　会話における情報交換・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
1.6　研究内容と本論の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

第 2 章　理論的枠組みと先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

2.1　基本的な考え方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
2.2　先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
2.2.1　話者交替に注目した研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
2.2.2　聞き手の言語行動に注目した研究・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
2.2.3　話題に注目した研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
2.2.3.1　話題内容の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
2.2.3.2　話題の展開に関する研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
2.3　本研究の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
2.4　分析のための概念について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
2.4.1　会話参加者の役割・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
2.4.2　分析単位としての「発話」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
2.4.3　「発話」の種類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

第 3 章　中国語会話と日本語会話の話題選択の研究・・・・・・・・・・・・・ 33

3.1　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
3.2　先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
3.2.1　研究の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
3.2.2　話題選択に関する研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
3.3　分析方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

3.4　結果と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
3.4.1　大話題の数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
3.4.2　大話題の種類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
3.4.3　共通して出現率が高い大話題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
3.4.4　出現率が異なる大話題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
3.4.5　会話開始から 5 分間の大話題と 5 分以降の大話題・・・・・・・・・・ 55
3.4.6　会話開始の様式と大話題の導入のされ方・・・・・・・・・・・・・・ 59
3.5　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64

第 4 章　中国語会話と日本語会話の自己開示の研究・・・・・・・・・・・・・・ 67

4.1　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
4.2　「自己開示」の定義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
4.3　自己開示に関する先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
4.4　分析方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
4.5　結果と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
4.5.1　自己開示の頻度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
4.5.2　自己開示の頻度の変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73
4.5.3　客観的自己開示について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
4.5.3.1　調査結果の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
4.5.3.2　開示内容の共通点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
4.5.3.3　開示内容の相違点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
4.5.4　主観的自己開示について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
4.5.4.1　調査結果の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
4.5.4.2　「心情・感情」の開示・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
4.5.4.3　「意見」の開示・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
4.6　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84

第 5 章　新情報の情報提供発話の出現パターンの研究・・・・・・・・・・・・・ 87

5.1 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
5.2 会話における情報提供発話の現れ方・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
5.2.1 分析の枠組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
5.2.2 分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96

5.3 情報提供発話の出現パターン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
5.3.1 分析の枠組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
5.3.2 分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 107
5.4 会話における質問の機能・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 111
5.4.1 質問の分類と調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 111
5.4.2 本研究のデータにおける質問発話の機能・・・・・・・・・・・・・・・ 113
5.5 一つの話題の中での会話参加者の役割交替・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
5.5.1 会話参加者の役割交替のパターン・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
5.5.2 分析結果と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 123
5.6 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 125

第 6 章 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 127

6.1 本研究の結果の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 129
6.1.1 「①交換される情報の内容」について・・・・・・・・・・・・・・・・ 129
6.1.2 「②情報交換の様式」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
6.2 本研究で得られた知見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 132
6.3 日本語教育への示唆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139

付録：会話データ例（日本語会話）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 151

第 1 章　問題提起

1.1　本論の目的

1.2　初対面会話の意義

1.3　本研究のデータ

1.4　研究の視点

1.5　会話における情報交換

1.6　研究内容と本論の構成

第１章　問題提起

1.1　本論の目的

人々は相互に協力しながら、一連の発話を組み立てて、会話を作り上げていく。会話は、話し手と話し相手が交互に発言をして進めていく社会的な相互行為であり、何らかの目的もしくは理由があってことばを交わす営みであるとされている（橋内，1988）。

会話には種々のスタイルがある。会話のスタイル（conversational style）について、メイナード（1993）は次のように述べている。

> 「会話のスタイル」とは話し手の使う言語表現や会話管理のストラテジーが持つ広義の意味や機能をさす。そして、それらの表現やストラテジーに分析の焦点を当てて、会話にどんな参加の仕方があるか、その仕方を表現するものは何か、どういう話者がどんな形の参加の仕方、つまり会話のスタイルをするか等を中心に考察していくという研究姿勢をとっている。　（メイナード 1993: 29）

会話スタイルは、言語差、男女差、地域差など様々なバリエーションと関わり、いろいろなタイプがある。メイナード（1993）では、会話スタイルとして「マシンガン連続質問調」、「物語」、「ずけずけ情熱スタイル」、「おもいやりスタイル」などが列挙されている。

本研究では、「日本語と中国語の会話スタイル」について対照研究をおこなう。会話が展開する中で、人々は何かを話した後、相手の発話によって次に何を話せばいいのかを考える。筆者が日本に留学したばかりのころ、「留学生と日本人の交流の場を作る」ことを趣旨としたサークルに入り、初対面の日本人学生と友達になりたいと思って話をしたが、日本人の友人の話し方が筆者の母語である中国語の会話で慣れている話し方と違っていたため、何を話せばいいかが分からず、会話が続かないことがあった。その後も、日本人と話をしても、やはり会話が続かないと感じ、中途半端で終わってしまう場合が多かった。そこで中国語会話と日本語会話が一体どのように持続するのかという疑問が浮かび上がった。

日本人との会話で筆者が持った違和感は、会話における「相づち的な発話」と「実質

的な発話」という概念と関係する。

杉戸（1987）は、「相づち的な発話」と「実質的な発話」について次のように定義している。

・「相づち的な発話」とは、「ハー」「アー」「ウン」「アーソウデスカ」「サヨーデゴザイマスカ」「エーソウデスネ」などの応答詞を中心にする発話。先行する発話をそのままくりかえす、オーム返しや単純な聞きかえしの発話。「エーッ！」「マア」「ホー」などの感動詞だけの発話。笑い声。実質的な内容を積極的に表現する言語形式（たんなるくり返し以外の、名詞、動詞など）を含まず、また判断・要求・質問など聞き手に積極的なはたらきかけもしないような発話。　（杉戸 1987：88）

・「実質的な発話」とは、「相づち的な発話」以外の種類の発話。なんらかの実質的な内容を表す言語形式を含み、判断、説明、質問、回答、要求など事実の叙述や聞き手へのはたらきかけをする発話。　（杉戸 1987：88）

上記の概念を念頭に置きながら、筆者が日本語母語話者との日常の雑談で感じる返事の違いを次の日本語会話（1）と中国語会話（2）の会話例[注1]で示す。

(1)（日本語会話）

220 JM0102　何人ぐらい受けたの？

221 JM0101　ええと、日本人は多分政策管理とマック[注2]のほう、合わせてたぶん 5 人ぐらいなんですけど。

222 JM0102　政策管理。〈相づち的発話〉

223 JM0101　はい。で、その会計の方はもう、政策管理で一人、ぼくだけ日本人の学生は。

224 JM0102　うん。〈相づち的発話〉

225 JM0101　あと、あの会計という分野なんですけど、それで。

1　日本語会話（1）と中国語会話（2）は本研究のデータから抽出したものである。本研究のデータについて詳しくは 1.3 で述べる。

2 マックはマーケティングの略称である。

226 JM0102　それは全部だよね？

227 JM0101　いや、違う。

228 JM0102　違うんだ。〈相づち的発話〉

229 JM0101　はい。全員落ちたみたいで。

230 JM0102　へー

231 JM0101　留学生と社会人学生しか受からなかったかな。

(2)（中国語会話）

45　CM0601　你们班有没有湖南的?

（あなたたちのクラスには湖南省からの学生はいますか？）

46　CM0602　我们班湖南人很少的，外省人就两个，还是福建的。

（うちのクラスは湖南省出身の人は少ないです。他の省からの学生は２人だけで、それも福建省の出身です。）

47　CM0601　不过大四的好像对湖南招生只招 20 个。

（でも、４年生のクラスは湖南省向けの学生の募集は 20 人しかないみたいです。）

48　CM0602　说实话外省人真的不是特别多。

（実のところ、他省の人は本当にそんなに多くないです。）

49　CM0601　从我这一届开始对外招生就更加开放了。

（僕の学年から他省向けの募集がさらに開放されました。）

50　CM0602　我都快毕业了，对下面的情况不太了解。

（僕はもう卒業だから、下の学年の状況はあまり分からないですね。）

(1)の日本語会話では、相づち的な会話が３回見られる。224_JM0102「うん」はいわゆる相づち、222_JM0102「政策管理」、228_JM0102「違うんだ」は直前の発話の一部の繰り返しである。JM0102 も実質的な発話を発してはいるが、相づち的な発話を発しているのは JM0102 だけである。その点から言えば、(1)の会話では JM0101 が主に実質的な情報を提供する立場（楊虹 2015 の言う「話題上の話し手」）にあり、JM0102 は発話をおこなっているが、会話の中では「聞き役」（楊虹 2015 の言う「話題上の聞

き手」）であると言うことができる。

これに対し、(2)の中国語会話では、相づち的発話は見られない。また、全体として、互いに対等な立場で実質的な情報提供をおこなっており、どちらか一方が「聞き役」の役割を果たしているというわけではない。これに比べると、(1)の日本語会話は JM0101 が一方的に話しているように見える。逆に日本人からすると、(2)の中国語会話は「互いに自分が言いたいことを言っている」ように見えるのではないだろうか。

(1)、(2)の会話は日本語会話、中国語会話として自然なものであるが、会話スタイルは大きく異なると考えられる。この 2 つの会話例が示すように、中国人である筆者にとって、日本人が相手の話を聞くときは、自分から積極的に質問したり、実質的な内容を話すよりは、話を聞くことに集中しているという印象を受ける。これは中国人にとっては、「自分の発話に対して何か言ってほしいのに、相手は何も言ってくれない」という違和感につながる。実際、筆者が日本人と会話するときは、ペースがうまくつかめないことが多い。逆に、日本人の友人からは、「中国人は一方的に話し続けたり、唐突に何か言ったりして、どのように対応すれば分からないことがある」という感想をしばしば聞く。日本人からすると、中国人との会話は「自分の話をちゃんと聞いてほしいのに聞いてくれない」という印象を持つ可能性がある。このことが日本語学習者が日本語母語話者との会話が続かない要因の一つであろう。

本研究では、このような違和感を出発点として、日本語会話と中国語会話がそれぞれどのように持続するのかを研究することによって、日本語と中国語の会話スタイルを明らかにすることを目的とする。

1.2　初対面会話の意義

初対面会話は人間関係構築の出発点である。知人や友人などの既知の相手との会話とは違い、初対面会話においては相手に関する情報が絶対的に不足している（三牧, 2013）。既知の相手との会話であれば、相手に関する情報を持っているため、どのようなやり方で会話をおこなうかを選択できる。しかし、初対面の相手の場合はそのようなわけにはいかない。

初対面会話といっても、どのような話題を選択するのか、どのように会話を進めるのかは、会話参加者の性別、年齢、果たす役割や会話の目的、場面などによって異なる。

例えば、宅急便の配達員と送付先の客の会話であれば、これからどのようにしてよい関係を保つのかを考える必要がなく、会話は 1 分間以内で済むかもしれない。教師と学生の会話であれば、通常は授業内容が主な内容であり、教師の個人情報や学生の家族状況などの内容までは言及しないだろう。ビジネス場面の初対面会話の場合は、長時間会話が続いても、親密な関係を構築するよりは、ビジネス上の信頼関係の構築に重点を置くだろう。このように、初対面会話には様々なタイプがある。

本研究で研究対象とするのは、「友人を作ることを目的とする社交的な場面の初対面会話」である。友人同士の会話であれば、双方が共有する既知の背景知識を利用して話題を選択することができ、例えば、「昨日ディズニーランド楽しかった？」というように、相手のことを予測しながら会話を展開させることもできる。しかし、初対面の相手の場合は、背景知識が少ないため、結果的に相互の関心事を探りながら話題を展開させることになる。話題の内容は個人情報を含み、相手の趣味や経歴、思考、または社会の出来事などの百科事典的知識まで広がる可能性がある。また、この種の初対面会話では、相手と親密な人間関係を構築したければ、会話を一定時間展開させることが必要であろう。日本語と中国語会話がどのように展開するのかを観察することで、日本語と中国語会話のスタイルの一部を解明できるのではないかと考える。

1.3　本研究のデータ

本研究のデータは、同性の日本語母語話者同士、同性の中国語母語話者同士の初対面会話を文字化したデータである（以下、本研究の全体を通じて、日本語母語話者同士の会話を「日本語会話」、中国語母語話者同士の会話を「中国語会話」と呼ぶ）。

データの収集期間は 2011 年 10 月から 2012 年 9 月までである。協力者は全員 20 代の大学生もしくは大学院生である。協力者の内訳は表 1-1 のとおりである。

表 1-1　協力者の内訳

協力者	調査場所	人数
中国語母語話者	中国（江蘇省）の大学	40 人
日本語母語話者	日本（千葉県）の大学	40 人

中国語母語話者の協力者は、全員大学の学部生（1 年生 9 名、2 年生 18 名、3 年生 9 名、4 年生 4 名）であり、男性 20 名、女性 20 名である。日本語母語話者の協力者は、大学の学部生 34 名（1 年生 9 名、2 年生 13 名、3 年生 7 名、4 年生 5 名）と大学院生 6 名（修士 1 年生 4 名、2 年生 1 名、博士 1 年生 1 名）であり、男性 20 名、女性 20 名である。話者間の学年差による影響を最小限にするため、2 学年以内の協力者同士をペアにした。

実験を開始する前に、協力者に許可を得て、初対面の同性同士二人をペアにし、中国語会話 20 ペア、日本語会話 20 ペアの会話を録音した。録音の際には、調査の目的は事前に説明せず、開始の前に「テーマは自由で、なるべく相手と友達になるように 20 分の会話をしてください」という指示を出し、筆者はその場を離れた。会話終了後、フォローアップ・インタビューの質問用紙を全員に記入してもらった。

日本語会話のデータは 2011 年 10 月から 2012 年 6 月にかけて、日本（千葉県）の大学で大学生、大学院生を募集した。実験の場所は大学院の教室であった。中国語会話のデータは 2012 年 2 月から 3 月にかけて、中国（江蘇省）の大学において現地募集の方法で協力者を集め、図書館または教室で録音をおこなった。

2012 年 6 月から 2012 年 9 月にかけて、すべての録音データを文字化した。日本語会話の文字化データは、日本語母語話者にチェックしてもらった。中国語会話のデータは、1 組が録音のミスのため、文字化できなかった。また、日本語会話のデータのうち、2 組は厳密には初対面とは言えないことが後で判明したので、分析対象からはずした。

最終的に日本語会話 18 組、中国語会話 19 組のデータを分析対象とした。

本研究で扱ったデータは大学生同士、大学院生同士の会話であるため、得られた結果が中日母語話者同士の初対面会話の一般的な特徴とは限らないが、両者を比較することにより、それぞれの特徴の一端が明らかになると考える。

1.4　研究の視点

会話が持続する中で、一連の話題が出現する。会話参加者は話題を開始し、展開してまた次の新しい話題に転換する。そして、会話が持続している間はその過程が繰り返される。一定時間内に持続される会話の展開は、メイナード（1993）も提示されているように、「旧情報から新情報へ」という情報の流れであると考えられる。

会話は会話参加者の共同作業であり、相互作用が存在している。一方の話者が一方的に話し、もう一人がもっぱら聞き手になるのは会話ではなく、会話参加者が交替して発話するのが基本である（Sacks. Schegloff and Jefferson, 1974）。これらの発話が話題の内容を構成する。そのような「話題」を単位として会話の構造について考察するほかに、一つの話題に注目して会話参加者がどのように話題の展開に関与するかを考察することが、話題展開の研究にとって不可欠である。

これまでの話題展開に関する研究は、二つの立場がある（村上・熊取谷，1995）。一つは、話順交替などの観点から、話題の「線状構造」を捉えようとするものである。線状的な構造を捉えようとする研究には、Sacks. Schegloff and Jefferson (1974) の話者交替システムを中心とする研究がある。これらの研究は会話参加者の相互行為に注目している。

もう一つは、複数の関連する話題がより大きな話題としてまとまりを形成するという観点から、話題の「階層構造」を捉えようとするものである。このような研究には、南（1981）、三牧（1999）、小笠（2001）などの研究がある。これらの研究では、基本的に「話題」を会話の構成単位として捉えている。会話を話題ごとに分け、話題の展開構造のほかに、話題転換、話題開始と終了のあり方、話題の内容などに注目した研究は、話題展開の様々な面を明らかにしている。

1.5　会話における情報交換

人々が会話するとき、最近の出来事や友人のことや自分のおもしろい経歴など様々な情報を交換する。どの種類の会話でも、会話参加者の間に情報交換がおこなわれるという点は共通である。特に初対面会話では相手に対する情報がきわめて不足している。三牧（2013）は、初対面会話の特徴の一つとして、「円滑な会話を遂行するための前提として相互に関する情報交換が活発に行われること」を挙げている。

どのような情報が交換されるかには、会話の目的、会話参加者の親疎関係、年齢、役割、立場、参加人数など、多くの要素が絡み合っている。店員と顧客の会話においては、商品に関する情報内容が多く交換されるだろうし、雑談においては、日常生活の悩みごと、経験、交友関係など、より広い範囲の情報内容に言及されるだろう。また、友人・知人との会話においては、背景知識を十分に活用でき、相手の所属や名前などの情報を聞かなくても会話を始めることができるが、初対面の人との会話は、相手に関する情報

が不足しているため、自己紹介をしたり、相手のことについて質問したりする発話が多く出現するだろう。同じ初対面であっても、宅配便の配達員と送付先の客との会話は事務的なやりとりですむが、研究生志望の学生が教員の研究室を初めて訪れたときの学生と教員の会話は、研究テーマをはじめとして、様々な内容について会話をおこなわなければならない。

どのようなタイミングでどのような情報を交換するのかは習慣的なもので、日常的には意識されることはほとんどない。会話参加者が互いに共通の背景知識を持たない異文化間コミュニケーションにおいては、それぞれの習慣の違いによりコミュニケーションのズレが生じる可能性がある。同じ社会的習慣を背景にして育った母語話者同士は共通の背景知識を持つが、それが他の社会でも同じように通用するわけではない。初対面の会話参加者が持続的な会話をおこなうためには、初対面の母語話者同士が会話でどのような情報をどのように交換するかを理解する必要がある。

1.6　研究内容と本論の構成

中国語会話と日本語会話の展開様式を比較する場合、それぞれの会話で「どのような情報が交換されるのか」、また、これらの情報が「どのように会話参加者の間に交換されるのか」を明らかにする必要がある。

本研究では、「会話参加者間の情報交換のあり方」に焦点を当てて、初対面の日本語母語話者同士と中国語母語話者同士がそれぞれどのように情報交換をしながら話題を展開するのかについて分析をおこなう。

第 2 章では先行研究について概観するとともに、本研究の枠組みについて述べる。

第 3 章から第 5 章では、次の二つの観点から考察をおこなう。

①交換される情報の内容（どのような情報が交換されるか）

②情報交換の様式（情報がどのように交換されるか）

第 3 章、第 4 章では①の問題を扱う。具体的には、第 3 章では、「中国語会話と日本語会話における話題の選択」について考察し、中国語会話と日本語会話における話題の選択傾向、会話開始の仕方、話題の開始の仕方について述べる。第 4 章では「中国語会話と日本語会話の自己開示の内容」について考察し、中国語会話と日本語会話において、選択された話題の中で会話参加者自分自身に関してどのような情報を開示するかにつ

いて述べる。

第 5 章では②の問題を扱う。具体的には、「中国語会話と日本語会話における情報提供発話の出現パターン」について考察し、中国語母語話者と日本語母語話者はそれぞれどのように新しい情報を開示し、話題を展開していくかについて述べる。

第 6 章はまとめである。

第 2 章　理論的枠組みと先行研究

2.1　基本的な考え方

2.2　先行研究

2.2.1　話者交替に注目した研究

2.2.2　聞き手の言語行動に注目した研究

2.2.3　話題に注目した研究

2.2.3.1　話題内容の研究

2.2.3.2　話題の展開に関する研究

2.3　本研究の課題

2.4　分析のための概念について

2.4.1　会話参加者の役割

2.4.2　分析単位としての「発話」

2.4.3　「発話」の種類

第 2 章　理論的枠組みと先行研究

2.1　基本的な考え方

本研究は、「相互行為の社会言語学」（interactive sociolinguistics）の考え方を基本にすえて、言語活動を、個人が自らの思考をことばに翻訳するだけでなく、共有の理解を産出しようと能動的に協力し合う二人以上の参与者の関わる協調的なプロセスと見なす（Gumperz, 1982）。

会話分析（conversational analysis）に基づく研究では、一見無秩序に見える日常会話が実は構造を持っていることを明らかにしてきた。Sacks, Schegloff and Jefferson（1974）は、話者交替（turn-taking）、「あいさつ―あいさつ」、「招待―受諾」、「不満の表明―謝罪」のような「隣接応答ペア」（adjacency pair）などの概念を提示し、日常的な人々の会話についてさまざまな角度から分析をおこない、会話に構造があることを明らかにした。Gumperz (1982) は、エスノメソドロジーの方法論を受け継ぎ、会話の参与者の解釈の継続的なプロセスとはどのようなものであるか、また、解釈することを可能にするものは何かという問いを基に、「相互行為の社会言語学」を提唱している。

会話が持続する中で、会話参加者は互いに言いたいことを勝手に言うのではなく、相手の発話内容や言語行動に合わせた発話をおこなう。本研究では、このような相互行為という観点から、①会話における交換される情報の内容（どのような情報が交換されるか）、②会話における情報交換の様式（情報がどのように交換されるか）について、中国語と日本語の対照をおこなうものである。

2.2　先行研究

第 1 章で述べたように、話題展開に関しては、これまで、話者交替に注目した研究、聞き手の言語行動に注目した研究などがあり、話題内容、話題の展開構造、話題転換、話題の開始部と終了部について多くの研究がなされてきた。本節では、これらの研究について紹介する。

2.2.1　話者交替に注目した研究

Sacks, Schegloff and Jefferson (1974) は、社会学の一派であるエスノメソドロジーを基盤として、「話者交替」（turn-taking）の観点から、「見られてはいるが気づかれて

いない（seen but unnoticed, Garfinkel 1967）日常的な会話のルールについて考察をおこなっている。話者交替の観点から会話の仕組みを説明する研究は多い。

小室（1995）は日本語の discussion の turn-taking をパターン化している。その中で、話し手は聞き手に配慮しながら話し、聞き手は話し手に配慮しながら聞くこと、次の話し手は相手がそれまでに話した内容に配慮して turn を取らなければならないこと、日本語会話において turn を取る時は、話し手の内容に関連した問いや「まあ」、「いや」などのマーカーが必要であることを指摘している。また、中井（2003c）、初鹿野（1998）、西原（1991）、楊晶（2000）、李麗燕（1999）、木暮（2002）、舟橋（1994）、黒沼（1996）、山崎・好井（1984）、金志宣（2000，2001）、金珍娥（2003，2013）は、turn の分類方法や turn 冒頭に発される相づちに注目した研究をおこなっている。

小室（1995）は、話し手は聞き手の反応によって発言についてより詳しく説明したり、話題を変えたり、さらに突っ込んだ話をしたりして、自分の発話をコントロールすることができると述べている。森・前原・大浜（1999）は、聞き手の反応を中心に、「繰り返し」に焦点を当てて、ターン譲渡の方略について研究をおこない、「繰り返し」と「物語」が日本人の談話展開の特徴であると主張している。また、日本語の会話では、二人の話し手がともに何も話さずに、互いに相づちを打ちながら、会話を進める場合もある。大浜・西村（2005）では、この現象について、話し手がターンを取っているが、すぐにそれを放棄すると見ている。

李麗燕（1995, 1997, 1999, 2000）は、日本語母語話者の会話管理に関連して、日本語母語話者の雑談における「物語の開始」や情報伝達行動の再開について一連の研究をおこなった。そのうち、李麗燕（1995）は、①「発話順番の交替表示」によって話者交替の調節をおこなう、②「注目行動の要求表示」によって意味伝達行動を順調におこなう、③「フィードバックの使用」によって発話順番の取得行動をスムーズにおこなう、④「関連情報の添加」によって会話をプラスの方向に進める、という日本語会話に見られる会話管理の例を挙げている。

対照研究としては、賈琦（2008）、張麗（2010）、金志宣（2000，2001）、梅木（2009）などが、日本語と中国語あるいは韓国語の対照研究をおこなっている。

賈琦（2008）は、中国語会話と日本語会話（ともに母語場面）を比較し、中国語母語話者は簡単に発話権を譲らず、他人の話す権利より自分の権利を重んじるのに対し、日本語母語話者は話し手の発話の関連する短い発話を入れる「ターン挿入」を多用し、

協力的な姿勢を示し、人間関係を重視すると指摘している。

張麗（2010）では、母語および外国語による小集団ディスカッションにおいて、中国語グループの話者交替の回数が日本語グループの 4 倍になることを指摘している。「自己中心的な中国人」、「他者に配慮する日本人」という図式は、討論という異文化コミュニケーションの場で逆転して出現し、中国人のもつ「とにかく話す」という言語コミュニケーション・スタイルが反映されると同時に、「配慮」という側面がはっきりと反映されているとしている。

金志宣（2000，2001）は、日本語と韓国語の対照会話分析に基づき、日本語会話における実質的な内容を持つターンを「主流ターン」、相づちを「非主流ターン」としている。そして、日本語会話の turn-taking は主流ターンに非主流ターンが常にはさみ込まれる形であるのに対し、韓国語会話の turn-taking は実質的な内容を含む主流ターンが交替される形であることを明らかにしている。

梅木（2009）も、日本語による韓日接触場面を対象とした研究ではあるが、日本語母語話者は主に自ら情報を提供する発話により会話を展開するのに対し、韓国語母語話者は自ら情報を提供する発話と情報要求を重ねる発話の両方を同程度に用いることを明らかにしている。

上記の研究では共通して、日本語会話の話者交替はターンを直接的に譲渡するのではなく相づちを伴うことが多いこと、これに対し、中国語会話・韓国語会話の話者交替は直接的にターンを譲渡することが多いことが指摘されている。

2.2.2　聞き手の言語行動に注目した研究

聞き手の言語行動は話題展開の構造に重要な影響を及ぼす。それゆえ、言語行動が会話の進展に対してどのような機能があるかについて、数多くの研究がなされている。

日本語教育では、会話の展開は話し手一人の作業ではなく、聞き手も相づちをうち、うなずき、話し手に協力しなければならないという考えのもとで、聞き手中心の談話指導が提唱されている（岡崎，1987；堀口，1988）。そして、聞き手の言語行動として、主に「相づち」に焦点を当てて研究がなされ、相づちは聞き手の言語行動の重要な現象として、会話スタイルの形成に対して不可欠な作用があるとされている。

相づちは相手の話を聞いているというサインであり、日本語会話の一つの重要な特徴としてさまざまな研究がなされている。宮地（1959）は、聞き手の「とり」（聞いてい

るという言語行動を指す）に重点を置き、相づちの概念が聞き手の「黙・応・転・断」という 4 つの反応として整理されている。水谷信子（1984, 1988)、松田（1988)、渡辺（1994)、窪田（2000）などの研究では、相づちは日本語会話の円滑なコミュニケーションをおこなうために欠かせない要素であるとされ、相づちの頻度（水谷信子，1984 ; 小宮，1986 ; 黒崎，1987)、相づちを打つタイミング（水谷信子，1984, 2001 ; 小宮，1986 ; 黒崎，1987 ; 杉藤，1987 ; 今石，1992 ; メイナード，1993 ; Clancy et al, 1996 ; 郭末任，2003 ; 永田，2004)、相づちの機能（堀口，1988 ; 松田，1988 ; ザトラウスキー，1993 ; メイナード，1993 ; Mukai,1999）といった観点から、多数の研究結果が積み重ねられている。

中国語会話と日本語会話の相づちの対照研究としては、劉建華（1987)、楊晶（1999, 2000, 2004, 2006）の一連の研究がある。劉建華（1987）は電話会話資料の相づちについて考察し、中国語母語話者の相づちの頻度は日本語母語話者より低く、また日本語、中国語ともに文末に相づちを打つことが多いと報告している。楊晶（1999, 2000, 2004, 2006）も、中国語の相づちは日本語より少ないこと、中国語会話の相づちの打ち方は日本語会話より個人差が大きく、相づちを打つタイミングも異なること、中国人が非言語行動の相づち（微笑み、頷きなど）を好むのに対して、日本人は音声を発する相づちを好む、といったことが明らかにされている。これらの研究からは、日本語と中国語の会話の展開パターンが異なることが窺える。楊晶（2001）は、電話会話で使用される中国人日本語学習者の日本語の相づちが日本語母語話者の相づちよりも少ないことを指摘している。

日本語会話において、相づちは会話の展開に欠かせない要素である。水谷（1983, 1993）は、「対話」[注3]と「共話」[注4]の概念を提唱し、日本語の話し合いには「共話」の形態をとるものがかなりの割合を占めると述べている。堀口（2005）は、日本語母語話者の会話は一人が話し続けて、もう一人が相づちを打ちながら聞くという日本語会話の展開の姿を示している。

相づちが多用される日本語会話の展開様式については、次のような研究がある。大浜

---

[3] 対話とは二人の話し手がそれぞれ自分の発話を完結させてから相手の話を聞く形で、二人の間で問い、答えるというような話し方である。

[4] 共話とはあいづちにより話の流れをすすめ、促したり、話し手と聞き手の二人がかりで会話を完成させたりして、話し手と聞き手の明確な区別がなくなったような話し方である。

（1998）は、自由会話を分析し、日本語母語話者は「物語」の形で答えるというWatanabe(1993)、斎藤・徐・多田・大浜（1997）の指摘の検証をおこなっている。そして、日本語母語話者は直前の相手の発話を模倣する相づちである「繰り返し」の言語形式を使い、「繰り返し―物語」によって相手に話させる「話し手主導」のスタイルにより会話を展開することを明らかにしている。また、外国人留学生は直前の相手の発話から独立した質問発話を使用し、「問い―端的な答え」という「聞き手主導」のスタイルで会話を展開するということも指摘している。その後、森・前原・大浜（1999）では、自由会話以外の談話、例えば依頼・謝罪・勧誘などについて、大浜（1998）の指摘と同様の傾向が見られることを指摘し、「繰り返し」と「物語」を日本語会話の展開の特徴として結論づけている。斎藤・徐・多田・大浜（1997）では、外国人の行動と比較した場合、日本人には談話展開の非推進性、消極性とも言える性質が見られること、自分からイニシアティブを取らないことを指摘している。

福富（2005）の研究でも同様の傾向が報告されている。福富（2005）は、情報要求場面での日本語母語話者の談話展開について調査をおこない、日本語母語話者は質問に対して、主に「質問の答え＋追加情報」、「相手の発話の一部＋質問の答え」という形で応答するという結果を報告している。そして、新情報を得ることは単に相手の情報を得るためのものではなく、会話を円滑に進めるための手段であると指摘している。申媛善（2006）は、韓日母語話者の会話における情報の受信側の言語行動を研究し、日本語会話は相づちや感想を中心とした共話的な会話スタイルが主であると指摘している。

相づちに関連しては、植野（2012）、薄井（2010）などの物語の聞き手の振る舞いに関する分析から、楊虹（2015）は「話題上の聞き手」という概念を提案している。この概念は大谷（2015）の日英対照研究でも用いられている。日常的な意味での「聞き手」は、「うん」「はい」といった相づち的な反応しかせず、実質的な発話をおこなわないというイメージがあるが、「話題上の聞き手」はそれとは異なり、相手の発話を話題の流れの中で理解し、話題について語る相手をサポートする役割を果たすために、相づちのほか、評価、質問などの実質的な発話もおこなうとされている。このように、相づちを中心に聞き手の言語行動に注目する研究は、前節で述べた話者交替に注目した研究と密接な関係にある。

2.2.3　話題に注目した研究

2.2.3.1　話題内容の研究

話題内容に関しては、日本人大学生を対象とした三牧（1999, 2013）をはじめとして、日・中・韓の社会人を対象とした三牧・難波（2010）、台・日の女子大学生の会話（母語場面）を対象とした張瑜珊（2006a, 2006b, 2007）、日・台の大学生の会話（母語場面）を対象とした蔡諒福（2007）、日・台・中の社会人の会話（母語場面）を対象とした蔡諒福（2011）、日・中の社会人の会話（母語場面）を対象とした蔡諒福（2012）がある。また、奥山（2000, 2005）、全鐘美（2010a, 2010b）は韓国語会話と日本語会話（いずれも母語場面）の自己開示に関する研究である。

三牧（1999）は、会話には「初対面会話話題選択スキーマ」が存在することを主張している。その中で、日本人大学生の初対面会話の話題内容について考察し、大学生の話題内容を「大学生活」「所属」「居住」「共通点」「出身」「専門」「進路」「受験」という 8 つの話題カテゴリーにまとめ、その中で最も多く選択されたカテゴリーは「大学生活」であること、サークル活動を含め、学生が関心を持って活動を楽しんでいるスポーツや音楽などが話題となっていることが明らかにされている。また、話題内容を選ぶ際に、積極的に共通点を探索して話題化する発話行動、相違点に関して積極的に関心を示して話題化する発話行動、危険な話題を回避する発話行動が顕著に見られたことも報告している。

三牧・難波（2010）は、日本人の社会人のデータを英語・中国語・韓国語母語話者間のデータと対照し、「仕事」「自己紹介」「会話調査参加という共通体験」が共通点の多い話題項目であること、「居住地」「出身地」の選択率が文化ごとに異なること、「年齢」「恋愛・恋人・異性」「結婚」というプライベートな話題は韓国語で選択されているが、日本語と米語では回避される傾向があるということを明らかにしている。また、三牧（2013）は、話題選択ストラテジーとして「直前の発話の取り立て」、「基本情報交換期で獲得した情報の中からの選択」、「話題選択リストからの選択」という三つのストラテジーを提示している。

謝韞（2005）は、中国人女子大生同士、日本人女子大生同士の初対面会話の最初の 5 分間に注目して分析をおこない、中日両グループとも、最初の 5 分間では、会話参加者の名前、所属、研究テーマ、住まいなどの「身上的情報」に関する話題がそれ以外の話題よりも多く取り上げられる傾向が見られたことを報告している。

張瑜珊（2006a）は、台湾人女子大生同士、日本の女子大生同士の初対面会話の会話開始から 5 分間の内容を対象に分析をおこない、日本の初対面会話フレームは開始部では形式をより重視し、5 分以内の身上的情報収集は公的自己に留まること、台湾の初対面会話フレームは開始部で内容をより重視し、5 分以内の身上的情報収集はより私的自己に関する内容に偏ることを報告している。

蔡諒福（2011）は、日本・中国・台湾の社会人同士の母語場面の初対面会話を対象として、初対面会話の内容について分析をおこない、日本語会話は名前（姓）、居住（出身）地以外の個人情報の開示が少なく、仕事内容や専門、趣味・楽しみに関する話題に絞って、そこから派生した話題を客観的な立場から触れることが多いこと、これに対し、中国語会話は仕事（職業）の給料や待遇に関する内容が多いことを明らかにしている。

曹偉琴（1995）は、質問紙調査により、中国人・日本人大学生が初対面の相手に自分に関するどのような内容を開示するかについて意識調査をおこなった。結果として、日本人学生より中国人学生は、自己について他人に多く知らせ、選択した内容もより広いと報告されている。

2.2.3.2　話題の展開に関する研究

中国語会話と日本語会話の話題展開パターンに関しては、鮎澤（1987）、宇佐美（1993）、宇佐美・嶺田（1995）、虹（2004）、楊虹（2005a, 2005b, 2005c, 2006, 2007, 2008, 2011b, 2015）、中井（2003a, 2003b, 2003c）、河内（2003）、難波・三牧（2010）などの研究がある。

鮎澤（1987）は、会話展開の基本パターンを（1）あいさつ→あいさつ（2）質問→答え（3）陳述→反応（4）命令→応答の 4 つに分類して分析をおこおなっている。

難波・三牧（2010）は、中国語会話の話題展開のパターンに関して、ある話題に関して自分の意見を述べ合った後に新話題に移行することが多く見られることを指摘し、そのようなパターンを「議論型」と名付けている。日本語会話については、ある話題が選択されたら、「導入→展開→収束」という順に次の話題に移行することが多く見られるとし、「整然移行型」と名付けている。

楊虹（2015）は、中国語会話と日本語会話の話題展開パターンについて考察をおこない、日本語母語場面と比べて、中国語母語場面では話し手と聞き手の役割交替が頻繁に見られ、聞き手側だった参加者が話し手役割の発話をする側に回る場合が多いことを

報告している。また、日本語母語場面では、話題上の話し手と聞き手が比較的固定的であるのに対して、中国語母語場面では、会話参加者の双方が話し手役割をめぐって交渉する場面も多く見られるという特徴が明らかにされている。

話題の開始部と終了部に関しては、宇佐美（1993）が、すべての発話を「挨拶」「話題導入」「話題継続」（「挨拶」と「話題導入」以外の発話）の 3 種類に分類し、会話の「冒頭部」では互いの自己紹介から始まり、話題は質問形式で導入されていくことが多く、相づちの頻度が「終結部」より高いこと、そして、「終結部」の話題導入は質問形式ではなく、叙述形式でおこなわれることが多くなることを指摘している。相づちの頻度は「冒頭部」より低いということも明らかにされている。

話題開始の構造については、宇佐美・嶺田（1995）が「質問―応答型」と「相互話題導入型」という 2 通りのタイプに分けている。そして、日本語会話では、目上対目下の場合は「質問―応答型」が多く、目上の話者が話題を導入し会話をリードする傾向が強い一方で、同性あるいは同等の会話は「相互話題導入型」が多いということを明らかにしている。中国語会話の開始部に関して、刘虹（2004）は“询问式”（質問式：質問―応答）、“请求式”（要請式：「すみません」、「ちょっと」などの表現）、“介绍式”（紹介式：「はじめました」などの紹介）、“提供式”（提供式：助けの提供を申しだす）、“闲聊式”（おしゃべり式：沈黙を避けるための話しかけ）があると述べている。

話題開始に関しては、話題開始部の構造や話題開始表現、また話題開始における参加者のやりとりに関する研究がある。村上・熊取谷（1995）は、日本語会話の話題開始部の言語行動を「先導（initiation）」と「応答（response）」に分類している。中井（2003b）は、日本語会話の話題開始部においては、前の話題と関連づけて、「でも」「で」「じゃあ」などの接続表現、「あの」「えっと」「そうですねえ」などの相互行為指標表現、「何だったかなあ」などのメタ表現、語尾母音の引き延ばしなどが多用されており、終助詞「ね」や「よね」などの同意要求の表現が文末に使われることを明らかにしている。楊虹（2005a）は、日本語母語場面の話題開始表現として「話題となる事柄を際立たせる表現」（例えば、①提題表現、②列挙、自己引用表現、③くり返し・倒置表現）、「認識の変化を示す表現」、「言いよどみ表現」、「接続表現」、「メタ言語表現」、「呼びかけ表現」を挙げている。楊虹（2006）は、話題開始のプロセスに「即受入れ型」、「質問攻め型」、「窺い合い型」という三つのパターンがあることを示し、日本語母語場面の話題開始のプロセスについて考察している。楊虹（2011b）は、中日母語話者の話題開始部のやり

とりにおける相互行為のプロセスについて分析をおこない、話題導入発話から話題確立まで（1）即時的開始と（2）漸次的開始（(a）質問―応答連続型、(b）相互型、(c）確認連鎖型）が見られることを指摘している。また、中国語母語場面では話題開始のプロセスが短く、相手の語りたいことを即座に取り上げるのが基本姿勢であるのに対し、日本語母語場面では相手の出方を窺いながら徐々に情報を添加していくことを指摘している。

話題の終了部に関して、中井（2003b）は、日本語会話の話題終了部を研究し、評価表現を用いて話題を終了させることが多いこと、そして、形容詞、形容動詞、動詞及び「ね(ー)」「よね」等の終助詞を用いる傾向があることを明らかにしている。楊虹（2007）は、中日母語場面の話題終了プロセスを分析して、「協働的終了」、「一方的終了」、「突発的終了」が中日の会話で共通して見られること、そして、日本語母語場面では「協働的終了」が最も基本的な話題終了のパターンであるのに対して、中国語母語場面では基本的な話題終了のパターンが見られないことが明らかにされている。

話題転換に関する中国語会話と日本語会話の対照研究としては、上述の楊虹（2005b）があげられる。その中で、日本語母語話者は主に協力的なやり取りのプロセスを経て次の話題を導入する協働的転換パターンが多く見られること、そして、中国語母語話者はそれ以外に、話題の終了ストラテジーがないまま話題導入をおこなう突発的転換、無表示転換も 5 割程度見られるということが明らかにされている。

2.3　本研究の課題

ここまで紹介した中で、本研究の課題、すなわち、①会話における交換される情報の内容（どのような情報が交換されるか)、②会話における情報交換の様式（情報がどのように交換されるか）という 2 点に関する、日本語と中国語の対照研究と特に密接な関係を有する（あるいはヒントを提供する）のは、以下の知見である。

①会話における交換される情報の内容

・日本語会話は名前（姓)、居住（出身）地以外の個人情報の開示が少なく、仕事内容や専門、趣味・楽しみに関する話題に絞って、そこから派生した話題を客観的な立場から触れることが多い。中国語会話は仕事（職業）の給料や待遇に関する内容が多い。（蔡諒福，2011）

・日本の初対面会話フレームは開始部では形式をより重視し、5 分以内の身上的情報収集は公的自己に留まる。台湾の初対面会話フレームは開始部で内容をより重視し、5 分以内の身上的情報収集はより私的自己に関する内容に偏る。（張瑜珊，2006a）

②会話における情報交換の様式

・中国語母語話者は簡単に発話権を譲らず、他人の話す権利より自分の権利を重んじるのに対し、日本語母語話者は話し手の発話の関連する短い発話を入れて、協力的な姿勢を示す。（賈琦，2008）

・小集団ディスカッションの場面で、中国語グループの話者交替の回数が日本語グループの 4 倍になる。（張麗，2010）

・日本語母語話者は主に自ら情報を提供する発話により会話を展開するのに対し、韓国語母語話者は自ら情報を提供する発話と情報要求を重ねる発話の両方を同程度に用いる。（梅木，2009）

・日本語会話の turn-taking は主流ターンに非主流ターンが常に挟み込まれる。韓国語会話の turn-taking は実質的な内容を含む主流ターンが交替される。（金志宣，2000, 2001）

・中国語会話の相づちは日本語会話より少ない。相づちの打ち方も日本語会話より個人差が大きく、相づちのタイミングも異なる。（楊晶，1999, 2000, 2001, 2004, 2006）

・日本語母語話者は、「繰り返し―物語」によって相手に話させる「話し手主導」のスタイルにより会話を展開する。外国人留学生は、「問い―端的な答え」という「聞き手主導」のスタイルで会話を展開する。（大浜，1998）

・中国語母語場面では話題開始のプロセスが短く、相手の語りたいことを即座に取り上げる。日本語母語場面では相手の出方を窺いながら徐々に情報を添加していくことを指摘している。（楊虹，2011b）

・日本語母語場面では、話題上の話し手と聞き手が比較的固定的であるのに対して、中国語母語場面では、会話参加者の双方が話し手役割をめぐって交渉する場面も多く見られる。（楊虹，2015）

・中国語会話は、ある話題に関して自分の意見を述べ合った後に新話題に移行することが多く見られる（議論型）。日本語会話は、ある話題が選択されたら、「導入→展開→収束」という順に次の話題に移行することが多く見られる（整然移行型）。（難波・三

牧，2010）

本研究では、これらの知見をふまえながら、第 1 章で述べた中国語母語話者同士、日本語母語話者同士の初対面自由会話のデータ（中国語母語場面 19 組、日本語母語場面 18 組の初対面自由会話の録音データ、いずれも 20 分＋α）の分析をおこなう。特に、第 3 章、第 4 章では、これまでなされなかった試みとして、「会話開始から 5 分間の間」と「5 分以降」の話題・自己開示の内容の変化について分析をおこなう。

2.4　分析のための概念について

本節では、分析のための基本的な概念について述べる。

2.4.1　会話参加者の役割

会話参加者には、「話し手」と「聞き手」という役割分担がある（Hymes, 1962）。何か発話をすれば話し手になるが、発話の中には「情報提供者」（楊虹（2015）のいう「話題上の話し手」）として発話する場合と、「情報受信者」（楊虹（2015）のいう「話題上の聞き手」）として発話する場合とがある。

会話はある用件や話題をめぐって開始・展開され、その話題についての話が満たされることによって自然な終結を迎え、そこで会話を終えたり、新しい話題に転換したりする。会話参加者はこのプロセスにおいて、相手の質問に答えたり、あるいは陳述の発話をして自発的に情報を提供したりする。このとき、話し手は「情報提供者」の役割を担っていると考えられる。また、相手に新しい情報を要求するための質問をしたり、すでに提供された情報について確認したり、黙って相手の発話を聞いたり、相づちを打ったりする。このとき、話し手は「情報受信者」の役割を担っていると考えられる。ここでは、情報提供者と情報受信者を次のように定義する。

情報提供者　相手の質問や確認に応答する、自発的に客観的な情報や主観的な意見・評価・考えなど相手に伝えるといった役割を担う会話参加者。

情報受信者　質問をおこなう、すでに提供している情報に対する確認する、相づち（相づち詞、繰り返し、先取り、言い換え、コメント）を打つといった役割を担う会話参加者。

話者交替に注目した研究においても、聞き手の言語行動に注目した研究においても、日本語の会話の展開の中では相づちの使用が不可欠であり、場合によっては「相づち―相づち」だけでも話題を展開するが、中国語母語話者は相づちをそれほど多用しない。相づちは発話の一種であり、相づちがなされたということは、ある意味では話者交替が起こったともいえるが、情報提供者の交替は起こっていない。会話参加者がどのように話題の展開に参与するかという観点から言えば、発話者の交替ではなく、情報提供者と情報受信者の役割交替を中心に考えるほうがよいと考えられる。Turn-taking に基づく研究でも、相づちはターン交替と認めないという考えが一般的である。伊藤（1993）は、相づちの後に情報を短く付け加えて答えるときのような発話も相づちに含めるべきであると提案しているが、ここでは相づちの範囲をそこまで広げることをせずに、第１章でも述べた杉戸（1987：88）の言う「相づち的な発話」を「相づち」としてとらえることにする。

・「相づち的な発話」とは、「ハー」「アー」「ウン」「アーソウデスカ」「サヨーデゴザイマスカ」「エーソウデスネ」などの応答詞を中心にする発話。先行する発話をそのままくりかえす、オーム返しや単純な聞きかえしの発話。「エーッ！」「マア」「ホー」などの感動詞だけの発話。笑い声。実質的な内容を積極的に表現する言語形式（たんなるくり返し以外の、名詞、動詞など）を含まず、また判断・要求・質問など聞き手に積極的なはたらきかけもしないような発話。　（杉戸 1987：88）

2.4.2　分析単位としての「発話」

南（1987）は、会話を研究する際の単位設定の必要性について、「語彙の調査・研究においては、単語あるいは形態素といった単位を用いる。文法研究でも、文、各種の句、単語、形態素などの単位を使うことによって文法体系を記述する。談話の研究においても、そこで使う単位を決めないことには、分析の対象を資料から切り取ることができない。たとえば、談話の種類と語彙の現れ方との関係、談話の種類と敬語要素との関係を分析する場合にも、対象とする談話の範囲を確定するために、まず単位をきめておく必要がある」と述べている。

従来の研究では様々な単位で談話の研究がおこなわれている。「会話・談話」という

大きな単位で研究をおこなうもの（国立国語研究所，1971、南，1972）もあれば、佐久間（1987)、ザトラウスキー（1993）のように「話段」という単位で研究をおこなうもの、杉戸（1987）のように「発話」を単位として研究をおこなうものもある。「発話」に対して、国立国語研究所（1987）は「発話機能」の観点を取り入れた分析をおこなっており、ザトラウスキー（1993）も、電話会話の冒頭部と終了部から全体として会話の構造を重層的に明らかにしている。そのほか、熊井（1992）のように、「move（意味公式)」を単位とした研究もある。

本研究では、会話を構成する最も基本的な単位である「発話」を分析単位とする。杉戸（1987）は、「発話」について、「一人の参加者のひとまとまりの音声言語連続（笑い声や短いあいづちも含む)」であり、他の参加者の音声言語連続とかポーズによって区切られる」としている。

2.4.3　「発話」の種類

文の種類として、「平叙文」「疑問文」「感嘆文」「命令文」という分類がなされている（国語学辞典，1980)。会話における「発話」は、会話参加者の表現意図が外的要素としての語句連結およびイントネーションと結合することによって成り立つ（国立国語研究所，1960)。「発話」は、会話参加者により、社会習慣としての命令、質問、叙述、応答といった様々な表現意図で用いられる。教室や裁判所などの特殊の場面では命令があり得るが、雑談や日常の自由会話でよく見られるのは質問、質問に対する応答、叙述、依頼などであろう。これらの発話については、国立国語研究所（1987)、中田（1990)、ザトラウスキー（1993)、熊谷（1997, 1998, 2000）等により、より詳しく分類されている。

国立国語研究所（1983）は、「発話」の言語形式を会話参加者の表現意図と対応させる形で分類をおこなっている。具体的には、「相手に対して求めるところのない表現意図」として「詠嘆表現」「判叙表現」、「相手に対して求めるところのある表現意図」として「要求表現」、「相手に対する受容・応答の表現意図」として「応答表現」があげられている。

また、国立国語研究所（1987)、中田（1990)、ザトラウスキー（1993)、熊谷（1997, 1998, 2000）等は、会話における発話を「機能」で分類することによって、会話の仕組みを説明しようとしている。

ザトラウスキー（1993）は国立国語研究所（1987）の「実質的な発話」と「相づち的な発話」を基にして、「発話」を 12 種類の機能に分けている。

①注目要求
②談話表示
③情報提供
④意思表示
⑤同意要求
⑥情報要求
⑦共同行為要求
⑧単独行為要求
⑨言い直し要求
⑩言い直し
⑪関係作り・儀礼
⑫注目表示

このうち、⑫注目表示にはまた「継続」、「承認」、「確認」、「興味」、「感情」、「共感」、「感想」、「否定」、「終了」、「同意」、「自己」という項目があるとされている。

本研究では、情報交換の観点から考察をおこなうため、③情報提供、⑥情報要求という二つの発話機能を持つ発話を取り出した。また、「相づち的な発話」（国立国語研究所, 1987）を「情報受取発話」とする。会話の展開にともなう情報交換の観点から、「発話」を機能によって「情報提供発話」、「情報受取発話」、「情報要求発話」の 3 つに分類し、次のように定義する。

「情報提供発話」：新しい情報を提供する発話。具体的には、相手の質問や確認に応答する発話、あるいは自発的に客観的な情報、主観的な意見や評価や考えなど相手に伝える発話。

「情報受取発話」：新しい情報を受け取って、反応を示す発話。具体的には、相づち詞を含め、相づち的な表現、繰り返し、先取りなどの相づち的な発話。

「情報要求発話」: 新しい情報を引き出す発話。具体的には、相手に質問あるいは確認をおこない、疑問類の発話。

「情報受取発話」に関しては、一人の話者が何か話すのと並行的に、もう一人の話者が「うんうん」「へー」と相づちを打つことがある。相づちはまた、一人の話者の話のポーズのところに出現することもある。さらに、一人の話者の話のポーズのところで相づちを打ち、その後相づちを打つ話者が話し始めることもある。

・相手の話と並行して現れる「情報受取発話」

20 代日女	へぇー　　うんうん
同年日女	もうずっと大学の学科の私の友達だった子、学科の教室がこの辺だったから

（金珍娥，2013　p.105 より）

・相手の話のポーズに現れる「情報受取発話」

日女基準	あー
日女同年	戻って来てって感じなんですけど。　　その前も、高校でちょっと教えてて。

（金珍娥, 2013　p.106 より）

・相手の話のポーズに現れて、次に話し始める場合の「情報受取発話」

日女基準	え一。高校で何を教えて。
日女同年	その前も、高校でちょっと教えてて。

（金珍娥，2013　p.106 より）

会話が展開する中で、一人の会話参加者は「情報提供者」になったり「情報要求者」になったりしながら、もう一人の会話参加者と情報を共有して会話を進める。情報提供者は「情報提供発話」を、情報受信者は「情報要求発話」あるいは「情報受取発話」をおこなう。

以上述べた本研究における各概念は次の図 2－1 のように示すことができる。

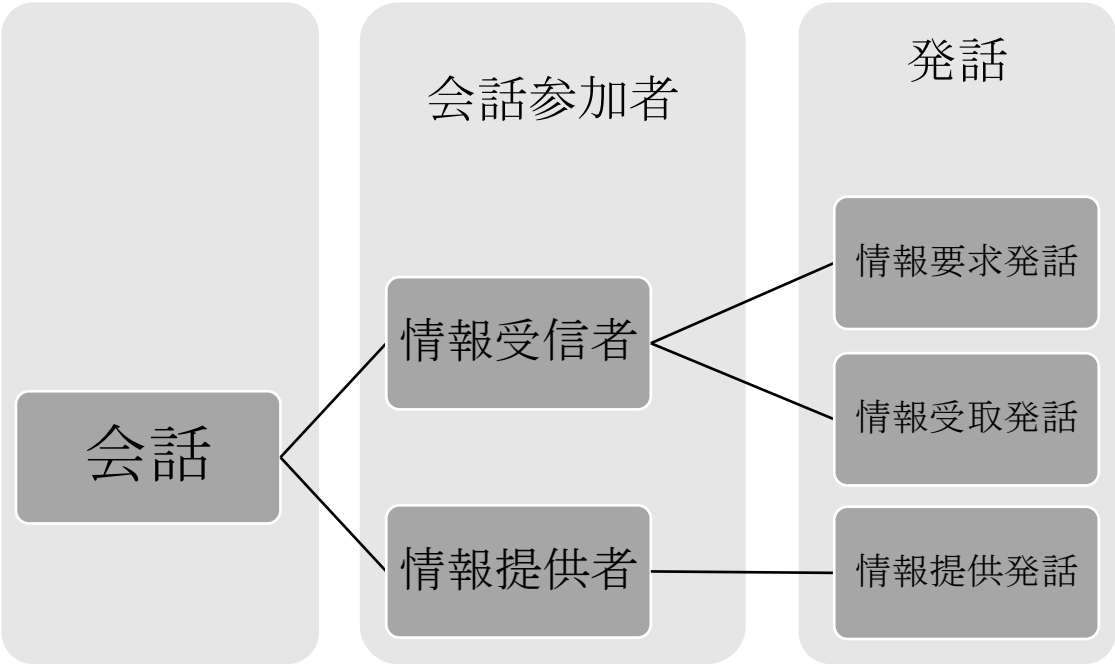

図 2－1　会話参加者と発話との関係

会話参加者について、橋内（1988）は、話し手は聞き手からのフィードバックに注意し、相づち等の反応で聞き手が関心をもってくれているかどうか判断し、傾聴せざるを得ないような内容を口にしたりもして、聞き手を自分の世界に引き込もうとさえするとしている。さらに、発話の途中で自己訂正したり相手に訂正してもらったりする点に着目し、「会話は正に共同作業の賜物である」としている。一人の会話参加者が情報送信者として情報を提供した場合は、もう一人の会話参加者が情報を受け取っているかどうか、理解するかどうかの反応を示す。また、一人の会話参加者がずっと情報送信者の役割に固定されるわけではなく、二人の話者が交替で情報送信者と情報受信者の役割を担当する。会話参加者が情報送信者と情報受信者の役割を適切に分担するのは、会話参加者間の協力が必要であり、会話の円滑な展開には不可欠である。

これらの会話を円滑に展開させるための役割分担のあり方は、言語によって異なる。中国語会話と日本語会話の展開の中で、それぞれの会話参加者がどのように情報送信者と情報受信者の役割を分担するのか、またそれぞれの会話参加者の立場がどのように情報送信者と情報受信者の間で交替するのかを明らかにする必要がある。

文に構造があるように、会話という談話にも構造がある（橋内，1988）。会話が展開する中で、「情報要求発話」「情報受取発話」「情報提供発話」の組み合わせにも秩序が

ある。つまり、この 3 種類の発話が無秩序に出現するわけではなく、その組み合わせに一定の秩序があると考えられる。しかし、中国語会話と日本語会話は展開の様式が異なるため、発話の組み合わせの秩序にも差異があるだろう。中国語会話と日本語会話において、この 3 種類の発話がどのような組み合わせでどのように会話を展開するのかは興味深い問題である。

第 3 章　中国語会話と日本語会話の話題選択の研究

3.1　はじめに

3.2　先行研究

3.2.1　研究の背景

3.2.2　話題選択に関する研究

3.3　分析方法

3.4　結果と考察

3.4.1　大話題の数

3.4.2　大話題の種類

3.4.3　共通して出現率が高い大話題

3.4.4　出現率が異なる大話題

3.4.5　会話開始から 5 分間の大話題と 5 分以降の大話題

3.4.6　会話開始の様式と大話題の導入のされ方

3.5　まとめ

第 3 章　中国語会話と日本語会話の情報内容の研究

3.1　はじめに

人と人がコミュニケーションをおこなう際、会話は一つの重要な手段である。中でも、初対面会話は人間関係形成の出発点であり、コミュニケーション活動において重要な役割を果たす。発話によって相手に伝わるのは、内容に関するメッセージだけではない。相手とどのような関係を築きたいか等のメタメッセージも同時に伝わる。しかし、メタメッセージの解釈は会話の参加者の会話のスタイルや、相手との関係の捉え方によって異なるため、発話者の意図とは異なる意味が伝わる場合もある。例えば、日本語では、友人同士が互いに褒め合うのは問題ないが、学生が先生の講演を聞いた後、「先生の講演は素晴らしかったですね」と直接的な褒めことばを述べると、感謝の気持ちを伝えるつもりでも失礼になってしまう（水谷修，1982）。

三牧（1999）によれば、文化を共有する集団の中では初対面会話における「話題選択スキーマ」が共有されているが、異なる文化間・社会間ではその話題選択スキーマが異なることがある。中国人と日本人の接触場面（以下「中日接触場面」）の場合、互いに同じ言語を使用していても、自分の母語の習慣に影響され、互いの話題選択について違和感を抱く可能性がある。異文化の人間が初対面で話す場合は、相互の言語文化の特徴を理解することが重要である。

本章では、中国人と日本人の大学生・大学院生同士による初対面会話のデータを用い、中国語グループと日本語グループの会話の内容を話題ごとに分類し、それぞれのグループの話題の選択傾向を明らかにする。また、中国語母語話者と日本語母語話者がそれぞれどのように初対面の相手と会話を切り出すか、そして、ある話題が選択されたらどのように開始するのかについても考察する。

分析に用いるデータは、第 1 章で述べた中国語母語話者同士、日本語母語話者同士の初対面自由会話のデータ（中国語母語場面 19 組、日本語母語場面 18 組の初対面自由会話の録音データ）である。会話は二人一組のペアで行われ、長さは 20 分である。

3.2　先行研究

3.2.1　研究の背景

初対面会話を扱っている先行研究では、主に「会話の相手に関する情報を持たず、社

交的な場面で一定時間、自由に会話する場面」を研究対象としている。このような場面の会話では、会話を円滑に進めるための前提として、相互に関する情報交換が活発に行われる（三牧，2013）。談話分析の分野では、日本語母語話者を対象とした単一母語場面の研究、日韓対照研究、日中対照研究、および日本語学習者と日本語母語話者の接触場面の研究がある。例えば、三牧（1999）は、文化を共有する集団には一般的あるいは典型的な知識の集合であるスキーマが共有されており、話題選択に関しても「初対面会話における話題選択スキーマ」が共有されていることを指摘して、日本人大学生の初対面会話の話題内容について考察している。

対照研究としては、張瑜珊（2006a，2006b）が台湾人女子大生同士、日本の女子大生同士の初対面会話を対象とした研究をおこなっている。張瑜珊（2006a）は会話開始から 5 分の間に会話の相手に要求する身上的情報の内容について、張瑜珊（2006b）は 20 分間の会話の「話題タイプ」（その場で誘発されるトピック、百科事典的トピック、自己に関するトピック、相手に関するトピック、第三者に関するトピック）の種類について考察している。謝韞（2005）は、中国人女子大生同士、日本人女子大生同士の初対面会話を対象として、会話開始から 5 分間の話題内容について研究をおこなっている。蔡諒福（2011）も、日本・中国・台湾の社会人同士の母語場面の初対面会話を対象として、初対面会話の内容について分析をおこなっている。

3.2.2　話題選択に関する研究

謝韞（2005）は、中国人女子大生同士、日本人女子大生同士の初対面会話の最初の 5 分間に注目して分析をおこなっている。その結果、中日両グループとも、最初の 5 分間では、会話参加者の名前、所属、研究テーマ、住まいなどの「身上的情報」に関する話題がそれ以外の話題よりも多く取り上げられる傾向が見られたと報告している。ただし、それぞれのグループにおいて具体的にどのような身上的情報が話題にされていたかについては、分析がなされていない。

張瑜珊（2006a）も、台湾人女子大生同士、日本の女子大生同士の初対面会話の会話開始から 5 分間の内容を対象に分析をおこなっている。その中で、中国語場面（台湾人女子学生）では、会話開始から 5 分の間に会話参加者の名前、所属、研究テーマ、そして住まいなどに関する身上的情報が、「自己紹介」と見なすことができるひとまとまりの部分に出現したが、日本語場面（日本人女子学生）の「自己紹介」では氏名の交換の

みがなされていたことが報告されている。氏名以外の情報は、会話の展開にともない自分から提供するか、相手の質問によって引き出されるかであった。また、日本人女子大生同士の初対面会話は、まず「あいさつ」などの定型表現で始められ、次いで、自分自身の身上的情報を述べることで相手にもそうした情報提供を暗に求めるというやりとりで会話が推移していくという特徴があるとされている。他方、台湾人女子大生は定型表現の使用は見られず、直ちに相手に質問することにより相手から身上的情報を獲得し、会話を展開していくという特徴があるとされている。

張瑜珊（2006b）は、台湾人女子大生同士、日本の女子大生同士の初対面会話（20分）の「話題タイプ」の種類について考察し、台湾人女子学生、日本人女子学生ともに、「相手に関するトピック」＞「百科事典的トピック」＞「自己に関するトピック」および「その場で誘発されるトピック」という順に多く、最も少ないのは「第三者に関するトピック」であったことが報告されている。

蔡諒福（2011）は、日本・中国・台湾の社会人を対象に、母語場面ごとの話題選択傾向を比較している。その結果、日中台ともに、社会人の初対面会話においては、個人情報および仕事に関係に関する話題が多く選択されていた。日本語母語話者は、名前と居住地以外の個人情報の開示が少なく、仕事内容、専門、趣味に関する話題に絞り、そこから派生した話題に客観的な立場から言及することが多かった。一方、中国語母語話者は、給料のほか、男性ペアでは「住宅購入の価格」の話題が多いことが分かった。

従来の中日対照研究は、主に会話開始から 5 分間の話題の内容に注目している。この 5 分間の内容は個人情報の開示に集中していることが指摘されているが、会話開始から 5 分以降の話題展開の内容についてはよくわかっていない。張瑜珊（2006b）は 20 分の会話の「話題タイプ」の種類について考察しているが、20 分の会話の中でどのように話題が変化したかは分析されていない。

そこで本研究では、第 1 章で紹介した中日両グループ、各 20 分の会話で出現する話題について分析をおこなうとともに、「会話開始から 5 分間」と「5 分以降」で出現する話題の比較をおこなう。

3.3　分析方法

会話の話題は「(会話の問題とされている時点において）話されていること」と考えられ、会話参加者たちによって共有され、展開される（山本，2003)。三牧（1999）は、

「話題」を「会話の中で導入、展開された内容に結束性を有する事柄の集合体」と定義し、その発話の集合体に共通した概念であると定義している。話題には階層性があり、複数の関連するトピックがより大きなトピックとしてのまとまりを形成する（村上・熊取谷，1995）。

本研究では、三牧（1999）の話題の定義に従って、日本語グループと中国語グループの会話内容を「話題」に区分した。具体的には、話者双方の間に少なくとも 3 回のターンの往復を有する最小限の意味のまとまりがある部分を一つの「話題」とする。前述のように、話題は内容的に階層性があり、複数の関連する話題がさらに大きい話題を構成する。ここでは、蔡諒福（2011）を参考にして、一つの話題の中で複数の細かい話題が出現する場合、上位にある話題を「大話題」と呼び、大話題に含まれる下位の話題を「小話題」と呼ぶ。一つの話題が単独で取り上げられ、細かい話題が出現しない場合は「大話題」と見なした。これは、本研究において「大話題」を中心に会話の展開を見るためである。

本研究でも、すべての「話題」を「大話題」と「小話題」に分けた。その分け方は次の表 3－1 のとおりである。表 3－1 は、CF1301 と CF1302（いずれも女性）の中国語会話のデータに観察されたものである。

表 3－1　話題の区分

大話題	**①名前**
	（小話題） 名前　⇒　名前の書き方　⇒　名前　⇒　名前の書き方　⇒　名前の由来
大話題	**②趣味**
大話題	**③ダンス**
	（小話題） ダンス　⇒　ダンスの勉強
大話題	**④音楽**
	（小話題） 好きな歌⇒カラオケ
大話題	**⑤日常事**
大話題	**⑥ドラマ**
大話題	**⑦漫画**
大話題	**⑧買い物**
	（小話題） 買い物の場所　⇒　買い物の経験

表 3－1 に示すように、会話が開始してから一定時間に現れた大話題は、「①名前→②趣味→③ダンス→④音楽→⑤日常事→⑥ドラマ→⑦漫画→⑧買い物」というように推移している。また、「①名前」の中で、「一人の話者の名前」、「その人の名前の書き方」、「もう一人の話者の名前」、「その人の名前の書き方」、「名前の由来」という小話題が含まれ、「名前⇒名前の書き方⇒名前⇒名前の書き方⇒名前の由来」という順に推移している。「②趣味」には「小話題」が出現しておらず、趣味という単一の話題しか出現していない。このような場合は「大話題」と見なした。

上の会話では、8 つの「大話題」が選択された。そのうち、「名前」「ダンス」「音楽」「買い物」の 4 つの「大話題」が 11 個の「小話題」から構成されている。

3.4　結果と考察

上述の方法で会話を話題ごとに分け、話題数と話題の内容について分析をおこなう。

3.4.1　大話題の数

中国語母語話者 19 組と日本語母語話者 18 組のデータ、合計 37 組の音声データを文字化し、大話題を分類した結果、次の表 3－2 のような結果となった。

表 3－2　両グループの大話題の数

	大話題の延べ出現頻度	1 組あたりの平均	大話題の種類（異なり）	1 組あたりの平均
中国語グループ（19 組）	580	31	75	22
日本語グループ（18 組）	368	20	61	15

中国語母語話者は延べ 580、日本語母語話者は延べ 368 の大話題が出現した。また、詳しくは次節で述べるが、会話中に出現した大話題の種類（異なり）は 84 種類であり、中国語グループはそのうち 75 種類を選択し、日本語グループは 61 種類の話題を選択した。

中国人グループと日本人グループのペア数が異なるため、大話題の数を直接比べるのではなく、1 組あたりの平均を比較すると、中国語グループは 31、日本語グループは 20 であった。大話題の異なりの 1 組当たりの平均は、中国語グループは 22 であり、日本語グループは 15 である。延べ、異なりともに、中国語グループの方が多い。

表には示していないが、同じ大話題を再度選択するかどうかについて見ると、中国語グループの話題の再現率は 30%、日本語グループの話題の再現率は 25%であり、中国語グループのほうが若干多い。

また、大話題と小話題の延べ出現頻度は、次の表 3－3 のとおりである。

表 3－3　大話題と小話題の関係

	大話題	小話題
中国語グループ	580	270
日本語グループ	368	401

表 3－3 を見ると、大話題の数は中国語グループのほうが多いが、小話題の数は日本語グループのほうが多い。中国語よりも日本語のほうが、一つの大話題の中でより多くの小話題が取り上げられるということである。日本語母語話者は一つの話題についていろいろな角度から話をしてから、次の話題に移行するが、中国語グループは一つの話題を続けずにすぐに次の話題に移行するということが窺える。

3.4.2　大話題の種類

中国語グループと日本語グループの会話では、合計 84 種類の大話題が出現した。中国語グループは 75 種類を選択し、日本語グループは 61 種類の話題を選択した。84 種の大話題は、①【個人情報】、②【他者】、③【学校生活】、④【好き嫌い】、⑤【進路】、⑥【社会】、⑦【その他】という 7 つのカテゴリーにまとめることができる。次の表 3－4 は、日本語会話 18 組、中国語会話 19 組のうち、どれだけの組に当該の大話題が出現したかを示したものである（数字は当該の大話題が 1 回以上出現した組の数）。中国語グループ、日本語グループの類似と相違については次の 3.4.3.で述べる。

表 3－4　大話題の種類と出現した組の数

			中国語グループ（19 組）		日本語グループ（18 組）	
			実数	割合	実数	割合
個人情報	1	名前	15	79%	18	100%
	2	年齢	2	11%	5	28%
	3	生年月日	1	5%	2	11%
	4	出身地	16	84%	6	33%
	5	出身校	1	5%	6	33%
	6	自我	7	37%	0	0%
	7	学歴	3	16%	5	28%
	8	住まい	6	32%	5	28%
	9	学科	3	16%	4	22%
	10	専攻	17	89%	15	83%
	11	所属	8	42%	4	22%
	12	給料	3	16%	0	0%
	13	実家	2	11%	9	50%
	14	職位	2	11%	0	0%
	15	学年	12	63%	11	61%
	16	恋	7	37%	1	6%

他者	17	同級生	6	32%	3	17%
	18	家族	7	37%	3	17%
	19	友人	8	42%	5	28%
	20	先生	6	32%	5	28%
	21	先輩	5	26%	0	0%
	22	人間関係	13	68%	8	44%
学校生活	23	帰省	9	47%	0	0%
	24	通学	6	32%	5	28%
	25	イベント	6	32%	4	22%
	26	サークル	4	21%	13	72%
	27	日常事	9	47%	9	50%
	28	授業	10	53%	6	33%
	29	勉強	9	47%	9	50%
	30	試験	7	37%	1	6%
	31	アルバイト	7	37%	6	33%
	32	資格試験	12	63%	4	22%
	33	奨学金	1	5%	0	0%
	34	入党	1	5%	0	0%
	35	方言	2	11%	0	0%
	36	寮生活	9	47%	3	17%
	37	大学関係	10	53%	4	22%
	38	クラス	8	42%	1	6%
	39	実習	2	11%	2	11%
	40	インターネットの使用	7	37%	0	0%
	41	休暇	4	21%	0	0%
	42	担当	1	5%	0	0%
	43	運転	2	11%	1	6%
	44	高校生活	6	32%	3	17%
	45	ゼミ	0	0%	3	17%
	46	卒論	0	0%	3	17%
	47	留学	0	0%	6	33%
	48	ボランティア	0	0%	3	17%

好き嫌い	49	ゲーム	3	16%	1	6%
	50	食事	3	16%	1	6%
	51	買い物	6	32%	0	0%
	52	遊び	6	32%	1	6%
	53	スポーツ	7	37%	5	28%
	54	習い事	5	26%	3	17%
	55	旅行	0	0%	3	17%
	56	アイドル	3	16%	0	0%
	57	漫画	2	11%	0	0%
	58	映画	4	21%	2	11%
	59	ダンス	1	5%	0	0%
	60	音楽	1	5%	1	6%
	61	パソコン	1	5%	0	0%
	62	趣味	10	53%	2	11%
	63	酒	0	0%	1	6%
進路	64	大学院入試	9	47%	3	17%
	65	大学入試・志望	7	37%	4	22%
	66	授業の志望	10	53%	5	28%
	67	就職	11	58%	3	17%
	68	軍隊	2	11%	1	6%
	69	公務員	2	11%	0	0%
社会	70	出来事	3	16%	1	6%
	71	うわさ	2	11%	0	0%
	72	地域情報	11	58%	5	28%
	73	80 後・90 後	1	5%	0	0%
	74	社会マナー	1	5%	0	0%
	75	社会知識	0	0%	3	17%
その他	76	連絡手段	3	16%	0	0%
	77	誘い	2	11%	0	0%
	78	当日のこと	3	16%	2	11%
	79	あいさつ	7	37%	16	89%
	80	約束	2	11%	0	0%
	81	依頼	1	5%	0	0%
	82	場面による発話	3	16%	4	22%
	83	洋服の場所	0	0%	1	6%
	84	外見	0	0%	1	6%

また、次の表 3－5 は、それぞれの大話題の出現頻度を示したものである。中国人学生で580回、日本人学生で368回出現した大話題のうち、中国人学生は557回(96.0%)、日本人学生は 341 回（92.7%）が、①【個人情報】、②【他者】、③【学校生活】、④【好き嫌い】、⑤【進路】、⑥【社会】までの話題カテゴリーで占められていた。

表 3－5　大話題の種類と出現頻度

			中国語グループ（19 組）		日本語グループ（18 組）	
			実数	割合	実数	割合
個人情報	1	名前	15	2.6%	18	4.9%
	2	年齢	2	0.3%	5	1.4%
	3	生年月日	1	0.2%	2	0.5%
	4	出身地	20	3.4%	6	1.6%
	5	出身校	1	0.2%	7	1.9%
	6	自我	8	1.4%	0	0.0%
	7	学歴	3	0.5%	5	1.4%
	8	住まい	6	1.0%	5	1.4%
	9	学科	3	0.5%	4	1.1%
	10	専攻	33	5.7%	17	4.6%
	11	所属	9	1.6%	4	1.1%
	12	給料	4	0.7%	0	0.0%
	13	実家	2	0.3%	11	3.0%
	14	職位	3	0.5%	0	0.0%
	15	学年	13	2.2%	15	4.1%
	16	恋	11	1.9%	2	0.5%
		計	134	23.1%	101	27.4%
他者	17	同級生	9	1.6%	3	0.8%
	18	家族	8	1.4%	5	1.4%
	19	友人	16	2.8%	9	2.4%
	20	先生	7	1.2%	7	1.9%
	21	先輩	5	0.9%	0	0.0%
	22	人間関係	29	5.0%	14	3.8%
		計	74	12.8%	38	10.3%

学校生活	23	帰省	10	1.7%	0	0.0%
	24	通学	9	1.6%	11	3.0%
	25	イベント	8	1.4%	6	1.6%
	26	サークル	5	0.9%	22	6.0%
	27	日常事	16	2.8%	9	2.4%
	28	授業	20	3.4%	8	2.2%
	29	勉強	17	2.9%	21	5.7%
	30	試験	9	1.6%	1	0.3%
	31	アルバイト	11	1.9%	10	2.7%
	32	資格試験	18	3.1%	6	1.6%
	33	奨学金	1	0.2%	0	0.0%
	34	入党	1	0.2%	0	0.0%
	35	方言	2	0.3%	0	0.0%
	36	寮生活	14	2.4%	4	1.1%
	37	大学関係	12	2.1%	7	1.9%
	38	クラス	11	1.9%	1	0.3%
	39	実習	2	0.3%	2	0.5%
	40	インターネットの使用	7	1.2%	0	0.0%
	41	休暇	4	0.7%	0	0.0%
	42	担当	2	0.3%	0	0.0%
	43	運転	2	0.3%	1	0.3%
	44	高校生活	9	1.6%	4	1.1%
	45	ゼミ	0	0.0%	6	1.6%
	46	卒論	0	0.0%	5	1.4%
	47	留学	0	0.0%	10	2.7%
	48	ボランティア	0	0.0%	4	1.1%
		計	**190**	**32.8%**	**138**	**37.5%**
好き嫌い	49	ゲーム	5	0.9%	1	0.3%
	50	食事	4	0.7%	1	0.3%
	51	買い物	10	1.7%	0	0.0%
	52	遊び	7	1.2%	1	0.3%
	53	スポーツ	9	1.6%	8	2.2%
	54	習い事	7	1.2%	4	1.1%
	55	旅行	0	0.0%	4	1.1%
	56	アイドル	4	0.7%	0	0.0%
	57	漫画	2	0.3%	0	0.0%
	58	映画	4	0.7%	3	0.8%
	59	ダンス	1	0.2%	0	0.0%
	60	音楽	1	0.2%	1	0.3%
	61	パソコン	1	0.2%	0	0.0%
	62	趣味	10	1.7%	3	0.8%
	63	酒	0	0.0%	1	0.3%
		計	**65**	**11.2%**	**27**	**7.3%**

進路	64	大学院入試	17	2.9%	3	0.8%
	65	大学入試・志望	8	1.4%	7	1.9%
	66	授業の志望	16	2.8%	8	2.2%
	67	就職	22	3.8%	5	1.4%
	68	軍隊	2	0.3%	2	0.5%
	69	公務員	3	0.5%	0	0.0%
		計	**68**	**11.7%**	**25**	**6.8%**
社会	70	出来事	6	1.0%	1	0.3%
	71	うわさ	2	0.3%	0	0.0%
	72	地域情報	16	2.8%	7	1.9%
	73	80 後・90 後	1	0.2%	0	0.0%
	74	社会マナー	1	0.2%	0	0.0%
	75	社会知識	0	0.0%	4	1.1%
		計	**26**	**4.5%**	**12**	**3.3%**
その他	76	連絡手段	3	0.5%	0	0.0%
	77	誘い	2	0.3%	0	0.0%
	78	当日のこと	3	0.5%	2	0.5%
	79	あいさつ	7	1.2%	16	4.3%
	80	約束	2	0.3%	0	0.0%
	81	依頼	1	0.2%	0	0.0%
	82	場面による発話	5	0.9%	7	1.9%
	83	洋服の場所	0	0.0%	1	0.3%
	84	外見	0	0.0%	1	0.3%
		計	**23**	**4.0%**	**27**	**7.3%**
合　計			**580**		**368**	

両グループの大話題は 7 つのカテゴリーに分かれるが、以下では、それぞれのカテゴリーでどのような大話題が出現する傾向があるかを、「両グループともに出現率が高い大話題」と「各グループで出現率に顕著な違いがある大話題」に分けて見ていく。

3.4.3　共通して出現率が高い大話題

表 3－4 からわかるように、両グループともに出現率が高い大話題は、【個人情報】における「名前」「学年」「専攻」のような所属に関する大話題と、「出身地」「実家」のような地縁に関係する大話題に集中している。

【個人情報】における「名前」（中国人学生 79%、日本人学生 100%）、「学年」（中国人学生 63%、日本人学生 61%）、「専攻」（中国人学生 89%、日本人学生 83%）は、両グループともに出現率が高い。このような自分の所属に関する大話題は、会話の初めに

出現することが多かった。

(1) 日本語グループ

1　JM2001　経済研究科、ええと、経営学専攻の〇〇と申します。よろしくお願いします。

2　JM2002　よろしくお願いします。ええと、言語教育研究科の英語教育専攻の●●です。

3　JM2001　よろしくお願いします。え、ちなみにお年は？

(2) 中国語グループ

1　CM0901　我机电工程学院的。你呢？　（学科）
（私は機電工程学院です。あなたは？）

2　CM0902　我外国语学院的。
（私は外国語学院です。）

3　CM0901　外国语什么专业啊？
（外国語の何の専攻ですか。）

4　CM0902　日语啊。　（専攻）
（日本語ですよ。）

5　CM0901　日语啊？
（日本語ですか。）

6　CM0902　你什么专业的？
（あなたは何の専攻ですか。）

7　CM0901　汽修服务。
（車修理サービスです。）

8　CM0902　汽修服务？
（車修理サービスですか。）

9　CM0901　嗯。
（そうです。）

10　CM0902　那你的专业还蛮吃香的。
（じゃ、あなたの専攻は人気があります。）

11　CM0901　我们这个比较广吧，就是像汽车销售啊，还有什么汽车服务啊，都做的。

（うちの専攻はわりと幅広いよね。例えば車のセールスみたいなこと、それから車のサービスとか、全部やるよ。）

12　CM0902　服务啊？

（サービスですか。）

13　CM0901　嗯。

（そうです。）

14　CM0902　你大一的啊？　（学年）

（一年生？）

15　CM0901　嗯，我大一。

（はい、一年生です。）

16　CM0902　你叫什么名字啊？　（名前）

（お名前は何といいますか。）

17　CM0901　○○○。

(1)、(2)はいずれも会話の冒頭部の例である。日本語グループと中国語グループともに、会話のはじめに自分の基本的な所属情報を開示した。日本語グループは開示した個人情報から、「え、ちなみにお年は？」という質問で話題を展開している。中国語グループでは、年齢に話題に上ることはなかった。

両グループの開示方式を比べてみると、日本語グループは会話(1)のように、会話の最初から自己紹介の形式で自分の所属や名前を開示したが、中国語グループは会話(2)のように、「学科」→「専攻」→「学年」→「名前」という順に、質問に答える形で個人情報を次々と開示している。日本語グループのように、自分から自己紹介の形式で個人情報を開示するケースは 3 例しかなかった。

西田（1998）の不確実減少理論によれば、初対面場面では相手に関する情報が不足しているため、より円滑にコミュニケーションを図るために、会話者間の情報のギャップを埋めようとする。会話の最初に基本的な個人情報を開示するのもそのためであると考えられる。また、三牧（2013）が述べているように、初対面会話の特徴の一つは、円滑な会話を遂行するための前提として、相互に関する情報交換が活発に行われることであるため、「名前」「学年」「専攻」など自己開示を含む情報を交換することは、心的

距離を接近させるのに役立つ。

もう一つ考えられるのは、日本人と中国人とでは、実験の形で初対面会話をおこなう際の心構えが異なっていたということである。データを見ると、中国人の場合は友人と話すように会話をおこなおうとしているが、日本人は「よろしくお願いします」という趣旨のあいさつをしてから会話を始めることが多い。

地縁に関わる大話題を見ると、中国語グループは「出身地」（中国語で言う“老家”）の出現率が 84%であるが、日本語グループは 50%が「実家」を選択した。両グループの母語話者ともに相手の個人背景に関する情報に関心を持っていることが分かった。今回調査した中国語グループの大学生は遠く離れた都市から調査所在地の大学に通っている人が多い。地縁関係を重視する中国人にとって、初対面会話の相手の出身地が自分に近ければ、それだけで接点ができ、心理的距離を縮めることに有効である。

次の中国語会話(3)では、自分の出身地の開示から出身地の状況に始まり、同じ出身のクラスメートや他人に関する情報まで展開している。

(3) 中国語グループ

31 CM0601 那个，就是哪个地方的人？ （会話者の出身地）
（あの、どこの出身ですか？）

32 CM0602 盐城人。
（塩城の出身です。）

33 CM0601 我从湖南那边过来的。
（私は湖南から来ました。）

34 CM0602 你是湖南那边的啊。很远的。你湖南哪个地方的？
（湖南ですか。遠いですね。湖南のどこですか。）

35 CM0601 嗯，衡阳。
（うん、衡陽というところです。）

36 CM0602 是大城市吧？
（大都会ですよね？）

37 CM0601 对，衡阳。
（はい、衡陽。）

38 CM0602 你肯定知道盐城的吧？

（塩城、きっと知っていますよね？）

39　CM0601　嗯，对对。然后是什么东台吧？

（うん、そうそう。東台とかもありますよね？）

40　CM0602　对，东台也是盐城下面的一个小城市。

（そうです。東台も盐城に属する小さな町です。）

41　CM0601　我们班有一些盐城来的人的。　（クラスメートの出身地）

（うちのクラスには塩城からの学生が何人かいます。）

42　CM0602　其实我们这个学校盐城人很多的，我们班就有十几个。

（実際，うちの学校は塩城出身の人が多いです。うちのクラスだけでも十何人います。）

43　CM0601　我们班也有很多。

（うちのクラスにもたくさんいます。）

一方、今回調査した日本語グループの学生は毎日実家から電車で大学に通っている人が多いため、「実家」に触れることにより、通学手段などを話題にでき、そこからお互いの共通点を探しやすい。次の日本語会話(4)では、自分の住まいの情報を開示した後、通学の情報を開示し、話題を展開している。

(4)　日本語グループ

242　JM1302　え、住まいはどこの辺ですか？

243　JM1301　八柱ってわかりますか？

244　JM1302　八柱？遠いですか？

245　JM1301　いや、近いです。南柏から、電車１本で新松戸に行って、新松戸から乗り換えて、１本です。

246　JM1302　結構近いですか？

247　JM1301　近い。チャリで 30 分ぐらいかな。

248　JM1302　へーえ、チャリで来ているんですか？

249　JM1301　いや、チャリはなんか体力的に、なんか電車のほうが時間がかかる。

250　JM1302　あ、そうですね。一回乗り換えてくるんですね。

初対面会話において互いに接点を求める形で話題を選ぶというのは、日本人も中国人も同じと考えられる。

3.4.4　出現率が異なる大話題

日本語グループと中国語グループに出現率が違う大話題がある。次に、このような大話題に焦点を当てて分析をおこなう。ここでは、①プライベートの話題、②日常生活の話題、③将来志望の話題、④人間関係の話題という 4 つに焦点に絞って分析をおこなう。

①プライベートの話題

【個人情報】における「自我」という自分の内面の性格に関わる大話題は、両グループとも出現率が低かった。中国語グループには出現したが、日本語グループには出現しなかった。

例えば、次の会話例(5)では、中国語グループの学生は自分の内面的な性格に関する情報を開示しているが、日本語グループでは、このような自分のプライベートな領域に踏み込んで開示した例は見られなかった。

(5)　中国語グループ

257　CF0202　你看我跟你说话不羞涩，其实我很羞涩的，跟你讲。
（あなたと話すときは私は恥ずかしがってないように見えるだろうけど、本当は私はとても恥ずかしいんですよ。）

258　CF0201　嗯，我也挺那个的。
（うん、私もけっこうそうなんです。）

259　CF0202　如果跟我熟了的话，玩起来会很疯的。
（もし私と仲良くなれば、遊んだらとてもテンションが高くなるよ。）

260　CF0201　我也是，你没见过我们宿舍夜半飙歌。
（私もそう。あなたは私たちが寮で夜中に大声で歌っているのを見たことないでしょう。）

また、中国語グループには、【個人情報】の「給料」、【学校生活】の「奨学金」のような相手のプライベートな領域に踏み込む話題が出現したが、日本語グループには見ら

れなかった。

ここから、中国語グループは、自分の領域だけではなく、相手の領域に踏み込むこともあるが、日本人は自分の領域のことも相手の領域のことも話題にすることを避けていることがわかる。中国語グループの会話双方は積極的に相手との人間関係を作るというところに重点を置いて、相手に関心を示すのが基本である。一方、日本語グループの会話は初対面ということを考慮して、相手に関心を示すことよりも、相手の領域に踏み込むことを回避することを優先していると考えられる。

②日常生活の話題

【学校生活】における「ネットの使用」,【好き嫌い】における「パソコン」など寮生活に密接な関係がある大話題は、中国語グループに見られたが、日本語グループに見られなかった。これは、調査をおこなった中国の大学では、学生がほぼ全員寮に住んでおり、寮生活が中国語グループの学生にとって大きな比重を占めていたことによる。学生寮のインターネットは教員の許可がなければ使えないという校則があったため、学生間に関心の焦点になっていた。

一方、【学校生活】における「ゼミ」「卒論」「留学」「ボランティア」などの大話題は、日本語グループに見られたが、中国語グループには見られなかった。これは、調査をおこなった日本の大学に留学やボランディアの組織があり、学生に留学やボランティアの経験を持つ人が多かったため、中国人学生より関心が強かったと考えられる。また、卒業研究の指導が、中国の大学では主に個別指導なのに対し、日本の大学では主にゼミ形式形であることも関係している。

このように、両グループの学生の文化背景にさまざまな相違点があり、関心を持っているところが異なるため、話題選択にも異なる傾向が見られた。三牧（1999）が指摘しているように、文化を共有する集団には一般的あるいは典型的な知識の集合であるスキーマが共有されるが、話題選択に関しても「初対面会話話題選択スキーマ」が存在している。中国語グループと日本語グループの学生の文化背景が違うことにより、出現する大話題にも相違が生じたと考えられる。

③将来志望の話題

中国語グループでは、【進路】における「大学院入試」「将来の志望」「就職」の大話

題の出現率が日本語グループより多い。特に「大学院入試」の出現率が 4 倍以上になった。筆者の経験でも、中国人学生と話す場合、中国にいても日本にいても、中国人同士では「将来は何をやりたいか」という話題が出現することが多かった。

一方、筆者の経験では、日本人学生と話す時、将来に関する話題で話が盛り上がったことはあまりない。日本人学生の感覚では、将来のことはプライベートな領域に属するために、話題としてとりあげるのを避けているのかもしれない。また、中国人学生については社会背景も関係がある。中国の大学では、大学院に進学する学生が毎年増えている。中国・江蘇省教育局の統計によれば、2013 年以前、大学院に行く人数は 2008 年の金融危機の影響で、一時的に減ったが、それ以降は毎年 10 万人ぐらいの幅で増えている（http://www.ec.js.edu.cn/art/2014/1/7/art_4342_141931.html）。こうした背景により、大学生の会話に大学院入試に関わる話題がより多く出てくると考えられる。また、卒業生が毎年増えており、就職がますます難しくなることがあるため、「就職」は大学生が関心を持っている話題の一つになっていると考えられる。

④人間関係の話題

【他者】に属する大話題を見ると、全般的に中国語グループのほうが日本語グループよりも出現率が高い。これは、中国社会における対人関係もあり方が、話題選択にも反映されていると考えられる。初対面でもお互いのことに関心を持ち、個人情報だけではなく、会話参加者以外の話題で言及される人物のことにもよく言及するという配慮をより重視する。

中国語グループには、【その他】の「連絡手段」「誘い」「約束」「依頼」など、最終的に両話者がこれからの関係を保つための発話が見られた。例えば、次の会話例(6)では、「スポーツ」の話題が終わった後、3 秒の沈黙があり、その後、「連絡手段」の話題が出現した。連絡手段を交換した後、また「大学院入試」という新しい話題が展開された。直接的に相手との関係を保つ発話の使用から、中国人学生が積極的に人間関係を作ることが覗えた。

(6)

82　CM0601　我一般不打篮球，就玩玩乒乓球羽毛球。

（僕はふだんバスケはやらなくて、卓球やバトミントンをするだけ。）

83　CM0602　我乒乓球羽毛球都不怎么样，篮球还行。

（僕は卓球もバトミントンもたいしたことはないけど, バスケはまあまあ。）

84　CM0601　哦。

（へえ。）

85　CM0601　你的电话号码是什么？

（君の電話番号は何番？）

86　CM0602　等一下哦。1515####。

（ちょっと待って。1515####）

87　CM0601　1515#####？

（1515#####？）

88　CM0602　嗯。

（うん。）

89　CM0602　你准备考研？

（大学院入試を受ける予定？）

一方、日本語グループには、「何でこの実験に来たんですか？」のような実験そのものに関する話を会話の最初にしてから、話題が展開された例がある。次の会話例(7)では、名前、学年、専攻などの基本的な個人情報が開示された後、ここに来た経緯について述べる中で接点が作られ、その後の「卒論」などの話題が続けられた。

(7)

1　JM0602　こんにちは。

2　JM0601　はじめまして、ええと、○○です。○○と申します。

3　JM0602　あ、●●と申します。◉◉（大学名）の？

4　JM0601　そうです。

5　JM0602　◉◉（大学名）４年、日本語学で。

6　JM0601　あ、そうなんですか。僕は修士一年で。

7　JM0602　あー。

8　JM0601　日本語専攻ですか？

9　JM0602　そうですね。日本語専攻です。はい。

10　JM0601　え、（筆者の名前）とはどうやって知り合ったんですか？

11　JM0602　ええと、つい最近ま、ちょっと論文のあの情報をちょっと得るために。

12　JM0601　はい。

13　JM0602　中国語の、前に中国語を教わった先生がいて。

14　JM0601　はい。

15　JM0602　●先生という方なんですけど、

16　JM0601　はい。

17　JM0602　そのかたにちょっと伺いしたいところがなんか、じゃいいところ紹介してあげることで、大学院へ行って、知り合ったということで。

18　JM0601　あ、なるほど。ちょっと研究のほう。

19　JM0602　そうですね、それはちょっとお願いしますということで。

20　JM0601　あ、まーまー、２０でいいお会話をお願いします。HHH

21　JM0602　HHH あーそうですね。

22　JM0601　じゃ、４年生だと、

23　JM0602　はい。

24　JM0601　この時期だと、もう卒論とかはかなり進んでる感じですか？

中国人学生は、初対面の場合でも、会話を通じて相手との距離が縮め、話をしやすい雰囲気を作ろうとする。一方、日本人学生は、三牧（1999）が「日本人の大学生の話題選択の一つのストラテジーは共通点を探すことである」と述べているように、会話を通じて、共通点を探し、相手との関係の接点を作ろうとする。

3.4.5　会話開始から 5 分間の大話題と 5 分以降の大話題

3.4.2 では、本研究のデータである 20 分の会話における大話題について見たが、本節では、「会話開始から 5 分間」と「会話開始から 5 分以降」とで大話題がどのように変化するかを見ていく。張瑜珊（2006a）、謝韞（2000）では、会話開始から 5 分間を対象とした分析をおこない、出身地や住まいといった個人的情報は日本語会話よりも中国語会話のほうが多く出現したことを報告しているが、5 分間以後にどのような話題が出現するかについては分析されていない。

表 3－6 は、会話開始から 5 分間に出現した大話題である。

表 3－6　会話開始から 5 分間に出現した大話題

	共通に出現する大話題			一方にのみ出現する大話題	
	出現率高	出現率低	一方の出現率高	中国語 グループ	日本語 グループ
個人情報	名前 専攻 学年	出身校 住まい 学科 恋	出身地（中） 所属（日） 実家（日）		年齢 生年月日 学歴
他者		同級生 友人		先生	家族
学校生活		イベント 日常事 授業 勉強 資格試験 方言 大学関係 休暇 高校生活	サークル（日） アルバイト（日）	帰省 期末試験 寮生活 ネットの使用 担当	通学 実習 ゼミ 卒論 留学経験
好き嫌い		映画 趣味		ゲーム 買い物 遊び スポーツ アイドル 漫画 ダンス 音楽 パソコン	食事 留学
進路		将来の志望	就職（中）	大学院入試 公務員	
社会				地域情報	
その他	挨拶		実験関係（日）	連絡手段	当日のこと

20 分間の会話では、中国語会話、日本語会話ともに【個人情報】、【他者】、【学校生活】、【好き嫌い】、【進路】、【社会】、【その他】という 7 つの話題カテゴリーが出現したが、これらは会話開始から 5 分の間にすべて出現している。

日本語会話、中国語会話に共通してまとまった形で出現するのは、【個人情報】と【学校生活】である。【個人情報】のうち「名前」「専攻」「学年」は中国語会話にも日本語会話にも出現したが、「年齢」「生年月日」「学歴」は日本語会話のみ出現した。これは、出身地や住まいといった個人的情報は日本語会話よりも中国語会話のほうが多く出現したとする張瑜珊（2006a）、謝韞（2000）の調査結果と異なるように見えるが、日本語会話でも「年齢」「生年月日」「学歴」が話題にされた会話は限られている。

【学校生活】に関する話題では、中国語会話でも日本語会話でも学業に関するものが多かったが、学業以外のサークル、アルバイトに関する話題は日本語会話のほうが多く出現した。一方、【進路】と【好き嫌い】に関する大話題の種類は中国語会話のほうが多い。全体としては、会話開始から 5 分間の話題では、中国語会話のほうが日本語会話より大話題の種類が多岐に渡ると言える。また、【学校生活】に比べて【好き嫌い】は個人による違いが大きい話題であると考えられるが、中国語母語話者は日本語母語話者よりも互いの相違点に関心を示す傾向があると言える。

張瑜珊（2006a）では、会話開始から 5 分の間に、中国語会話では学部に関する大話題が観察されなかったのに対し、日本語会話では出身、住まい、高校とクラスに関する大話題が観察されなかったという結果を報告しているが、本研究の調査では、中国語会話でも日本語会話でも「専攻」、「学科」、「出身地」、「住まい」、「出身校」に関する大話題が出現している。これは張瑜珊（2006a）の調査結果と異なる結果であるが、調査のしかたによって出現する話題の種類も異なるということかもしれない。

表 3－7 は、会話開始から 5 分以降に出現した大話題である。

表 3－7　会話開始から 5 分以降の大話題

	共通に出現する大話題	５分以降に出現した大話題（もう一方は会話開始 5 分の間にすでに出現）		５分以降に出現した大話題（もう一方は会話の最後まで出現せず）	
		中国語グループ	日本語グループ	中国語グループ	日本語グループ
個人情報		年齢 生年月日 学歴		自我 給料 職位	
他者	人間関係	家族	先生	先輩	
学校生活	運転	通学 実習	帰省 試験 寮生活	奨学金 入党	ボランティア
好き嫌い	習い事 旅行	食事	ゲーム 遊び スポーツ 音楽		お酒
進路	軍隊	留学	大学院入試		
社会	社会の出来事		地域情報	うわさ 80 後、90 後 社会マナー	社会知識
その他		当日のこと		誘い 約束 依頼	洋服の場所 外見

表 3－6 を見ると、全体として、中国語会話と日本語会話で共通に出現する大話題が少なくなっている。また、日本語会話では【個人情報】に属する大話題は出現していないが、中国語会話では、会話開始から 5 分間に出現しなかった「年齢」「生年月日」「学歴」が出現し、「自我」「給料」「職位」というよりプライベートな領域に踏み込んだ大話題も出現している。また、中国語会話では、【好き嫌い】に属する大話題が減少し、【社会】に属する大話題が増えている。逆に、日本語会話では、【好き嫌い】に属する大話題の種類が会話開始から 5 分間よりも増えている。日本語母語話者は、会話の最初で詳しい【個人情報】を開示して自己紹介をおこなってから【好き嫌い】の話題を取り

上げるのに対し、中国語母語話者は、会話が進行して相手とある程度親密になった後に詳しい【個人情報】を開示し、【社会】のような個人のレベルを超えた大話題にまで話題の範囲を広げていると言える。

3.4.6　会話開始の様式と大話題の導入のされ方

ここまで、本研究のデータとなった中国語会話と日本語会話で出現した大話題についてき見てきたが、最後に、今回実験の形でおこなった初対面会話の雰囲気について、少し述べておきたい。3.4.3 で述べたように、日本人グループと中国人グループとでは、実験の形で初対面会話をおこなう際の心構えが異なっており、それが話題の選択に影響を及ぼす可能性もあるからである。ここでは、初対面会話の雰囲気を反映すると思われる「会話開始の様式」と「大話題の導入のされ方」について見ていく。

まず、今回収集したデータにおける中国語グループと日本語グループの会話開始の様式は、次の表 3－8 のとおりである。数字は①～④のことがらが観察された組の数である。

表 3－8　会話開始方式

	中国語グループ （19 組）	日本語グループ （18 組）
①定型的なあいさつ言葉	5（26.3%）	17（94.4%）
②非定型的な言葉	3（15.8%）	0
③自己紹介	3（15.8%）	1（5.6%）
④質問形式	8（42.1%）	0
合 計	19（100%）	18（100%）

日本語グループの会話は、「はじめまして、どうぞよろしくお願いします」や、「おはよう（ございます）」、「こんにちは」、「こんばんは」などの定型的なあいさつ言葉で始まり、自分の名前、学年、専攻を自ら開示し、会話を展開することが多い。この傾向は、バーランド（1979）が「日本語母語話者がコミュニケーションの自発的な形よりは、規制された形を好む。会話が決まった形でやりとりされる礼儀的なもののほうが、人格と人格の出会いや親密さを伴う自発的なものより好まれる。個人間の対面で形式が多け

れば多いほど、習慣的に定められた限度を超え自己を表す率は少なくなる」と述べていることに合致する。

一方、中国語グループの会話は特別な形式がない。定型的なあいさつ言葉は基本的に“你好”（おはようございます、こんにちは、こんばんは）である。また、19 組のうち 14 組が定型的なあいさつ言葉以外の形式で会話を切り出した。定型的なあいさつのほかに、“我先自我介绍一下”（私からまず自己紹介をします）、“请问一下”（ちょっと聞きたいんですが）などの前置き表現で会話を始めるケースが見られた。また、あいさつなしで、直接質問の形式で会話を切り出したケースや、自分の情報を切り出した後、相手の情報を聞くという例も見られた。いずれの場合も、質問を通じて相手から情報を得て会話を展開していくという傾向が見られた。

以下に各開始方式の会話例を挙げる。会話例(8)は日本語グループの例である。話者双方が「よろしくお願いします」という定型的なあいさつをした後、自己紹介が自発的におこなわれている。その後、学年や所属や名前などの自分の情報が言い出され、話題が展開されている。

(8) 日本語グループ（あいさつ）

1　JM1601　じゃ、よろしくお願いします。　（定型的あいさつ言葉）

2　JM1602　よろしくお願いします。

3　JM1601　あの、大学院 2 年の〇〇と申します。

4　JM1602　僕も 2 年の●●と申します。

5　JM1601　●●さん？

6　JM1602　はい。

7　JM1601　僕はあの飛び入学しているんですよ。

8　JM1602　あ、そうなんですか。

会話例(9)は、日本語グループと似ており、“你好”（こんにちは）という定型的なあいさつ言葉で会話を切り出した後、一人の話者が自分の出身地を開示し、会話が展開されている。

(9) 中国語グループ（あいさつ）

1　CM1001　你好！　（定型的あいさつ言葉）

（こんにちは！）

2　CM1002　你好！

（こんにちは！）

3　CM1001　我是泰州的。你呢？

（僕は泰州の出身です。あなたは？）

4　CM1002　我是连云港的。

（僕は連雲港です。）

会話例(10)は、自己紹介で会話を切り出したケースである。定型的あいさつ言葉を用いている点で、日本語グループに似たところがある。

(10)　中国語グループ（自己紹介）

1　CF1801　我先自我介绍一下。　（非定型的な言葉）

（まず自己紹介します。）

2　CF1802　好

（はい。）

3　CF1801　我叫○○。是日翻的。

（私は○○です。日本語翻訳専攻です。）

4　CF1802　我叫●●，我也是日翻的。我大三。

（私は●●です。私も日本語翻訳専攻です。3 年生です。）

会話例(11)は、定型的なあいさつがなく、相手を会話に誘うという形で、会話を切り出し、その後、相手の個人情報を質問する形式で会話が展開されている。

(11) 中国語グループ（非定型的）

1　CM0401　没事，我们随便谈一谈嘛。　（非定型的な言葉）

（特に何もないです。気楽に話をしましょうよ。）

2　CM0402　好。

（いいですよ。）

3　CM0401　就是你大几的呀？

（あの、今大学何年生ですか？）

4　CM0402　我大二的。

（僕は大学 2 年生です。）

5　CM0401　大二啊？

（大学 2 年生ですか？）

6　CM0402　嗯，对呀。数学学院统计专业。你呢？

（うん、そうですよ。数学学部統計専攻です。あなたは？）

会話例(12)では、一人の話者がもう一人の話者の個人情報を聞くという直接質問の形で会話を切り出している。

(12)　中国語グループ　質問形式

1　CM0601　你是什么专业的？　（質問形式）

（あなたの専攻は何ですか？）

2　CM0602　我是那个物理电子学院的。

（私は、あの、電子物理学部です。）

3　CM0601　也是物电？

（あなたも電子物理学部ですか？）

4　CM0602　哦，你也是物电的？

（あ、あなたも電子物理学部ですか？）

このように、中国語グループの会話開始の様式は日本語グループより多様である。

次に、「大話題の導入のされ方」について見ていく。宇佐美・嶺田（1995）は話題導入の様式を「質問―応答」型と「相互導入」型に分けている。本研究はこの分類方法を参考にし、「質問―応答」型を「質問型」、そして、宇佐美・嶺田（1995）の言う「相互導入」型に「先行発話に対して質問で応じる場合」を加えたものを「陳述型」と表記し、会話における話題導入の様式を「質問型」と「陳述型」という 2 種類に分けた。

・質問型　一人の話者が質問の発話で話題を始め、もう一人の話者が応答するような形式で話題を展開するパターン。

・陳述型　一人の話者が陳述の発話で話題を始め、もう一人の話者がそれに対して質問をしたり、相づちを打ったり、または同じように陳述の発話で話題を展開するパターン。

これに基づいて、両グループのそれぞれの大話題が「質問型」で開始されるか、「陳述型」で開始されるかを見ると、次の表 3－9 のようになる。数字は「質問型」あるいは「陳述型」によって導入された大話題の数を表す。

表 3－9　各開始方式で選択される大話題

	質問型	陳述型	合計
日本語グループ	181	187	368
中国語グループ	366	214	580

日本語グループでは、叙述により導入される大話題と質問により導入される大話題とはほとんど差がないが、中国語グループでは、質問により導入される話題が叙述により導入される話題より多い。これは宇佐美・嶺田（1995）の研究結果と合致している。3.4.1 で述べたように、日本語母語話者は一つの話題についていろいろな角度から話をしてから、次の話題に移行するが、中国語グループは一つの話題を続けずにすぐに次の話題に移行するが、このことは中国語では質問により導入される大話題が相対的に多いことと関係するかもしれない。

これまで多くの研究で論じているように、会話において「質問」は相手から情報を引き出すだけではなく、1 つの話題を開始する場合もある。斎藤（1989）で指摘されているように、質問は相手との親しみを表すコミュニケーション上の機能を有する。中国語会話においては、情報を得ることより、むしろ相手に対する関心を示すのが質問のコミュニケーションの機能と言えよう。今回の調査では、プライベートな領域に踏み込んだ話題、将来に関する話題は中国人学生のほうが出現率が高かったが、これも相手に対する関心を示すということの反映であろう。

3.5　まとめ

本章で述べたことは次のようにまとめることができる。

①話題数について

会話に出現した大話題の数は、日本語グループは中国語グループより少ないが、一つの大話題に含まれる小話題の数は日本語グループのほうが多かった。日本語母語話者は一つの話題についていろいろな角度から話をしてから、次の話題に移行するが、中国語グループは一つの話題を続けずにすぐに次の話題に移行するということが窺える。

②話題内容について

中国語グループ、日本語グループともに出現率が高い大話題は、【個人情報】における「名前」「学年」「専攻」のような所属に関する大話題と、「出身地」「実家」のような地縁に関係する大話題に集中していた。プライベートな領域に踏み込んだ話題、将来に関する話題は中国人学生のほうが出現率が高かった。それ以外にも、日本人学生と中国人学生とで出現率が異なる大話題には、中日両国の大学生の生活や文化背景の相違によるものが多い。

両グループの開示方式を比べてみると、日本語グループは、会話の最初から自己紹介の形式で自分の所属や名前を開示したが、中国語グループは、質問に答える形で個人情報を次々と開示しており、自分から自己紹介の形式で個人情報を開示するケースは少なかった。

③話題内容の変化について

20 分間の会話に出現する大話題を「会話開始から 5 分間」と「5 分以降」を比較した結果、次のようなことが見られた。

・「会話開始から 5 分間」の話題は、中国語会話のほうが日本語会話より大話題の種類が多岐に渡っていた。【個人情報】、【学校生活】に関する話題は、日本語会話、中国語会話に共通してまとまった形で出現したが、「年齢」「生年月日」「学歴」は日本語会話のみ出現した。学業以外のサークル、アルバイトに関する話題も、日本語会話のほうが多く出現した。

・「会話開始から 5 分間」より、「5 分以降」のほうが、中国語会話と日本語会話で共通に出現する大話題が少なかった。中国語会話では、会話開始から 5 分の間に出現しなかった「年齢」「生年月日」「学歴」が出現し、「自我」「給料」「職位」というよりプライベートな領域に踏み込んだ大話題が出現した。日本語母語話者は、会話の最初で詳しい【個人情報】を開示して自己紹介をおこなってから【好き嫌い】の話題を取り上げるのに対し、中国語母語話者は、会話が進行して相手とある程度親密になった後に詳しい【個人情報】を開示し、【社会】のような個人のレベルを超えた大話題にまで話題の範囲を広げていると言える。

④会話の開始方法について

日本語グループは、「こんにちは」「はじめまして」などの定型的言葉で会話を切り出すのが一般的だが、中国語グループは、一人の話者がもう一人の話者の個人情報を聞くという直接質問の形で会話を切り出すことが多い。また、話題の開始方法について、日本語グループは、質問で始まる場合と陳述で始まる場合とでほとんど差がないが、中国語グループは質問で始まる場合のほうが多い。

第 4 章　中国語会話と日本語会話の自己開示の研究

4.1　はじめに

4.2　「自己開示」の定義

4.3　自己開示に関する先行研究

4.4　分析方法

4.5　結果と考察

4.5.1　自己開示の頻度

4.5.2　自己開示の頻度の変化

4.5.3　客観的自己開示について

4.5.3.1　調査結果の概要

4.5.3.2　開示内容の共通点

4.5.3.3　開示内容の相違点

4.5.4　主観的自己開示について

4.5.4.1　調査結果の概要

4.5.4.2　「心情・感情」の開示

4.5.4.3　「意見」の開示

4.6　まとめ

第 4 章　中国語会話と日本語会話の自己開示の研究

4.1　はじめに

初対面会話はコミュニケーションの出発点であり、終助詞、スピーチレベルシフト、話題選択などの観点から研究されてきた。初対面場面では、相手と知り合うために、自分の名前や所属のような個人情報を開示したり、お互いに関心があるニュースや社会問題のような身上とは直接関係ない話をしたりして、様々な種類の情報交換が活発に行われる。

その中で、適切な自己開示は相手との距離を縮め、人間関係を構築するうえで重要な役割を果たす。不適切な自己開示は相手に否定的な印象を与えてしまうおそれがある。特に、社会的・文化的な背景が異なる人間同士のコミュニケーションでは、自文化で適切だと思われる自己開示であっても、異文化において適切ではないと思われる可能性がある。また、「質問」は自分が知りたい情報を相手から引き出す手段であり、適切な質問は初対面会話を円滑に進める上で重要な役割を果たす。

本章では、日本人学生同士・中国人学生同士の初対面会話の会話データを使い、中国語母語話者と日本語母語話者がそれぞれ自分に関してどのようなことを語るのかを分析し、両者の会話スタイルの一面を明らかにすることを試みる。分析に用いるデータは、第 3 章と同じく、第 1 章で述べた中国語母語話者同士、日本語母語話者同士の初対面自由会話のデータ（中国語母語場面 19 組、日本語母語場面 18 組の初対面自由会話の録音データ）である。会話は二人 1 組のペアで行われ、長さは 20 分である。

4.2　「自己開示」の定義

「自己開示」という用語について、Jourard (1971) は、自分自身をあらわにする行為であり、他人たちが知覚し得るように自身を示す行為であると述べている。安藤（1986）は、特定の他者に対して、言語を介して意図的に伝達される自分自身に関する情報、およびその伝達行為と定義している。また、榎本（1997）は自分がどんな人物か、何を考え、何を感じ、何を望んでいるのかを他者に言語的に伝える行為とし、深田（1998）は通常隠された状態の自己の情報をさらけ出す行為としている。

これらの定義を踏まえ、本研究では、「自己開示」を「言語を介して、自分の身上情報、自分の経験、考えなど一連の情報を含み、自己に関することを他者にさらけ出す行

為」と定義する。

4.3　自己開示に関する先行研究

自己開示の研究は、最初に心理学の分野で、面接法、質問紙法などの手法を用いて精神的健康との関係で行われた。その後、言語面に焦点を当て、談話分野やコミュニケーションにおける親密化への影響について考察がなされた。中国語母語話者と日本語母語話者の対照研究としては、曹偉琴（1995）、張瑜珊（2006a）、三牧・難波（2010）、三矢（1995）などの研究がある。これらの研究は主に両母語話者がどこまで自己開示するのかに焦点を当てている。

曹偉琴（1995）は、質問紙調査により、中国人・日本人大学生が初対面の相手に自分に関するどのような内容を開示するかについて意識調査をおこなった。結果として、日本人学生より中国人学生は、自己について他人に多く知らせ、選択した内容もより広いと報告されている。

張瑜珊（2006a）、三牧・難波（2010）は、実際の会話データを用いて研究をおこなっている。張瑜珊（2006a）は、自己開示に焦点をしぼった研究ではないが、日本と台湾の女子大生の母語場面の初対面会話を対象として、会話開始から 5 分間の身上情報の開示に着目し、台湾人学生の開示内容が日本人学生より幅広いことを明らかにしている。ただし、身上情報以外の開示内容、及び 5 分以降の開示状況には触れていない。三牧・難波（2010）は、開示内容を「自己に関する情報（社会的な自己、プライベートな自己）」、「自己の有する知識」、「自己の価値観や見解」に分け、日本・中国・韓国の社会人同士の初対面母語場面においてどのような自己開示がなされるかを考察している。そして、日本人社会人の会話ではプライベートな情報の開示が回避されたこと、中国・韓国の社会人の会話では相手に質問することが回避されないが、質問に答えるかどうかは人によって異なることが指摘され、日中韓それぞれの自己開示スキーマに相違があることを示唆している。

これらの研究では、中国語母語話者、日本語母語話者の事実レベルの自己開示を中心に考察が行われているが、実際には、我々は自分の個人情報や経験などの事実だけではなく、何を感じるか、何を考えるのかなどの主観的な内容を開示することもある。Morton (1978) は親密さを増すための自己開示に、「個人的・事実的な情報を開示する」、「感情、評価あるいは事実に関する個人的な見解を開示する」という二つのケースがあることを

述べている。

西田（1994）の質問紙調査では、相手と出会ってまもなくの段階では、まず身の上に関連する客観的な内容を開示するが、時間が経つにつれ、自分の意見や評価や見解などについて開示するという結果が得られている。しかし、会話データを使って、時間の経過にともなう自己開示の変化について分析した研究は、管見の限り見られない。

また、実際の対人関係では、相手との親密度と開示される情報の種との関係だけではなく、自己開示の量の変化にも注目する必要がある（丹野・下斗米・松井，2005）。ここまで紹介した先行研究は、両母語話者が自分のことに関して何を言い、何を言わないかについて考察しているが、自己開示の頻度の変化については述べられていない。また、同じ文化を背景にする者同士で個人差があるほかにも、異文化の者同士の場合は、たとえ同じ種類の情報を開示するとしても、より具体的なレベルでは異なる内容を開示するということも考えられる。

そこで本節では、先行研究の結果を踏まえつつ、Morton (1978) の「個人的・事実的な情報（descriptive self-disclosure）」と「個人的な見解や感情的な情報（evaluative self-disclosure）」という二種類の情報という観点から、中国人学生・日本人学生の母語場面初対面会話の自己開示の状況について観察する。

4.4　分析方法

本研究では、上記の Morton (1978) の区別を参考に、「自分の身上的情報」および「自分が経験したこと・やっていること」の開示を「客観的自己開示」、また、自分の考え、意見、心情などの開示を「主観的自己開示」と呼ぶ。

表 4－1　開示情報の種類

	開示情報の種類		具体例
客観的自己開示	①	自分の身上的情報	私は○○と申します。
	②	自分が経験したこと、やっていること	だいたい毎日テニスをやっているよ。
主観的自己開示	③	自分の考え、意見、心情など	へーうれしい！

両母語話者がどの程度自己開示するのかを考察するために、それぞれの自己開示の頻度を計算した。計算方法については、全鐘美（2010a, 2010b）を参考にし、基本的に一つの意味項目を一回の自己開示として捉えている。例えば、会話例(1)では、JM1901 は「学年」（下線①）と「勉強内容」（下線②）について開示しているので、計 2 回の開示とする。

(1)

11　JM1902　　〇〇さんは今何をやられてるんですか

12　JM1901　　僕はあの博士課程の一年生①で、ええーと会計制度の勉強②を

4.5　結果と考察

4.5.1　自己開示の頻度

両グループにおける一人当たりの自己開示の平均頻度は図 4－1 のとおりである。

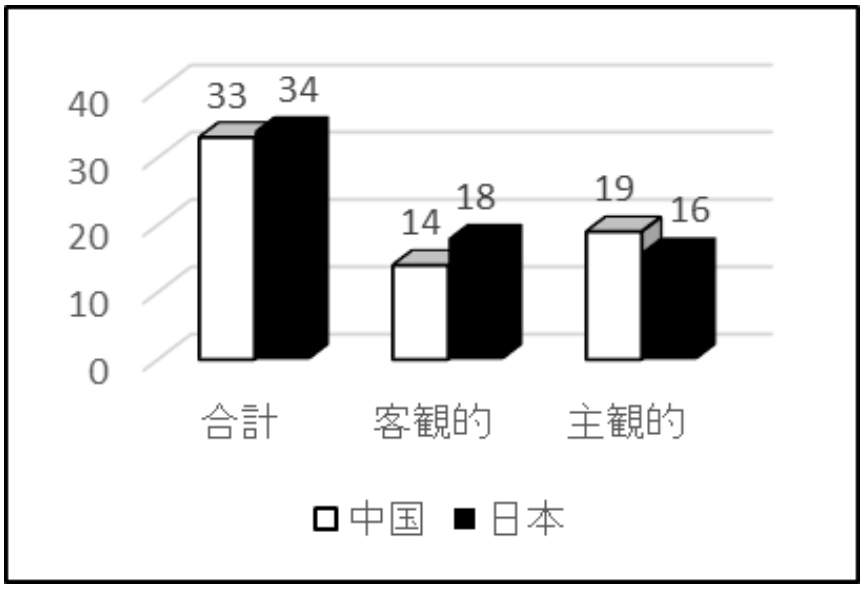

図 4－1　中国語会話と日本語会話の自己開示の頻度

図 4－1 で示したとおり、中国語グループは一人あたりに自己開示を 33 回おこない、日本語グループは 34 回おこなっていた。両グループの自己開示の合計にそれほど大きな差は見られなかった。情報の種類を見ると、中国語グループは主観的自己開示が客観

的自己開示よりやや多く、日本語グループは客観的自己開示が主観的自己開示より頻度がやや多いという結果になっているが、今回の調査の出現頻度を見るかぎりでは、日本人学生と中国人学生との間で明確な違いを見出すことは難しい。

4.5.2　自己開示の頻度の変化

4.2 節ですでに言及したように、西田（1994）の質問紙調査によれば、相手と出会ってまもなくの段階では、まず身の上に関連する表面的な内容を開示し、時間が経つにつれ、自分の意見や評価や見解などについて開示するという結果が示されている。しかし、実際の会話で客観的自己開示と主観的自己開示の頻度がどのように会話の時間によって変化するのかはまだ実証されていない。そこで、本研究では「会話開始から 5 分間」と「5 分以降」とを分けて、それぞれの自己開示の頻度を対照した。次に、自己開示の頻度の変化を分析する。

会話開始から 5 分間と 5 分以降の一人当たりの自己開示の平均頻度は、次の図 4－2 のとおりである。

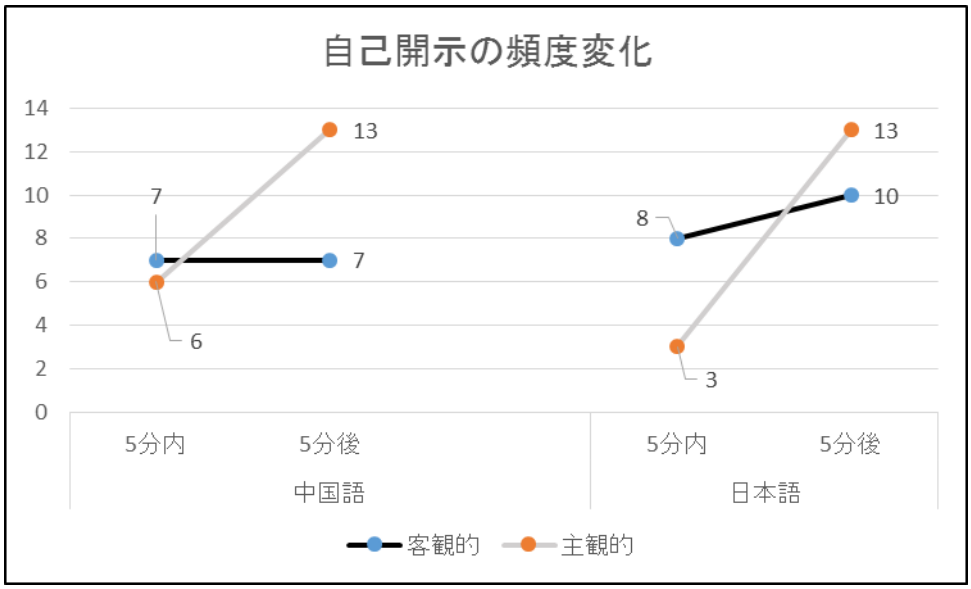

図 4－2　自己開示の頻度変化（一人当たりの回数）

中国語グループは、会話開始から 5 分間では、主観的自己開示と客観的自己開示とで頻度に大きな差はないが、5 分以降は主観的自己開示が大きく増加している。また、日

本語グループは、会話開始から 5 分間では、主観的自己開示の頻度が相対的に低いが、5 分以降は主観的自己開示の方が多くなっている。主観的自己開示と客観的自己開示のバランスの変化は日本語グループのほうが大きいと言える。これは、西田（1994）の日本人を対象とした質問紙調査の結果が会話データでも確認されたと言える。

4.5.3　客観的自己開示について

本節では、両グループの客観的自己開示と主観的自己開示の内容にどのような特徴があるのかを検討する。

4.5.3.1　調査結果の概要

客観的自己開示に関しては、日本人学生と中国人学生の違いを浮かび上がらせるために、自己紹介を含む身上的情報の【個人情報類】、自分の周りのことに関する【キャンパスライフ類】、及び自分の好みを紹介する【趣味類】という 3 種類に分けることにした。各類の出現頻度（各類の 1 組あたりの平均開示回数）を図 4－3 に示す。

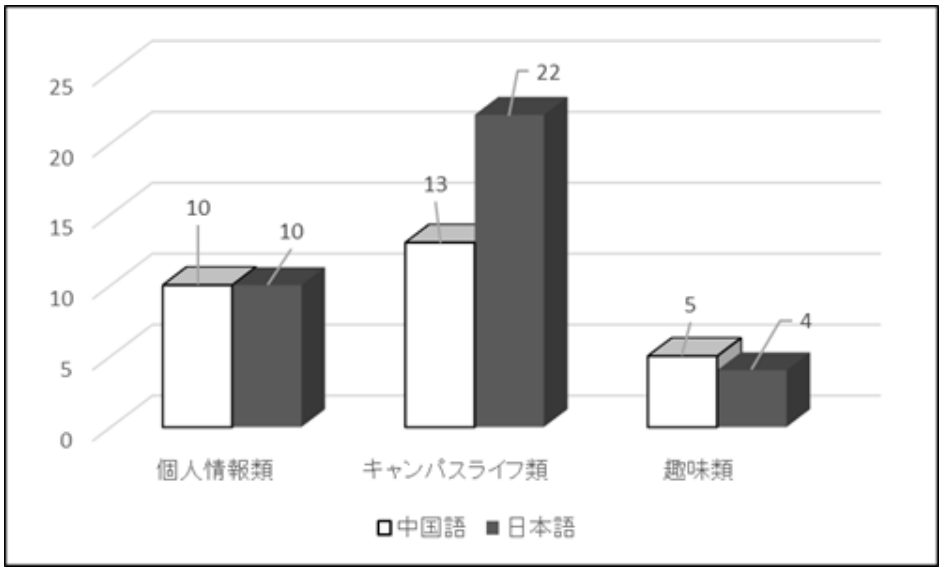

図 4－3　客観的自己開示（1 組あたりの開示回数）

日本語グループ、中国語グループは、【個人情報類】、【趣味類】の開示回数はほぼ同じである。また、日本語グループでも中国語グループでも、【キャンパスライフ類】が他の 2 種類の情報より多く開示されているが、日本語グループのほうが多く開示されている。【キャンパスライフ類】は協力者の周囲の生活と密接な関係があるため、初対面会話における開示内容として利用しやすいと考えられるが、初対面の人と話す時、日本人学生は自分の周囲のことがらから開示内容を選ぶことが中国人学生よりも多いということである。

3 種類の情報について、両グループに共通する開示内容（両グループともに頻度 10 以上）と両グループで異なる開示内容（一方のグループのみ頻度 10 以上で、かつ両グループの頻度差が 10 以上）のものを挙げると、表 4－2 のようになる（開示内容の分類には、第 3 章で示した「大分類」の分類を援用した）。

表 4－2　主な自己開示の内容

	両グループに 共通する開示内容	両グループで 異なる開示内容	
		中国語グループ	日本語グループ
個人情報類	名前（中 30、日 36） 学科（中 11、日 14） 学年（中 24、日 22） 専攻（中 34、日 30）	出身地（中 32、日 6）	実家（中 4、日 18）
キャンパスライフ類	イベント（中 20、日 45） 授業（中 20、日 31） 勉強（中 20、日 20） アルバイト（中 18、日 41） 資格試験（中 18、日 35）	帰省（中 18、日 0） 就職（中 24、日 6） 大学院入試（中 22、日 3）	サークル（中 6、日 48） 通学（中 6、日 30） ゼミ（中 0、日 35） 卒論（中 0、日 29） 留学（中 0、日 12）
趣味類	スポーツ（中 14、日 10） 映画（中 12、日 12）	－	－

以下、両グループの開示内容の異同について詳しく見ていく。

4.5.3.2　開示内容の共通点

【個人情報類】については、両グループともに「名前」、「学科」、「専攻」、「学年」という 4 つの自己開示の頻度が高い。西田（1994）が指摘しているように、人間関係を

形成するコミュニケーションの初期の段階では、コミュニケーションの参加者それぞれが相手についての不安・緊張等の不確実性を減少させようと試みる。これらはいずれも個人の背景に関わる内容であり、両母語話者ともに、相手と知り合う際には、このような基本的な所属情報の開示が必要であると言える。また、表 4－2 には示されていないが、恋愛、奨学金などプライバシーに関わる自己開示は中国語グループにおいても 1 組しか出現せず、日本語グループでも恋愛の開示は 1 組しか見られない。

【キャンパス類】に関して、共通の開示内容は「イベント」、「授業」、「勉強」、「アルバイト」、「資格試験」の頻度が高い。これらは中国の大学生も日本の大学生も勉学において重要であり、関心を持つ点が多く、相手との共通点を見つけて会話の展開を促進することに役立つということであろう。

【趣味類】に関して、開示内容の頻度が比較的高かったのは「スポーツ」と「映画」であり、それ以外は「ゲーム」、「食事」、「買い物」、「遊び」、「習い事」、「旅行」、「アイドル」、「漫画」、「映画」、「ダンス」、「音楽」、「パソコン」、「酒」など、様々な内容のものが少しずつ見られた。中国の大学生も日本の大学生も個人によって異なる趣味を持っていることの反映であろう。関心のあり方が多様なことを話すことで、話し相手からの関心を引き出すことができ、情報交換が活発になると考えられる。

4.5.3.3　開示内容の相違点

【個人情報類】では、中国語グループは「出身地」（中国語の“老家”（一族の出身地））、日本語グループは「実家」の情報開示の頻度が高い。中国語グループの大学生は遠方の都市から調査所在地の大学に通っている人が多い。それぞれの出身地を開示することで、そこから各自の出身地に関する様々な話題が派生される。また、同じ出身地であれば、同じ出身地の友人や帰省などの話題が派生され、その分相手との距離が縮まることになる。一方、日本語グループの大学生は毎日自宅から電車で大学に通っていることが多い。「実家」の所在地を開示した後、通学や電車の運転状況などの話題が派生されることが観察された。地縁関係の情報開示は会話の展開のために有効な手段である。同じ地縁に関わる個人情報であっても、中日大学生の生活及び背景が違うため、開示内容の選択の傾向に違いが見られるわけである。

また、両グループで相違がある開示内容は【キャンパスライフ類】が多い。これは各グループの大学生の生活背景や言語文化が異なるためである。中国語グループの学生の

開示内容は「大学院入試」、「就職」、「帰省」が多く、日本語グループの学生の開示内容は「サークル」、「ゼミ」、「卒論」、「通学」が多い（「留学」が多いのは調査対象となった大学で留学が奨励されていることによると見られる）。中国の大学生は大学院入試や就職に関心を持っており、それに関する情報・知識も多いので、「大学院入試」、「就職」に関する内容に言及すれば、その後の情報交換が活発になり、会話を展開しやすい。一方、日本人学生の開示内容に「サークル」、「ゼミ」、「卒論」、「通学」が多いのは、サークルやゼミはキャンパスライフの中で人との交流が多い場面であり、それに関する内容を言及すれば、共通の友人のことを話題にできるからと考えられる。

4.5.4　主観的自己開示について

4.5.4.1　調査結果の概要

4.5.1 で見たように、中国語グループは、どちらかと言えばというレベルではあるが、日本語グループより主観的な内容を多く開示した。内容的には、中国語グループでは大学の入学試験や社会の出来事などに対する意見や考えの開示が多く見られ、日本語グループでは意見や考えより、相手の話を聞いて「すごい！」「行きたい！」というように心情や感情を表現するものが多く出現している。このことをふまえ、ここでは、両グループに典型的な相違がある「心情・感情」の開示と「意見」の開示の二つについて、両グループの特徴について詳しく検討する。

4.5.4.2　「心情・感情」の開示

日本語グループでは、話し手が心情や感情を開示する時、通常とは異なる音調で過去の心情・感情をそのまま引用したり。「すごい！」「うれしい！」など一つの感情形容詞だけで発話時の心情を直接的に表出することが多く見られた。

会話例(2)は、タイの洪水の時期が収束したばかりの時にタイに旅行したときの話である。丁寧体基調の発話の中で、JF1502 は 173 行目で「あーそこがこうなっちゃったなー」、「ちょっとあー大丈夫かなー」と過去の心情をそのまま引用し、現場の雰囲気を生き生きと再現しているが、175 行では再び丁寧体に戻り、旅行の心情を淡々と相手に伝えている。

(2)〈日本語グループ〉過去の心情開示

170　JF1501　見た場所がテレビで映ってる感じ？

171　JF1502　そうそうそう。ま、全部じゃないですけど。

172　JF1501　わー。

173　JF1502　なんかちょいちょい出てきて、あーそこがこうなっちゃったなーみたいになって、ちょっとあー大丈夫かなーって心配なんですけど。

174　JF1501　うん。

175　JF1501　でも楽しかったですよ。

次の会話例(3)は学生食堂に関する会話である。会話全体の基調は丁寧体であるが、282 行では、「へーすごい」と普通体に転換している。「すごい」という極めて短い言葉で、その場で生じた感情を直接表出している。

(3)〈日本語グループ〉発話時の心情開示

275　JM0601　学内で、だから自炊はしていないです。特には。

276　JM0602　高かったんですか？

277　JM0601　高かったかなー。なんかプランがありますね。

278　JM0602　はい。

279　JM0601　学生証みたいなのがあって、チャージできて。

280　JM0602　へー。

281　JM0601　チャージして、それでぴったり買えるんですね。

282　JM0602　へーすごい！

283　JM0601　だから食べられないと思ったら、安めにしといて。

これに対し、中国語グループの心情を開示する場合は、気持ちを直接的に表出するのではなく、過去か発話時かに限らず、評価やコメントのような形になっている。次の(4)の会話例は就職の悩みに関する会話話である。CM1001 が就職に関して自分の考えを述べた後、CM1002 は当時大学と専攻を選ぶときの悔しい心情を、引用ではなく、客観的に描写し、相手に伝えている。

(4)〈中国語グループ〉心情開示

37　CM1001　现在找工作，感觉只会一门语言的话，人家一脚就可以把你踢掉的那种。
（今どきの就職活動は、外国語が一つしかできないとすぐ落とされるという感じです。）

38　CM1002　说实话，我也有点后悔。我觉得当初上这个学校有点后悔，选这个专业又有点后悔。
（本当言うと、僕も少し後悔しています。当初この学校に進学したことを少し後悔しているし、この専攻を選んだことも後悔しています。）

この例に限らず、表現の傾向としては、日本語母語話者は簡潔に感情を直接開示するのに対し、中国語母語話者はより多くの表現を用いて感情を開示する傾向がある。

また、日本語母語話者は、感情に関して同調的な態度を示すことが多いのに対し、中国語母語話者にはそのようなことはあまり見られない。次の日本語会話例(5)は、アパートの一人暮らしに関する会話である。一人の話者は「いいですね」と自分の心情を伝えて、もう一人の話者は「そうですね」、「けっこう自由ですね」と返事し、互いに同調的、協働的な開示の様相を示している。

(5)〈日本語グループ〉

91　JF1101　え、じゃ今寮とかですか？

92　JF1102　いや、今は一人暮らしでアパートに住んでいますけど。

93　JF1101　あー学校の近くで？

94　JF1102　一応そうですね。自転車で 5 分ぐらいで。

95　JF1101　そうか。いいですね。

96　JF1102　そうですね。門限とかないですね。けっこう自由ですね。

一方、中国語会話例(6)は会話の冒頭部における名前の開示例である。名前が開示された後、使われる文字に関する好き嫌いなどの様々な感情の開示が見られたが、二人の話者は相手の開示した内容に対して、あまり同調することなく、それぞれ好きか嫌いかの感情開示により会話を展開している。

(6)〈中国語グループ〉

1　CF0301　你叫什么名字？

（お名前は何ですか？）

2　CF0302　我叫○○○。○是○○的○，○就是○○的○，○就是○字旁一个○○的○。

（○○○です。○は○○の○で、○は○○の○、○は○偏に○○の○です。）

3　CF0301　哦，知道了。

（はい、わかりました。）

4　CF0302　是不是很诡异这个名字，特别是那个○。他们都说这个名字像韩国人，但是我是中国人。

（変でしょう、この名前、特に○という文字ですが、いつも韓国人の名前に似ていると言われます。でも私は中国人です。）

5　CF0301　因为那个，就是那个○一般用不到。

（だから、あの、「○」は普通に使われないですね。）

6　CF0302　嗯，我觉得这个字很俗耶。

（うん、この文字は品がないと思います。）

7　CF0301　没有，我很喜欢。

（いいえ、私は好きです。）

8　CF0302　我超讨厌那个字。我觉得这个名字就这样被我毁了。

（私はあの字が大嫌いです。自分のせいでこの名前が汚されていると思っています。）

このように、両グループの母語話者は同じ気持ちを開示しても、異なる開示の様相が見られた。日本語母語話者は過去の心情をそのまま引用したり、感情形容詞で発話瞬間に生じた感情をそのまま表出したりすることが多く、相手の感情に同調的な態度を示すことも多い。三牧（2013）は、日本語母語話者の会話における自己の心情や思考の直接引用、あるいは発話時の自己の心情表出は、会話に親密な雰囲気を導入し、話者間の心的距離を接近するストラテジーであると述べているが、本研究の結果もそれに合致している。

一方、中国語母語話者は、自身の心情や感情を客観的に描写し、相手の感情に同調的な態度を示すことは少ない。これは、金文学（2012）が中国語母語話者は感情をできるだけ詳しく表現する傾向が強いと指摘していることと一致する。

4.5.4.3 「意見」の開示

4.5.4.1 で述べたように、中国語グループの会話では、日本語グループよりも自分の見解や意見の開示が多く見られたが、それぞれのグループは意見開示のあり方も異なる。

次の中国語会話例(7)は、大学生の英語テスト対策に関する話である。CF0302 は CF0301 の不安と悩みを解消するために、積極的にアドバイスを開示している。CF0301 が CF0302 のアドバイスを聞いた後に相変わらず不安を話し続けても、CF0302 は相手の不安に共感する態度を示さずに、「聴解を多く練習したほうがいいよ」、「心配しないでね」と積極的に相手を慰めている。

(7)〈中国語グループ〉

186　CF0302　我也裸考的，4 级基本上都是裸考的。
（私も復習なしで実力で受験したよ。4 級は基本的にみんなそうだよ。）

187　CF0301　对呀，他们说很简单很容易的。
（そう，彼らは簡単だと言っていた。）

188　CF0302　也不是很简单，就是你那个稍微听听听力比较好。
（そんなに簡単でもないけど。あの、あなたは聴解を少し練習するほうがいいよ。）

189　CF0301　我问题就在那听力上啊。
（私の問題は聴解にあるのよ。）

190　CF0302　就多听听。我们那个老师给我们材料，然后基本上就没怎么多复习，也没有很恐怖。我跟你讲，你不要怕的。那个老师说了，一般除极个别男士不过，女生都没问题的。你不要急的。
（それならたくさん練習して。私たちの先生は資料を配ってくれたけど、そんなに復習もしなかったし、そんなに心配してなかった。だからね、心配することないよ。先生はごく一部の男子学生はパスできないが、女子学生はみな大丈夫だと言ってた。あせらないで。）

191　CF0301　　我现在最急的就是英语。

（今一番あせっているのは英語なのよ。）

次の日本語会話例(8)は、授業の選択に関する話である。JM0601 はアドバイスを話す時、「～かね」という疑問表現を用いることで、断定を避け、相手に判断を委ねる態度を取っている。また、中国人学生と異なり、自分の意見や見解を一言で簡潔に述べている。そして、情報のやり取りがあった後、JM0602 は JM0601 のアドバイスを受け入れて納得する態度を示している。

(8)〈日本語グループ〉

161　JM0601　　名前分かってますね。

162　JM0602　　はい。

163　JM0601　　じゃ、〇〇先生とかのところで行って聞いたほうがいいですかね。

164　JM0602　　あ、〇〇先生の授業一回受けましたね。

165　JM0601　　はい。

166　JM0602　　僕はその時もすごく難しいって感じで。

167　JM0601　　音声と言ったら、もうあの人じゃないですか。

168　JM0602　　そうですよね。

169　JM0601　　あの人、言語学専門みたいですけど。

170　JM0602　　そうですよね。じゃ、聞いてみたほうがいいですかね、僕。

この二つの会話例に限らず、中国語母語話者は自分の意見をいくつかの発話で開示し、なるべく相手を説得しようとする姿勢を示す。一方、日本語母語話者は、自分の意見や見解を一言で簡潔に述べることが多く、その場合も、自分の意見を相手に押し付けず、相手が納得してくれるかどうかに配慮する傾向が見られた。井上（2013）が指摘しているとおり、中国人と日本人は相手との「距離感覚」が異なる。中国人は「自分と相手は離れている」という感覚を基本とし、日本人は「自分と相手は領域を接している」という感覚を基本とする。この「距離感覚」により、中国語母語話者は自分の意見を明確に言わないと自分の意見が相手に伝わらないと考える。一方、日本語母語話者は相手が自分の意見を受け止めるかどうかを考慮すると考えられる。

また、中国語グループによる意見の開示は、日本語グループのように簡潔に開示するのではなく、一つのテーマをめぐり話者双方の意見をまとまった話で開示することが多く見られた。次の中国語会話例(9)でも、家族構成の状況が開示された後、お年玉というテーマについて、141 行から議論が展開され、152 行目までで話題が収束し、153 行目から専攻という新しい話題に移行している。ここで、二人の話者は、「お年玉」というテーマから離れず、まとまった意見交換が示されている。

(9)〈中国語グループ〉

132　CM1502　我有一个姐姐，今年 26，刚刚生了一个小孩。【略】
（僕は姉が一人います。今年 26 で、子供を産んだばかりです。）

135　CM1501　哇，你上大学都当舅舅了，你也算是蛮幸福的。你过年有没有给你外甥包点红包啊什么的?
（わあ、大学に入ってもうおじさんになったんだ。幸せなほうですね。お正月に、甥にお年玉とかあげましたか？）

136　CM1502　红包？红包的话现在自己又不赚钱，就给了 100。【略】
（お年玉？お年玉だったら、今は自分は仕事をしているわけでもないし、100 元しかあげませんでした。）

141　CM1501　这个 100 块，哪怕你给 10 块，这是一种情义上的。
（その 100 元は、たとえ 10 元でも気持ちの問題ですよ。）

142　CM1502　对，只要有心。
（そう、気持ちがあれば。）

143　CM1501　你的心意就到了。我们讲究的是一种礼轻情义重对吧。不是你给一千一万就怎么样。要看你收入多少。比方，你的收入只有 10 块钱，你给他 5 块钱就比你家里有一个亿，你给他 1 万重。
（それであなたの気持ちは届きますよ。私たちが重んずるのは「ものが小さくても気持ちは重い」ということですよね？1000 元とか 10000 元あげてどうだという問題ではないです。収入によりますよね。例えば、あなたの収入が 10 元しかないのであれば、5 元あげるのは、家に一億元あって 1 万元あげるのより、気持ちがこもっているよね。）
（以下略　意見を述べ続ける）

151　CM1501　这个还是不错的，你能给你外甥 100，虽然现在还没收入对吧。
（今まだ収入がないのに甥に 100 元あげるということができるなんて、なかなかいいじゃないですか？）

152　CM1502　嗯。（うん）

153　CM1501　你不是学汽修的吗?
（車の修理を勉強しているんじゃないですか？）

154　CM1502　对。（そう）

難波・三牧（2010）は、中国語母語話者の話題展開パターンは「議論型」であり、話題を設定すると、それぞれの話者が意見を述べ合った後に次の話題に移行すると述べているが、今回の調査結果もそれと合致する。

4.6　まとめ

本章では、中国人学生、日本人学生の会話データに基づき、「客観的自己開示」と「主観的自己開示」の二つの観点から、中国人学生、日本人学生が初対面場面で自分のことに関して、どのような情報をどのように開示するのかを探ることを試みた。

初対面の相手に対して、今回の調査では、中国人学生、日本人学生の自己開示の回数はほぼ同じであるが、どちらかと言えば、中国人学生は「主観的自己開示」の回数が多く、日本人学生は「客観的自己開示」の回数が多かった。

会話開始から 5 分間と 5 分以降を比較すると、中国語グループは、会話開始から 5 分の間で主観的自己開示と客観的自己開示とで頻度に大きな差はないが、5 分以降は主観的自己開示が大きく増加していた。また、日本語グループは、会話開始から 5 分間では、主観的自己開示の頻度が相対的に低いが、5 分以降は主観的自己開示の方が多くなっていた。

中国人学生、日本人学生ともに、会話の最初に両母語話者ともに基本的な所属情報を開示し、相手についての不安・緊張等の不確実性を減少させるようにするが、プライベートな領域に踏み込む開示は避けられる傾向がある。その一方で、中国人学生は「大学院入試」、「就職」といった将来志望の内容を、日本人学生は「サークル」、「ゼミ」、「卒論」といった現在のキャンパスライフに密接な関係がある内容を開示することが多く見られた。また、同じく出身地関係の情報を開示するとしても、中国人学生は「老家」（一

族の出身地）を、日本人学生は「自宅」を選択した。自己開示の内容は個人差もあるが、やはり日本語と中国語とでは自己開示スキーマ（三牧・難波，2010）に相違があると考えられる。

感情や見解などの主観的な内容に関しても、中国語母語話者は、多くの表現を用いて感情を客観的に描写するが、相手の感情に共感を示すことは少ない。また、一つのテーマについて、まとまった話で積極的にお互いの意見を交換し、ほかの話題に移行することが多い。一方、日本母語話者が心情を開示する梅は、過去の心情をそのまま引用したり、「うれしい」「辛い」など形容詞だけで発話時に生じた感情をそのまま表出したりすることが多い。また、相手の感情に共感を示し、自分の意見をや見解を述べる場合も、一言で簡潔に述べることが多い。村松（1977）は、日本人は自分の意見や感情をはっきり表明することは相手に気まずい思いをさせたり、相手を傷つけたりするかもしれないと考えると述べている。今回の調査結果もそのことが反映されたものと考えられる。

第 5 章　中国語会話と日本語会話の
情報提供発話の出現パターンの研究

5.1　はじめに

5.2.　会話における情報提供発話の現れ方

5.2.1　分析の枠組み

5.2.2　分析結果

5.3.　情報提供発話の出現パターン

5.3.1.　分析の枠組み

5.3.2　分析結果

5.4　会話における質問の機能

5.4.1　質問の分類と調査結果

5.4.2.　本研究のデータにおける質問発話の機能

5.5　一つの話題の中での会話参加者の役割交替

5.5.1　会話参加者の役割交替のパターン

5.5.2　分析結果と考察

5.6　まとめ

第５章　情報提供発話の出現パターンに関する研究

5.1　はじめに

会話の持続・展開のために最も重要なことは、会話参加者が情報を提供し続けることである。このことをふまえ、本章では「情報提供発話がどのように現れるか」という観点から、中国語会話と日本語会話の展開様式について考察する。

中国語会話と日本語会話を比較すると、情報提供発話の出現のしかたが異なるという印象を受ける。例えば、次の二つの会話を比較しよう。

（1）

220　JM0102　何人ぐらい受けたの？

221　JM0101　ええと、日本人は多分政策管理とマック[注1]のほう、合わせてたぶん 5 人ぐらいなんですけど。

222　JM0102　政策管理。

223　JM0101　はい。で、その会計の方はもう、政策管理で一人、ぼくだけ日本人の学生は。

224　JM0102　うん。

225　JM0101　あと、あの会計という分野なんですけど、それで。

226　JM0102　それは全部だよね？

227　JM0101　いや、違う。

228　JM0102　違うんだ。

229　JM0101　はい。全員落ちたみたいで、留学生と社会人学生しか受からなかったかな。

(2)

45　CM0601　你们班有没有湖南的?

（あなたたちのクラスには湖南省からの学生はいますか？）

46　CM0602　我们班湖南人很少的，外省人就两个，还是福建的。

---

[1] マックはマーケティングの略称である。

（うちのクラスは湖南省出身の人は少ないです。他の省からの学生は２人だけで、そして福建省の出身です。）

47　CM0601　不过大四的好像对湖南招生只招 20 个。

（でも、４年生のクラスは湖南省に対する学生の応募 20 人しかないみたいです。）

48　CM0602　说实话外省人真的不是特别多。

（正直に言うと、他の省からの人はまじそんなに多くないです。）

49　CM0601　从我这一届开始对外招生就更加开放了。

（僕の学年から外の省向けの応募人数がもっと増えてきました。）

50　CM0602　我都快毕业了，对下面的情况不太了解。

（僕はもうすぐ卒業だから、下の学年の状況はあまり分からないですね。）

発話番号と話者番号を四角で囲んだ発話は情報提供発話である。また、実線部分は質問に答える形で情報を提供する発話、点線部分は質問なしに話者が自分から情報を提供する発話である。

日本語会話(1)では、情報提供者はすべて JM0101 であり、JM0101 は JM0102 の相づちをはさんで、情報の提供を続けている。(1)の会話は、全体として、JM0101 が情報提供者（楊虹 2015 の言う「話題上の話し手」にほぼ相当）、JM0102 は情報受信者の役割（楊虹 2015 の言う「話題上の聞き手」にほぼ相当）を担っている。楊虹（2015）でも、話題上の話し手・聞き手の役割交替について分析をおこない、「日本語母語場面では、話題上の話し手と聞き手が比較的固定的である」と指摘されている。

一方、中国語会話(2)では、会話参加者である CM0601 と CM0602 は同程度の情報を提供しており、点線部分の発話では、互いに相手が提供した情報に関連する別の情報を提供し合っている。これは、日本語会話(1)のように、一方が情報提供者でもう一方が情報受信者である状態が続くのとは異なっている。楊虹（2015）でも、「日本語母語話者に比べ、中国語母語場面では、話し手と聞き手の役割交替が頻繁にみられ、聞き手側だった参加者が話し手役割の発話をする場合が多く見られる」と指摘されている。

質問に答える形で情報を提供する場合も、中国語会話と日本語会話では情報提供発話の現れ方が異なる。例えば、日本語では、次の(3)のように「相手の発話内容を繰り返し

て確認する→それに回答して情報を確かな情報とする」というパターンがよく見られる。（繰り返しは確認的に用いられる場合もあれば、相づち的に用いられる場合もある。両者の区別は微妙なことも多いが、本研究では、話しぶりなどから、話し手が能動的に確認をおこなっているという印象を受けるものは「確認的発話」、受動的に繰り返しているだけという印象を受けるものは、相手が「はい」と続けていても、「相づち」として数えた）。

(3)

1A: 私は○○学科の 4 年生で、○○と申します。

2B: ○○さん。　（確認）

3A: はい。　（肯定）

4B: はい。

5B: ええと、私は●●学科の、3 年生の●●といいます。

6A: 3 年生ですか？　（確認）

7B: 3 年生です。　（肯定）

8A: あたし、●●に知り合いがいるんですけど、

（宇佐美まゆみ（2011）監修、BTSJ コーパスによる）

下線部分は、相手が言ったことを繰り返して確認し、それに対する回答によって情報が確かな情報になるというパターンである。2B と 3A では名前の確認、6A と 7B では学年が確認の対象になっているが、日本語会話ではいずれの場合も確認は不自然ではない。中国語会話でも、相手が自分の知人と同じ学年であることを聞き、驚いて“三年级呀？”（3 年生ですか？）と確認することはありうる。しかし、2B のような名前の確認は、名前がうまく聞き取れなかった場合を除いて、あまりおこなわれない。確認を通じて情報を確かなものにするというストラテジーは、中国語より日本語のほうがよく用いられると思われる。

このように、日本語会話と中国語会話では情報提供発話の出現パターンに違いが見られる。以下では、日本語会話と中国語会話における情報提供発話の出現のしかたについて、複数の観点から比較をおこなう。分析に用いるデータは、第 3 章、第 4 章と同じく、中国語母語話者同士、日本語母語話者同士の初対面自由会話のデータ（中国語母語

場面 19 組、日本語母語場面 18 組の初対面自由会話の録音データ）である。会話は二人 1 組のペアで行われ、長さは 20 分である。

5.2. 会話における情報提供発話の現れ方

5.2.1 分析の枠組み

会話における情報提供発話の現れ方に関する研究は、質問に対する応答に焦点をあててなされることが多い。桃内（1983）は、応答に焦点を当てて、日本語母語話者が質問に対してどの程度の情報を付加して応答するかを考察している。吉田（2008）は、日本語学習者の談話展開における情報要求表現について考察している。串田（2007）は、日本語会話における「WH 質問―応答」連鎖について考察している。

しかし、情報が提供されるのは質問の後だけではない。本研究では、前述の会話データに出現する情報提供発話を次の三つのタイプに分け、日本語会話と中国語会話においてどのような情報提供発話がどの程度出現するかについて考察する。

Ⅰ　回答式　情報要求に回答する形で情報を提供する。

Ⅱ　双方式　相手が先行発話で提供した情報に関連する別の情報を提供する形で情報を提供する。

Ⅲ　自発式　相手が相づち発話をおこなったのに続ける形で自発的に情報を提供する。

以下、それぞれのタイプについて簡単に説明する。

次の(4)、(5)は、情報要求に回答する形で情報を提供する「回答式」の例である。

(4)（回答式）

28　JF0701　へーえ、サークルは何入っていますか？　（情報要求）

29　JF0702　サークルは劇団集いっていう。　［回答式］

(5)（回答式）

3　CM0401　就是，你大几的呀？　（情報要求）

（あの、何年生ですか？）

4　CM0402　我大二的。　［回答式］
（二年生です。）

次の(6)、(7)は、相手が提供した情報に関連する別の情報を提供する形で情報を提供する「双方式」の例である。(6)では、JF1001 が「外国人の日本語」について自分の考えを話した後、JF1002 も「外国人の日本語」について自分の考えを話している。また、(7)では、CF0301 が自分の親の態度について情報提供をおこなった後、CF0302 も自分の親の態度について情報提供をおこなっている。

(6)（双方式）
63　JF1001　すごいと思う。逆に自分が外国人で日本に来てあんまりしゃべれないなと思ってて。　（情報提供）
64　JF1002　うん、なんでよくそこまでしゃべれるようになったなーと思いますけどねいつも。　［双方式］

(7)（双方式）
153　CF0301　没有，我爸妈也算奇葩。对我说你不要回来，少回来，上个大学天天回来像什么样子。　（情報提供）
（ううん、私の両親はけっこう怪しいです。私に「帰らないで，あまり帰らないで。大学に通っているのに毎日帰るなんて」と言ってたよ）
154　CF0302　我妈也说（方言で）回来干嘛 HHH（笑い声）真受不了。　［双方式］
（うちのママも（方言で）帰って何するのと言うの。HHH（笑い声）まったく）

次の(8)は、相手が相づち発話をおこなったのに続ける形で自発的に情報を提供する「自発式」の例である。この例では、「人口」に関する JF1101 の情報提供に対して JF1102 が「へーそうなんだ」と相づちを打った後、JF1101 が「マンションの値段」について情報提供を続けている。

(8)（自発式）

397　JF1101 少ないですよ。あの面積なのに、東京の人口より低い。

398　JF1102 へーそうなんだ。　（相づち）

399　JF1101 人数なので、だから敷地もでかいし、たぶん日本でマンションを買うぐらいのお金ですごいでかいのを作れるみたいかな。　［自発式］

次の(9)の会話では、「回答式」が 1 回、「双方式」が 1 回、「自発式」が 2 回、出現している。

(9)（回答式 1 回、双方式 1 回、自発式 2 回）

55　CF0201　是哪个学校？　（情報要求）
（どの学校ですか？）

56　CF0202　就是○○○中学。　**［回答式］**
（○○○中学校です。）

57　CF0201　○○○中学，我认识一个学长，他也是○○○中学的。　**［双方式］**
（○○○中学校は先輩を一人知っていますよ。彼も○○○中学校の出身です。）

58　CF0202　啊。　（相づち）
（へー。）

59　CF0201　就在这个学校。　**［自発式］**
（この大学にいます。）

60　CF0202　哦。　（相づち）
（えっ。）

61　CF0201　他也是你们南通的呀。那个说不定你还能认识呢。　**［自発式］**
（彼もあなたと同じ南通の出身ですよ。もしかしたら、あなたも彼のことを知っているかもしれませんよ。）

また、本章の冒頭にあげた(1)、(2)の例では、「回答式」、「双方式」、「自発式」が次のように出現している。

(10)（=(1)）（回答式 2 回、自発式 4 回）

220　JM0102　何人ぐらい受けたの？　（情報要求）

221　JM0101　ええと、日本人は多分政策管理とマックのほう、合わせてたぶん 5 人ぐらいなんですけど。　**［回答式］**

222　JM0102　政策管理。　（相づち）

223　JM0101　はい。で、その会計の方はもう、政策管理で一人、ぼくだけ日本人の学生は。　**［自発式］**

224　JM0102　うん。　（相づち）

225　JM0101　あと、あの会計という分野なんですけど、それで。　**［自発式］**

226　JM0102　それは全部だよね？　（情報要求）

227　JM0101　いや、違う。　**［回答式］**

228　JM0102　違うんだ。　（相づち）

229　JM0101　はい。全員落ちたみたいで。　**［自発式］**

230　JM0102　へー。　（相づち）

231　JM0101　留学生と社会人学生しか受からなかったかな。　**［自発式］**

(11)（=(2)）（回答式 1 回、双方式 5 回）

45 CM0601　你们班有没有湖南的？　（情報要求）
（あなたたちのクラスには湖南省からの学生はいますか？）

46 CM0602　我们班湖南人很少的，外省人就两个，还是福建的。　**［回答式］**
（うちのクラスは湖南省出身の人は少ないです。他の省からの学生は 2 人だけで、そして福建省の出身です。）

47 CM0601　不过大四的好像对湖南招生只招 20 个。　**［双方式］**
（でも、4 年生のクラスは湖南省に対する学生の応募 20 人しかないみたいです。）

48 CM0602　说实话外省人真的不是特别多。　**［双方式］**
（正直に言うと、他の省からの人はまじそんなに多くないです。）

49 CM0601　从我这一届开始对外招生就更加开放了。　**［双方式］**
（僕の学年から外の省向けの応募人数がもっと増えてきました。）

50 CM0602　我都快毕业了，对下面的情况不太了解。　**［双方式］**

（僕はもうすぐ卒業だから、下の学年の状況はあまり分からないですね。）

日本語会話(10)と中国語会話(11)を比較すると、前者では「自発式」が多く現れているのに対し、後者では「双方式」が多く現れている。これは、中国語会話(11)では、会話参加者が互いに情報を提供し合っているのに対し、日本語会話(10)では一方が情報提供者でもう一方が情報受信者であるということに対応するものである。

5.2.2　分析結果

上記の分析の枠組みに基づき、本研究のデータから情報提供発話を抜き出し、それらを「回答式」、「双方式」、「自発式」に分類し、それぞれの出現頻度を数えた。次の図 5－1 は、本研究のデータとした中国語会話と日本語会話において、「回答式」、「双方式」、「自発式」の情報提供発話が、1 組の会話の中に平均何回出現したかを示したものである。

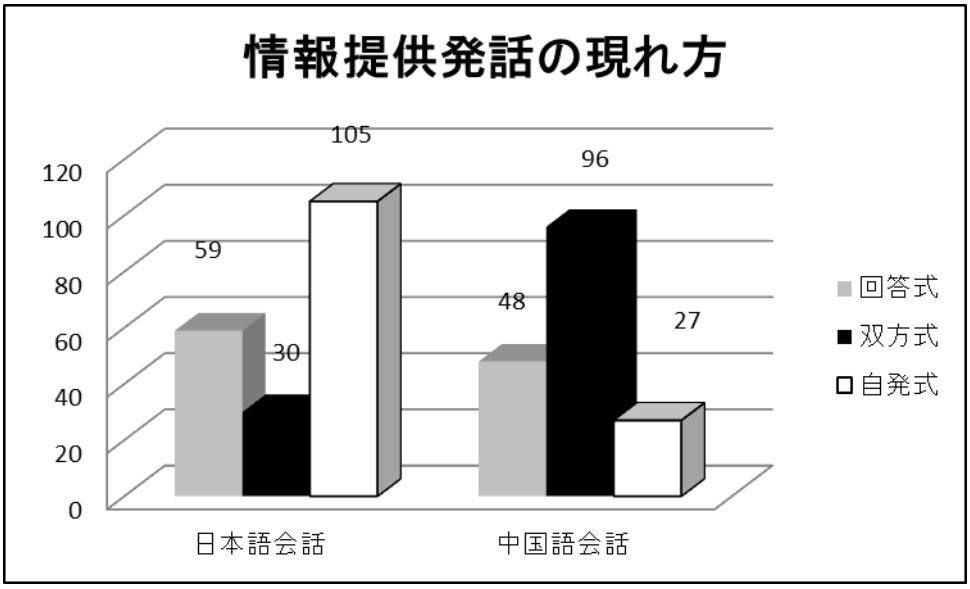

図 5－1　日本語会話と中国語会話の情報提供発話の現れ方

図 5－1 からわかるように、日本語会話では、情報提供発話は「自発式」（1 組平均 105 回）がかなり多く、「双方式」（1 組平均 59 回）が少ない。すなわち、先行発話に関連する情報を提供する形で情報提供発話が出現するよりも、情報受信者が質問や相づち的発話により次の情報提供発話を促進し、情報提供者が自発的に情報を提供するというパ

ターンが多い（前述のように、繰り返しは「確認」と「相づち」の区別が微妙だが、仮に繰り返しを機械的に「確認」ととらえたとしても「双方式」の数が少ないことに変わりはない)。

一方、中国語会話では、「双方式」が他の二つのパターンよりかなり多く（1 組平均 96 回)、「回答式」（1 組平均 48 回）がそれに続き、「自発式」（平均 1 組に 27 回）が最も少ない。すなわち、中国語会話では、「相手の発言内容に合わせて別の情報を提供する」ことが日本語より多い。井上（2013）は、中国語のコミュニケーション様式は「情報のやりとり」を重視する「シーソー型」であると述べているが、これも「相手の発言内容に合わせて次に何か言う」のが中国語の会話の基本だということである。

本章の冒頭で、日本語会話(1)と中国語会話(2)を比較して、前者が「一方が情報提供者、もう一方が情報受信者という状態が続く」のに対し、後者は「会話参加者が互いに情報を提供し合っている」ということを述べたが、この相違が日本語会話と中国語会話の一般的な相違であることが会話データによって確認されたと言える。

5.3. 情報提供発話の出現パターン

5.3.1. 分析の枠組み

前節では、会話における情報提供発話に「回答式」、「双方式」、「自発式」の三つがあることを述べたが、本節では、日本語会話、中国語会話において、この 3 種の発話がどのように連鎖して会話が展開されているかについて見ていく。

「回答式」、「双方式」、「自発式」の連鎖のパターンには、以下の 9 通りがある。

① 自発式→自発式
② 自発式→双方式
③ 自発式→回答式
④ 双方式→自発式
⑤ 双方式→双方式
⑥ 双方式→回答式
⑦ 回答式→自発式
⑧ 回答式→双方式
⑨ 回答式→回答式

次の例は「自発式→自発式」の連鎖の例である。JF1002 が「あー」と相づちを打ったあとで、JF1001 が新しい情報を提供するということを繰り返している。

(12)

240　JF1001　うん、できるけど、基本的にたぶん。

241　JF1002　あー。　（相づち）

242　JF1001　なんか第二言語も、中国語は外国語学部の学生と一緒なんだけど、なんか他の言語は経済の人だけみたいなの。　**［自発式］**

243　JF1002　あー。　（相づち）

244　JF1001　そうそう、ほんとうにサークルとか何も入ってない人は関わらない外国の人と。　**［自発式］**

次の(13)も「自発式→自発式」の連鎖を含む例である。(12)では、一つの情報提供が終わった後に相づちが入り、その後に別の情報が提供されるが、(13)の「自発式→自発式」の連鎖では、情報提供の途中で相づちが挿入されている。

(13)

26　JF0402　ではない。なんか英語の授業、中途半端で、うちらの専攻、ほんとうに。

27　JF0401　え、中途半端。　（相づち）

28　JF0402　中途半端。　**［自発式］**

29　JF0401　中途半端（笑い）はいはい。　（相づち）

30　JF0402　実際まじで中途半端で、英語の授業も英コミとかよりぜんぜん少ない。　**［自発式］**

31　JF0401　ああ。

次の例は、「回答式→自発式」の連鎖の例である。回答に対する相づちに続けて情報が追加されている。

(14)

347　JF1102　気温差とかそういうのは？　（情報要求）

348　JF1101　気温差はすごいあったですねー。　**［回答式］**

349　JF1102　そうなんですか。　（相づち）

350　JF1101　本当に真反対ですね。　**［自発式］**

次の例は、「自発式→回答式」の連鎖を含んでいる。

(15)

152　JF1102　で、なんかちょっと薄暗くなってきたぐらいに、一人でカレーを食べて、めっちゃ虚しくて。

153　JF1101　へー。　（相づち）

154　JF1102　すごい悲しかったです。　**［自発式］**

155　JF1101　へー。　（相づち）

156　JF1102　最初はなんかちょっとホームシック気味でしたねーでも。　**［自発式］**

157　JF1101　え、今はもう？　（情報要求）

158　JF1102　今はもうなんか生活にも慣れたし、友達もいるんで。　**［回答式］**

159　JF1101　あ、そうですね。　（相づち）

次の例は、「回答式→双方式」の連鎖の例である。相手の回答を受けて別の情報が提供されている。

(16)

168　CF0302 你们现在课多吗？ 这学期。　（情報要求）

（あなたたちは今授業が多いですか？今学期。）

169　CF0301 这学期，总的来说多了，比上学期。上学期我们很多下午都没课的嘛，现在下午都有课。　**［回答式］**

（今学期、全体的に多くなりました、先学期よりは。先学期は午後に授業がないことが多かったです。今は毎日午後に全部授業が詰まっています。）

170　CF0302 我上学期不空啊，这学期还好，没有很忙。　**［双方式］**

（私は先学期空き時間がなかったです。今学期はまだいいです。そんなに忙しくないです。）

次の二つの例は「回答式→回答式」の連鎖の例である。(17)、(18)は、情報受信者（質問者）と情報提供者の役割が交替しない場合である。(17)では、CM0701 が CM0702 の回答に対する確認を行い、CM0702 がそれに回答している。(18)では、CM0402 の回答を受けて、CM0401 が別の内容について質問し、CM0402 がそれに回答している。

(17)

24　CM0701　那大概多少分？　（情報要求）
（じゃ、何点ぐらいですか？）

25　CM0702　三百四十几。　**［回答式］**
（三百四十ぐらいです。）

26　CM0701　三百四十几啊？　（情報要求）
（三百四十ぐらい？）

27　CM0702　对呀。　**［回答式］**
（そうですよ。）

(18)

49　CM0401　像我们现在的话，你有没有考研的打算？　（情報要求）
（私たちの今みたいな状況だったら、大学院に行くつもりはありますか？）

50　CM0402　嗯，暂时没有，我想毕业之后直接步入社会的。　**［回答式］**
（ええと、とりあえずないです。卒業したら直接社会人になりたいです。）

51　CM0401　哦。你有一个什么样的打算呀？　（情報要求）
（へえ。どのような考えがあるんですか？）

52　CM0402　毕业之后的话，可能会找一份，先通过自己关系找一份，渠道吧，自己有一定的渠道，找一份稳定的工作，从基层干起来。　**［回答式］**
（卒業した後、たぶん一つ、自分のツテで一つ，ルートというか、自分にある程度ルートがあるから、安定した仕事を探して、末端からやりま

す。）

次の(19)も「回答式→回答式」の連鎖の例であるが、この場合は、情報提供者が情報提供に続けて質問を行い、情報受信者（質問者）と情報提供者の役割が交替している。

(19)

13　CM1101　你家在哪边的啊？　（情報要求）

（おうちはどこですか？）

14　CM1102　我家是扬州的。　**［回答式］**　你们那儿呢？　（情報要求）

（楊州です。君の家は？）

15　CM1101　我南通的呀。扬州教育质量怎么样？我只知道南通教育比较好。**［回答式］**

（僕は南通ですよ。楊州の教育の質はどうですか？ 南通は比較的いいとは知っているけど。）

次の例は、「双方式→回答式」の連鎖を含む例である。相手の情報を受けて、また情報提供をおこなう。

（20）

112　CM0602　你毕业后准备留在这边吗？　（情報要求）

（卒業した後こちらに残りますか。）

113　CM0601　看情况吧。这边其实也挺好的。　**［回答式］**

（状況によるかな。実はこちらもいいですよ。）

114　CM0602　我一般过年还有寒假暑假的时候回去。　**［双方式］**

（僕は普通年越し、また冬休み夏休みのとき実家に帰ります。）

115　CM0601　我一年回家两次。　**［双方式］**

（僕は一年に二回帰ります。）

116　CM0602　坐火车？　（情報要求）

（電車で。）

117　CM0601　回家一般先到上海，然后从上海坐车。　**［回答式］**

（帰るときは普通まず上海に着いて、その後上海から電車に乗ります。）

次の会話例は、「自発式→双方式」という連鎖を含む例である。

(21)

128　CF0201　我们不管冬天夏天都是靠近 10 点下晚自习的。

（私たちは冬でも夏でも 10 時に近く夜の実習が終わります。）

129　CF0202　哦。　（相づち）

（へえ。）

130　CF0201　我们早读课也上得很早的。我们 6 点钟班上人基本都到了，在那边读书。

（私たちの早読レッスンも早かったです。6 時に同級生が基本的に全部集まってクラスで本を読み始めました。）　**［自発式］**

131　CF0202　我们是 6 点 20 到齐的。　**［双方式］**

（私たちは 6 時 20 分に集まりました。）

次の会話例は、「双方式→自発式」という連鎖を含む例である。

(22)

223　CF0301　我们就是很惨的那种。　（情報提供）

（私たちは惨めなほうです。）

224　CF0302　我也觉得。我们也是的，我们那个班经常受排挤的。　**［双方式］**

（私もそう思っています。私たちもそのような感じで、私たちのクラスはいつも無視されていました。）

225　CF0301　对呀。　（相づち）

（そうですね。）

226　CF0302　但是总比这边的那个宿舍好。　**［自発式］**

（それでもここのあの寮よりはいいです。）

次の会話例では、「回答式→双方式」という二つの連鎖が含まれている。会話参加者が互いに情報を提供しあっている。

(23)

168　CF0302　你们现在课多吗？ 这学期。　（情報要求）

（あなたたちは今授業は多いですか？今学期。）

169　CF0301　这学期，总的来说多了，比上学期。上学期我们很多下午都没课的嘛，现在下午都有课。　［回答式］

（今学期、全体的に多くなりました、先学期よりは。先学期は午後は授業がないことが多かったです。今は毎日午後に授業があります。）

170　CF0302　我上学期不空啊，这学期还好，没有很忙。　［双方式］

（私は先学期空き時間がなかったです。今学期はまだいいです。そんなに忙しくないです。）

171　CF0301　我们没有像你们那种从头，下午上到 5 点半的，没有的。　［双方式］

（私たちはあなたたちのように一限からで，午後は 5 時半までという授業はないですよ。ないです。）

(23)には「双方式→双方式」という連鎖も含まれているが、「双方式→双方式」にはいくつかのパターンがある。次の(24)では、相手が提供してくれた情報に対して、賛成あるいは反対を述べている。

(24)

39　CF1301　跟谁去的啊？　（情報要求）

（誰と一緒に行くんですか。）

40　CF1302　同学啊什么的，基本上大多是同学，就是一帮能唱的跟她们去会比较好。　［回答式］

（同級生とかです。基本的に同級生で、あの歌える人、一緒に行ったほうがいいです。）

41　CF1301　是啊。跟麦霸似的。　［双方式］

（そうですね。マイク達人みたいです。）

42　CF1302　对呀。其实跟麦霸去会比较好。如果那种不唱的，就你在。　［双方式］

（そうですね。実はマイク達人と一緒に行ったほうがいいです。あまり歌わない人がいても（現場の雰囲気が冷たくないです。）あなたがいる

わけです。）

43　CF1301　不过有些人觉得跟我一起去不好，她都唱不了。　［双方式］

（でも私と一緒に行くのはよくないと思っている人もいます。彼女はぜんぜん歌えなくて（私がマイクを独占してしまいます）。）

44　CF1302　也没有啊。你唱你的。　［双方式］

（そんなことないですよ。あなたはあなたの分を歌えばいいです。）

次の(25)では、互いに相手の提供してくれた情報に基づいて情報を補足している。

(25)

54　CM0901　○○○○学院，你有没有去过？　（情報要求）

（○○○○学院、行ったことがありますか。）

55　CM0902　我去过。　［回答式］

（あります。）

56　CM0901　宿舍很好的。　［双方式］

（寮はとてもいいです。）

57　CM0902　它也就那样。　［双方式］

（そんな感じですね。）

58　CM0901　有空调有电视。　［双方式］

（エアコンもあってテレビもあります。）

59　CM0902　还有热水器。　［双方式］

（湯沸かし器もあります。）

60　CM0901　不过要 2000 呢。　［双方式］

（でも入寮費は 2000 元かかりますよ。）

(26)では、相手の提供してくれた情報と対照して、情報提供を行っている。

(26)

168　CF0302　你们现在课多吗？这学期。　（情報要求）

（あなたたち今授業が多いですか。今学期は）

169　CF0301　这学期，总的来说多了，比上学期。上学期我们很多下午都没课的嘛，现在下午都有课。　［回答式］

（今学期は、全体的に多くなりました。先学期と比べて。先学期は午後授業がない日が多かったですが、今は午後授業が詰まっています。）

170　CF0302　我上学期不空啊，这学期还好，没有很忙。　［双方式］

（私は先学期ぜんぜん空いていなかったですが、今学期はまだよくて、そんなに忙しくないです。）

171　CF0301　我们没有像你们那种从头，下午上到 5 点半的。没有的。　［双方式］

（私たちはあなたたちのような朝の頭から午後 5 時半まで一日中ずっと授業をやる日がないです。ないです。）

172　CF0302　我们有的。　［双方式］

（私たちはあります。）

173　CF0301　我们没有的。　［双方式］

（私たちはありません。）

(27)では、相手の提供してくれた情報に対して、自分の考えを述べている。

(27)

230 CM1501　好像开学典礼上的那个是不是你们拍的？　（情報要求）

（入学式の時のあれ（映像）、あなたたちが撮影したものみたいですよね？）

231 CM1502　对，那个也是我们 DV 社安排学生老师去拍的。　［回答式］

（そうです。あれも私たち DV 社が学生と先生を手配して撮影したものです。）

232 CM1501　你们 DV 社还是蛮牛逼的嘛。　［双方式］

（あなたたち DV 社は素晴らしいほうだと思いますよ。）

233 CM1502　也不算牛逼吧，在里面打打酱油。　［双方式］

（素晴らしいとは言えないでしょう。（サークルの中でイベントの組織や管理などが）緩いほうだと思います。）

234 CM1501　能进也不错了。我参加那个红十字协会什么的，交了 10 块钱就没我的事

了。　［**双方式**］

（そういうイベントに参加すること自体はもう十分だと思います。僕が参加している赤十字会は入会金を 10 元払うことはまだ関係がありますが、その後はもう僕と何も関係がないですよ。）

本研究では、「回答式」、「双方式」、「自発式」の 9 通りの組み合わせが、会話においてどのように出現するかを観察した。例えば、冒頭の(1)の会話は、「回答式→自発式→自発式→回答式→自発式→自発式」という形で会話が展開しており、「回答式→自発式」の連鎖は 2 回、「自発式→自発式」の連鎖は 2 回、「自発式→回答式」の連鎖は 1 回、出現している。

(28)（=(1)）

220 JM0102　何人ぐらい受けたの？　（情報要求）

221 JM0101　ええと、日本人は多分政策管理とマックのほう、合わせてたぶん 5 人ぐらいなんですけど。　［**回答式**］

222 JM0102　政策管理。　（相づち）

223 JM0101　はい。で、その会計の方はもう、政策管理で一人、ぼくだけ日本人の学生は。　［**自発式**］

224 JM0102　うん。　（相づち）

225 JM0101　あと、あの会計という分野なんですけど、それで。　［**自発式**］

226 JM0102　それは全部だよね？

227 JM0101　いや、違う。　［**回答式**］

228 JM0102　違うんだ。　（相づち）

229 JM0101　はい。全員落ちたみたいで、　［**自発式**］

230 JM0102　へー。

231 JM0101　留学生と社会人学生しか受からなかったかな。　［**自発式**］

次の会話例では、「回答式→双方式→自発式→自発式」という形で会話が展開しており、「回答式→双方式」の連鎖は 1 回、「双方式→自発式」の連鎖は 1 回、「自発式→自発式」の連鎖は 1 回、出現している。

(29)

55　CF0201　是哪个学校？　（情報要求）

（どの学校ですか？）

56　CF0202　就是○○○中学。　［回答式］

（○○○中学校です。）

57　CF0201　○○○中学，我认识一个学长，他也是○○○中学的。　［双方式］

（○○○中学校か。一人の先輩を知っていますよ。彼も○○○中学校の卒業生です。）

58　CF0202　啊。　（相づち）

（へー。）

59　CF0201　就在这个学校。　［自発式］

（（彼も）この大学にいます。）

60　CF0202　哦。　（相づち）

（えっ。）

61　CF0201　他也是你们南通的呀。那个说不定你还能认识呢。　［自発式］

（彼も南通の出身です。もしかしたら、彼のことを知っているかもしれないですよ。）

5.3.2　分析結果

前節で示した数え方によりデータを分析した結果を以下に示す。表の数字は、「回答式」、「双方式」、「自発式」の連鎖の各パターンの出現頻度を表す。

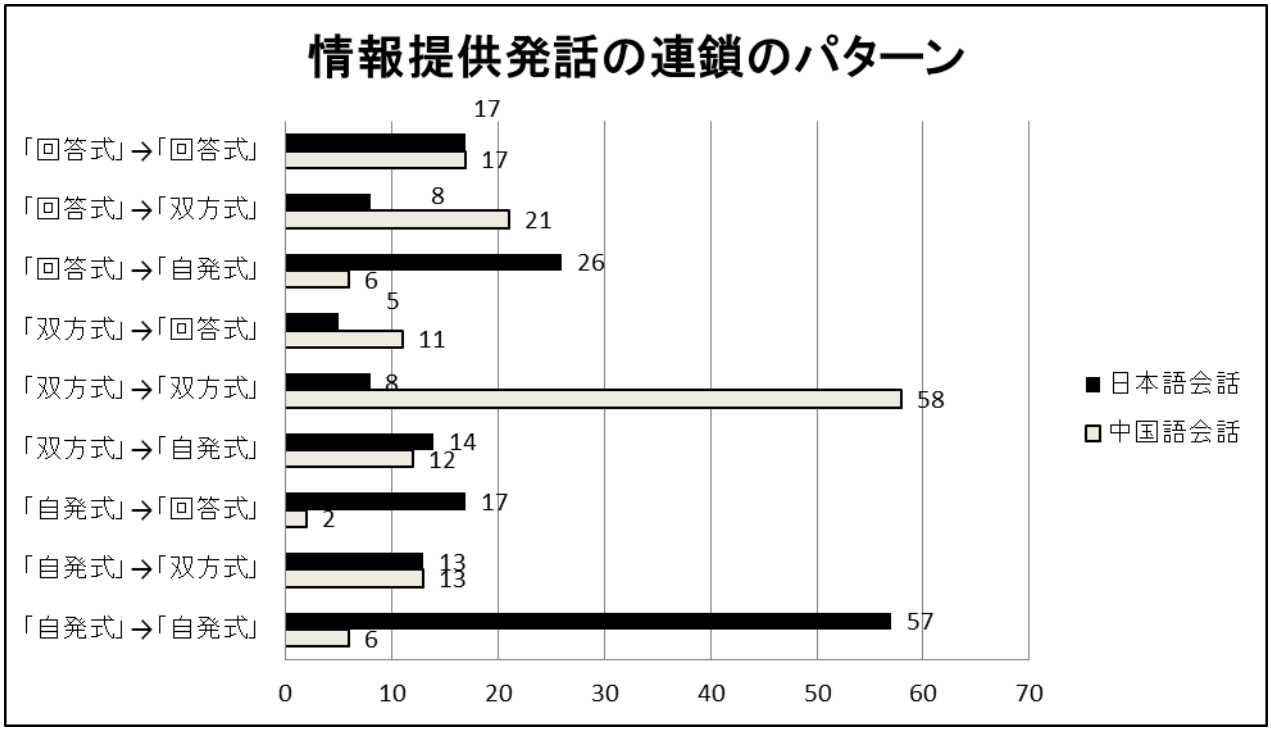

図 5－2　情報提供発話の連鎖のパターン

図 5－2 の結果を、日本語会話と中国語会話のどちらにより多く出現するかという観点から整理すると、次の表 1 のようになる。

表 5－1　情報提供発話の連鎖のパターンの比較

		日本語会話	中国語会話
Ⅰ 日本語＞中国語	自発式→自発式	57	6
	自発式→回答式	17	2
	回答式→自発式	26	6
Ⅱ 日本語＜中国語	双方式→双方式	8	58
	回答式→双方式	8	21
	双方式→回答式	5	11
Ⅲ 日本語≒中国語	自発式→双方式	13	13
	双方式→自発式	14	12
	回答式→回答式	17	17

表 5－1 からわかるように、日本語会話では「自発式」を含み「双方式」を含まない連鎖が多く出現し、中国語会話では「双方式」を含み「自発式」を含まない連鎖が多く出現している。

日本語会話で「自発式」を含み「双方式」を含まない連鎖が多く出現するのは、情報提供者が情報を提供している間に情報受信者が相づち的な発話をおこない、情報提供者の情報提供を促進するというパターンが多いためである。堀口（2005）は、日本語会話は一人が話し続け、もう一人が相づちを打つということが多いことを指摘しているが、本研究の分析でもそのことが確認されたと言える。

一方、中国語会話で「双方式」を含み「自発式」を含まない連鎖が多く出現するのは、会話参加者が互いに情報を提供し合うという連鎖が多いためである。中国語会話では、相手の発話内容に基づいて自分が発話するという形で、情報提供者と情報受信者の役割が頻繁に交替するということである。

また、「回答式→自発式」は中国語会話より日本語会話のほうが多く、「回答式→双方式」は日本語会話より中国語会話のほうが多いが、これも、日本語会話では質問者が相手の回答の後に相づちを打つことが多いのに対し、中国語会話では質問者が相手の回答に対して関連する別の情報を提供するというパターンが多いことによる。ここにも、日本語会話では一人の話者が情報提供者の役割、もう一方の話者が情報受信者の役割をを維持するのに対し、中国語会話では情報提供者と情報受信者の役割が頻繁に交替するということが反映されている。

さらに、同じ「回答式→回答式」であっても、日本語会話では次の(30)のように、相手の提供した情報をより明確にするために確認や推測の質問を使う、すなわち会話参加者の共通認識構築のプロセスを「回答→回答内容の確認→回答（情報の確定）」という形で言語化することがよく見られるのに対し（この場合、相づちとの区別が微妙なことがあるが、前述のように、本研究では話しぶりなどから能動的に確認しているという印象を受けるものは確認と数えた）、中国語会話では(31)のように「回答→関連する次の質問→回答（別の情報の追加）」と話題を展開させるパターンが多い。

(30)

18 JM0102　学部は？　（情報要求）

19 JM0101　経済です。　**［回答式］**

20 JM0102　あ、経済。　（情報要求：確認）

21 JM0101　はい。　［回答式］

22 JM0102　ゼミは誰先生？

23 JM0101　ゼミは○○先生という教職系の。［回答式］

(31)

1　CF0302　你叫什么名字？　（情報要求）

（お名前は何ですか？）

2　CF0301　我叫○○○。　［回答式］

（○○○です。）

3　CF0302　怎么写的？　（情報要求）

（どう書きますか？）

4　CF0301　就是一般的姓○的○嘛，○○的○，○就是○字头的○。　［回答式］

（○は普通の苗字の○で、○○の○で、○は○かんむりの○です。）

このように、日本語会話は情報提供者と情報受信者の役割分担が明確であり、情報提供者が情報の提供を継続的に行い、その間情報受信者が相づちを打って、情報提供者に情報提供を継続させようとする。楊虹（2015）は「日本語母語場面では、話題上の話し手と聞き手が比較的固定的である」と述べているが、本研究のデータからもそのことが確認されたことになる。

一方、中国語会話では、話題が確定されたら、会話参加者はこの話題を巡って、各自の持っている知識や経験や考えなどを話して、会話を展開させる。情報提供者と情報受信者の役割が頻繁に交替し、相手の情報を補足したり、相手の提供した情報に合わせて自分側の情報を提供したりして、互いに相手の発話に関連する情報を提供し合う形で会話を展開させる。日本語会話では「情報を提供されたら反応する」ことが重視されているのに対し、中国語会話では「情報を提供されたら別の情報を返す」ことが重視されていると言ってもよい。

情報の提供のあり方に見られるこのような違いが、日本語と中国語会話スタイルの差を作り出す重要な要因の一つになっている。「情報を提供されたら別の情報を返す」ことを重視する中国語会話は、日本語母語話者から見れば「人の話を最後まで聞かずにあ

れこれ言ってくる」ように見えるだろう。また、「情報を提供されたら反応する」ことを重視する日本語会話は、中国語母語話者にとっては「話を聞くだけで情報を提供してこないので、次にどう話を続ければよいかわからない」と感じるだろう。これが日本語母語話者と中国語母語話者が会話をおこなう際に互いに感じる違和感の具体的な内容だと考えられる。

5.4　会話における質問の機能

質問に答える形で情報を提供する「回答式」の情報提供発話は、日本語にも中国語にも見られる。先の図 1 で見たように、今回のデータでは、「回答式」は日本語会話では 1 組平均 59 回、中国語会話では 1 組平均 48 回であり、比較的近い数値になっている。しかし、「回答式」の情報提供発話の内容は日本語と中国語で異なる。楊虹（2011a）は、中・日母語話者同士の初対面会話における質問表現について分析をおこない、日本語母語話者の質問発話には同意や共感を求める表現が多いのに対し、中国母語話者の質問発話は相手から積極的に情報を引き出す表現が多いことを報告している。本節では、この指摘をふまえて、本研究の会話データをもとに、日本語と中国語における「質問」の役割について考察する。

分析に際しては、本研究で用いた会話開始から 20 分の内容を文字化したデータから、日本語会話・中国語会話における質問発話（形態またはイントネーションが明らかに相手の話者に確認、判定、選択、説明を要求する発話）を抜き出して分析をおこなった。独話的な「かな」「かしら」などは分析対象としない。

5.4.1　質問の分類と調査結果

国立国語研究所（1960，1963）は「質問」を会話の相手に対する「要求表現」の一つとして位置づけ、「確認要求」、「判定要求」、「選択要求」、「説明要求」という四つの表現に分類した。国立国語研究所（1963）では、次のように説明している。

「確認要求」―文末に上昇調を伴う。質問者が自分の判断を相手に確認してもらおう、同意してもらおうとする表現である。形式として、「～だろう↑」「～でしょう↑」の類と「～ですね↑」「～でしょうね↑」の類である。
例えば、ちゃんとお金魚が入ってますね↑　（p.53）

「判定要求」―質問者が相手に yes/no を求める表現である。形式として、「～ですか」「～でしょうか」「～ますか」「～のではないか」などである。

例えば、おかわりになりますか。　（p.53）

「選択要求」―質問者が相手に A か B の中から一つを選択してもらう表現である。形式として「A か、A でないか」「A か、B か」「かどうか」の型である。

例えば、本当に信頼できる宰相の顔となるかどうか。（p.55）

「説明要求」―質問者は疑問詞を使い、相手に説明してもらう表現である。形式として、「ど」系統、「いかが」「いつ」「なん」「なぜ」などがある。

例えば、え、この順番はどれがいいですかな。　（p.56）

本研究のデータにおけるそれぞれのタイプの質問の 1 組あたりの平均使用頻度は、次の図 5－3 のとおりである。

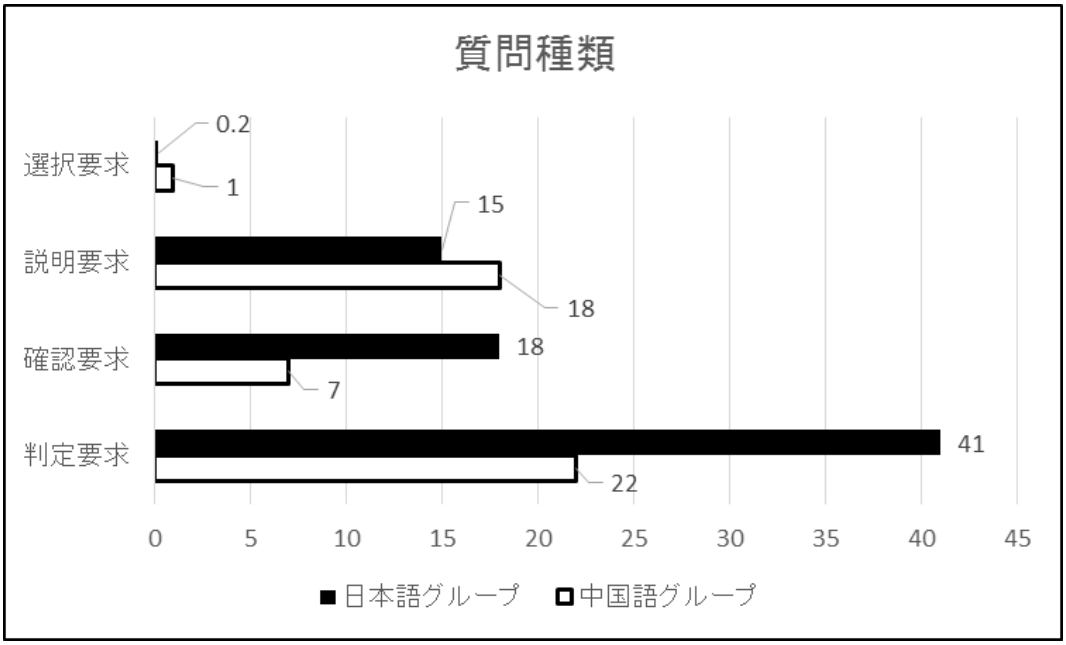

図 5－3　質問の種類と使用頻度

図 5－3 で注目されることは、①日本語会話において「判定要求」がきわめて高い頻度で用いられていること、そして、②「確認要求」は中国語会話より日本語会話のほうが多く用いられていることである。中国語会話では「確認要求」が比較的少なく、「判定要求」と「説明要求」が同程度出現している。「判定要求」と「確認要求」はともに相手に肯否の選択をさせて、情報の真偽を確定させる発話である。質問に対する回答として情報を提供する「回答式」の中でも、日本語は「回答→回答内容の真偽確認→回答（情報の確定）」という形で用いられる「回答式」が多いということである。

5.4.2.　本研究のデータにおける質問発話の機能

本研究のデータで使用された質問発話の機能についてもう少し詳しく分析する。ここでは、質問発話の機能は次の三つに分類する。

A　情報を引き出す質問
B　確定を深める質問
C　その他

「A　情報を引き出す質問」は、先行文脈にない情報の提供を相手に求める質問である。本研究のデータでは、①「直接の情報要求」、②「推論の情報要求」、③「不足の情報要求」の三つが観察された。

①「直接の情報要求」は、会話の中で、先行文脈や聞き手の直前の発話からまだ開示されていない新しい情報を聞き手から引き出す質問発話である。

(32)
4　JF0402　　私の名前は○○です。
5　JF0401　　HHH あーはい。
6　JF0402　　<u>お名前は？</u>
7　JF0401　　あ、●●です。

②「推論の情報要求」は、話し手が先行文脈、あるいは聞き手の直前の発話から推測して聞き手に確認する質問発話である。

(33)

5 JF1102　ええと、国際交流専攻 3 年の〇〇です。よろしくお願いします。

6 JF1101　よろしくお願いします。私は経済学部 3 年の〇〇と申します。

7 JF1102　あ、じゃ同じ 3 年生。

8 JF1101　そうですね。

9 JF1102　ってことは今 20？

10 JF1101　今は 21 です。

11 JF1102　あ、21。

③「不足の情報要求」は、相手の発話を聞き、理解できないところや聞き取れない部分を相手にさらに説明してもらう場合の質問発話である。

(34)

17 CF0202　财管。财务管理。你呢？

（財管。財務管理。あなたは？）

18 CF0201　人文学院的。我应该不算人文学院的，算管理学院的。就是学那个政治。

（人文学院です。実際は人文学院じゃなくて管理学院に属しているはずです。政治学の勉強です。）

19 CF0202　哦，政治。叫什么啊？

（あ、政治学。何という名前？）

20 CF0201　思想政治教育。师范类的，就是做老师的那种。

（思想政治教育です。師範の部門で、先生になるという学科です。）

「B　確定を深める質問」は、すでに出現している情報について、再度相手に問いかけることにより、確定を深める機能である。この種の質問発話には、「確認要求」の質問形式のほか、「判定要求」の形式を使い、相手のすでに話した内容を聞き返し、確認する場合も含める。具体的には、①「同意・同調を求める」と②「情報確認」の二つがある。

①「同意・同調を求める」は、聞き手に問いかけ、話し手の判断や意見、評価などの

発話に同意、同調を求める質問発話である。ほとんどの場合、確認要求の質問表現が使われている。

(35)

340 JF1101　時間がゆっくり流れている感じで。

341 JF1102　へー。

342 JF1102　時差はあまりないですよね。

343 JF1101　時差は一時間早いですねあっちが。

②「情報確認」は、話し手が相手からすでに開示されている情報、あるいは相手の直前の応答や発話をもう一度聞き返す質問発話である。

(36)

181 JM2002　そうすね。ま、小中は地元で、

182 JM2001　はい。

183 JM2002　高校は市川で。

184 JM2001　あ、市川まで行っているんですか？

185 JM2002　はい。で、大学柏で行っている。

「C　その他」は、「A　情報を引き出す質問」と「B　確定を深める質問」以外の質問発話である。①「理解の確認要求」、②「質問の再提示」、③「情報開示の予測」の三つが観察された。

①「理解の確認要求」は、聞き手に話し手の発話が理解できたかどうかを確認する時の質問発話である。

(37)

94 JM2001　どこで教えているんですか？

95 JM2002　松戸じゃなくて、新京成線わかりますか？

96 JM2001　わかります。

97 JM2002　新京成線の上本郷分かりますか？

98 JM2001　上本郷はええと、一回柏のほうへ行くんです。そこから乗り換えです。
新京成で、あれ、じゃ、松戸。

②「質問の再提示」は、相手の質問を聞き取れない、あるいは理解できない場合、相手に質問を繰り返し、再提示してもらう場合の質問発話である。

(38)

157 CM0402　我老是把那个，淮阴淮安是不是同一个地方？
（僕はいつもあの…淮陰と淮安は同じところですか？）

158 CM0401　<u>你是说现在淮阴和淮安是同一个地方？</u>
（今現在淮陰と淮安は同じところということですか？）

159 CM0402　嗯。
（はい。）

③「情報開示の予測」は、相手が開示しようとする情報を予測して質問する発話である。

(39)

183 JM0801　どこで買ったの？

184 JM0802　これはどこで買ったかよく覚えていないんですけど、あ、どっちかというと、たぶん古着屋で買ったんですけど。

185 JM0801　古着屋で買うの？古着屋ってどこの古着屋？

186 JM0802　ええと…。

187 JM0801　<u>渋谷？柏？</u>

188 JM0802　柏の近くに。

本研究のデータとした日本語会話、中国語会話では、「A　情報を引き出す質問」、「B　確定を深める質問」、「C　その他」が、1 組平均でそれぞれ図 5－4 のような使用率で用いられていた。

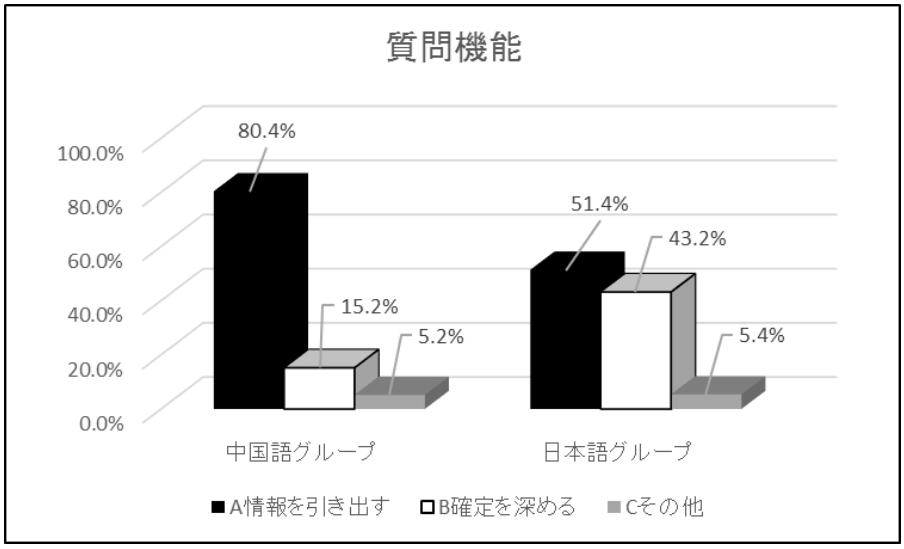

図 5－4　各タイプの質問発話の使用率

図 5－4 からわかることは、中国語会話においては「A　情報を引き出す」タイプの質問（80.4%）が非常に多く用いられるのに対し、日本語会話においては「A　情報を引き出す」（51.4%）と「B　確定を深める」（43.2%）が同程度に用いられるということである。中国語会話に比べて日本語会話では、すでに出現している情報を相手に再確認したり、あるいは話し手の中で形成している判断の確定を深めたりするために用いられることが多いことがここでも確認できる。

図 5－5、図 5－6 は、中国語会話と日本語会話における質問発話の機能をより細かく分類して集計したものである。

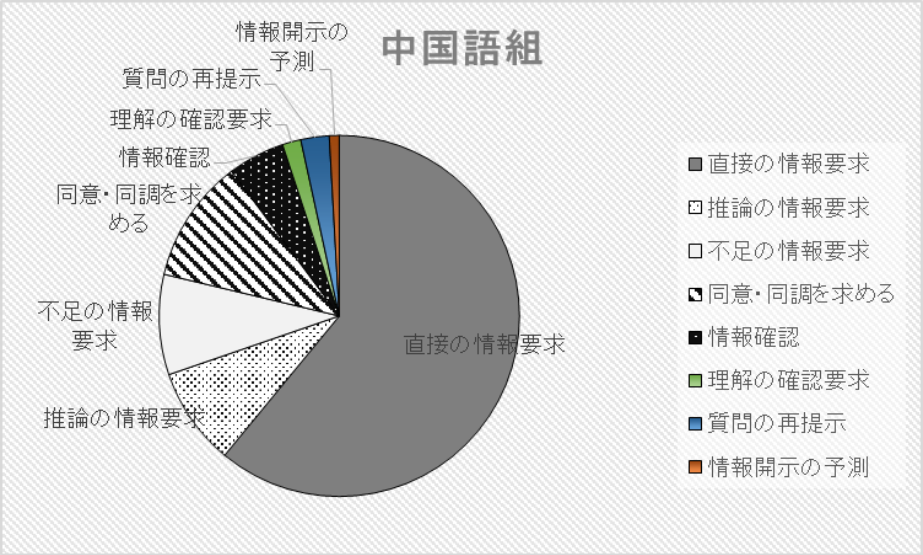

図 5－5　中国語会話における質問発話の機能

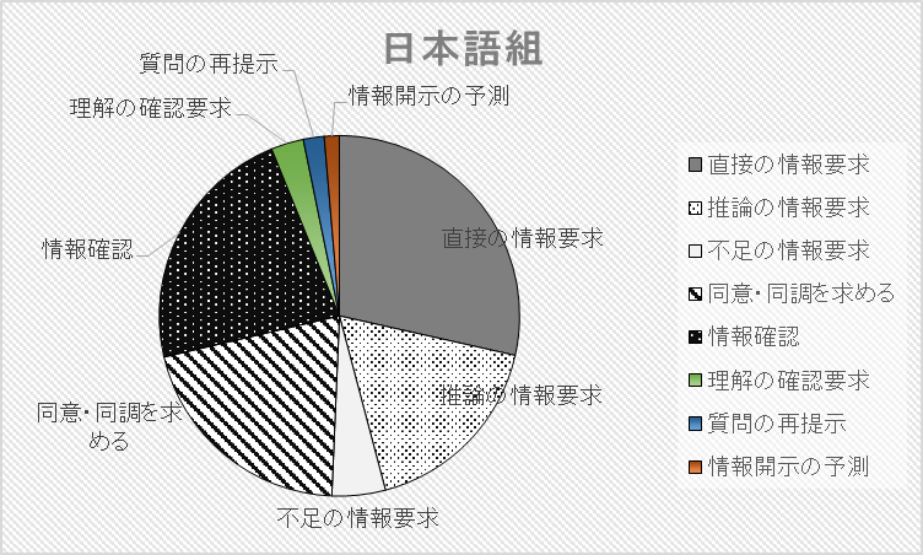

図 5－6　日本語会話における質問発話の機能

図 5－5 からわかるように、中国語会話では、「直接の情報要求」がストラテジー全体の中で 50%以上の割合で使われており、他のストラテジーより顕著に多い。「直接の情報要求」の中でも、疑問詞を用いる「説明要求」の質問表現が 60%程度を占める。一方、日本語会話における質問（図 5－6）では、「同意・同調を求める」と「情報確認」のス

トラテジーが中国語会話に比べて多い。また、日本語母語話者の「判定要求」の形式の42%が「情報確認」、すなわち相手の応答や直前の発話を聞き返し、再度確認することに使われている。また、日本語会話では、先行発話から推論された内容を相手に確認するということも多い。中国語会話では、質問者が情報を提示せずに質問をおこない、知りたい情報を直接引き出すことが多いのに対し、日本語会話では、質問者が情報を提示して質問をおこなう傾向があるとも言える。

5.5　一つの話題の中での会話参加者の役割交替

5.5.1　会話参加者の役割交替のパターン

5.3.2 では、日本語会話では一人の話者が情報提供者の役割、もう一方の話者が情報受信者の役割を維持するのに対し、中国語会話では情報提供者と情報受信者の役割が頻繁に交替するということを述べた。本節では、一つの話題が展開する中で、中国語母語話者と日本語母語話者がどのように情報受信者と情報提供者の役割を分担するのかについて少し詳しく見ていく。

前述のように、楊虹(2015)は、話題上の話し手・聞き手（本研究の「情報提供者」「情報受信者」にほぼ相当）の役割交替について分析をおこない、「日本語母語話者に比べ、中国語母語場面では、話し手と聞き手の役割交替が頻繁にみられ、聞き手側だった参加者が話し手役割の発話をする場合が多く見られる」、「日本語母語場面では、話題上の話し手と聞き手が比較的固定的である」といったことを指摘している。

本研究のデータを観察した結果、一話題内での情報提供者・情報受信者の役割交替には、「Ⅰ　保持型」、「Ⅱ　回帰型」、「Ⅲ　放棄型」という三つのパターンが見られた（楊虹（2015）では「役割固定型」、「協調的役割交替型」、「役割回帰型」、「話し手役割競合型」の四つに分類されているが、ここではより単純な分類とした）。

「Ⅰ　保持型」は、一つの話題の中で情報提供者あるいは情報受信者としての役割が一貫して保持されるパターンである。

(40)

71　JF1201　私もたまに言われるけど。　［情報提供者］

72　JF1202　でも水戸のほうは訛ってますよね？　［情報受信者］

73　JF1201　訛ってると思う。でも、今一緒に、今、二個下だから、２年ダブってて、

二個下の後輩４年生の子と一緒に住んでるんだけど。 ［情報提供者］

74 JF1202 へー。 ［情報受信者］

75 JF1201 その子も茨城、水戸の子。 ［情報提供者］

76 JF1202 へー。 ［情報受信者］

77 JF1201 水戸の子で、やっぱちょっと訛ってると思う。 ［情報提供者］

78 JF1202 いや、でもほんとうですね。 ［情報受信者］

79 JF1201 うん。へー土浦か。

80 JF1202 へーどうだったんですかね。

81 JF1201 ねー。

(41)

42 JF1102 でも、人がいて、でも逆にやっぱ友達とかできにくいですか？ ［情報受信者］

43 JF1101 なんか、うん、人による感じね。 ［情報提供者］

44 JF1102 へー。 ［情報受信者］

45 JF1101 でもやっぱグループがけっこうあって、高校上がりの人とか。 ［情報提供者］

46 JF1102 あー。 ［情報受信者］

47 JF1101 もいたりするね。 ［情報提供者］

48 JF1102 けっこう、ってことは〇〇高校のことですか？ ［情報受信者］

49 JF1101 上がりの人はけっこう経済にはいるんで。 ［情報提供者］

50 JF1102 へー。 ［情報受信者］

51 JF1101 うん、そんな人たちはそんな人たちと集まって、大学からの人はって感じで。 ［情報提供者］

52 JF1102 へーそうなんですか。 ［情報受信者］

53 JF1101 すごい明るいですね、ま、悪く言えばちゃらいって感じですね。 ［情報提供者］

「Ⅱ　回帰型」は、話題最初の話者が情報提供者あるいは情報受信者として話題を開始し、話題展開の中でその話者の役割が一回以上交替するが、最終的には元の役割に回

帰するパターンである。(42)では、371 行目で JF1102 が情報受信者から情報提供者に交替し、375 行目で再び情報受信者に戻っている。(43)では、324 行目で JF1202 が情報提供者から情報受信者に交替し、326 行目で再び情報提供者に戻っている。

(42)

365 JF1102 へーえ、向こうでは寮とかですか？ [情報受信者]

366 JF1101 向こうではホームステイでしたね。 [情報提供者]

367 JF1102 へー、ホームステイってどんな感じですか？ [情報受信者]

368 JF1101 え、ほんとうに家に入るみたいな、一つの家にある家族と一になってるみたいな感じで、 [情報提供者]

369 JF1102 へー。 [情報受信者]

370 JF1101 すごいフレンドリーだし。 [情報提供者]

371 JF1102 あ、いいですね。ホームステイなんかちょっと憧れますやっぱりやったことないから。 [情報提供者]

372 JF1101 へー本当ですか。 [情報受信者]

373 JF1102 うん。 [情報提供者]

374 JF1101 でもすごくフレンドリーな家族であれば、楽しいですね。[情報提供者]

375 JF1102 はー。 [情報受信者]

376 JF1101 っていうような感じで。 [情報提供者]

377 JF1102 けっこうアットホームな感じで。 [情報受信者]

378 JF1101 うん。 [情報提供者]

379 JF1102 なんか子供とかいるような家族とかはあったんですか？ [情報受信者]

380 JF1101 私のところはもう成人していて。 [情報提供者]

381 JF1102 あーそうなんですか。 [情報受信者]

382 JF1101 子供とかなかったんですけど、友達の家とかは３歳とか５歳とかの子がいて、一緒に遊んだりていうのはしたんですけど。 [情報提供者]

383 JF1102 なかなかいいですよね。かわいいんですよね。 [情報受信者]

384 JF1101 うん。

(43)

320　JF1202　私第一言語英語なんですけど、あまり英語の授業ないんで、なんかがっつりとした感じうらやましいなんか。　［情報提供者］

321　JF1201　へーほんとうですか?　［情報受信者］

322　JF1202　はい。　［情報提供者］

323　JF1201　へーなんかイメージ的には外語ってなんかすごい。　［情報提供者］

324　JF1202　そう。　［情報受信者］

325　JF1201　本当に英語ばっかりとか言語ばっかりとかのイメージがあったんですけど。　［情報提供者］

326　JF1202　そうですよね。私もけっこうそういうイメージで入ったんですけど、実際あんま英語なくて。　［情報提供者］

327　JF1201　へー。

「Ⅲ　放棄型」は、一つの話題の中で情報提供者と情報受信者の役割が交替して、そのまま元の役割に回帰しないパターンである。(44)では、46 行目で CM0702 が情報受信者から情報提供者に交替し、そのまま最後まで情報提供者となっている。

(44)

44　CM0702　那你现在有打算了？　［情報受信者］
（じゃ、今は将来の計画もうできていますか？）

45　CM0701　我是一门心思想考苏州大学。　［情報提供者］
（私はとにかく蘇州大学を受けたいんです。）

46　CM0702　对，在南京很好的。　［情報提供者］
（そう、蘇州大学は南京でとても評判がいいです。）

47　CM0701　南京好多大学的。　［情報提供者］
（南京にもたくさんの大学があります。）

48　CM0702　也要看有没有导师。　［情報提供者］
（それに指導教官がいるかどうかも考えなければならない。）

5.5.2　分析結果と考察

本研究のデータでは、中国語会話と日本語会話の役割交替は次の図 5－7 のように示される。

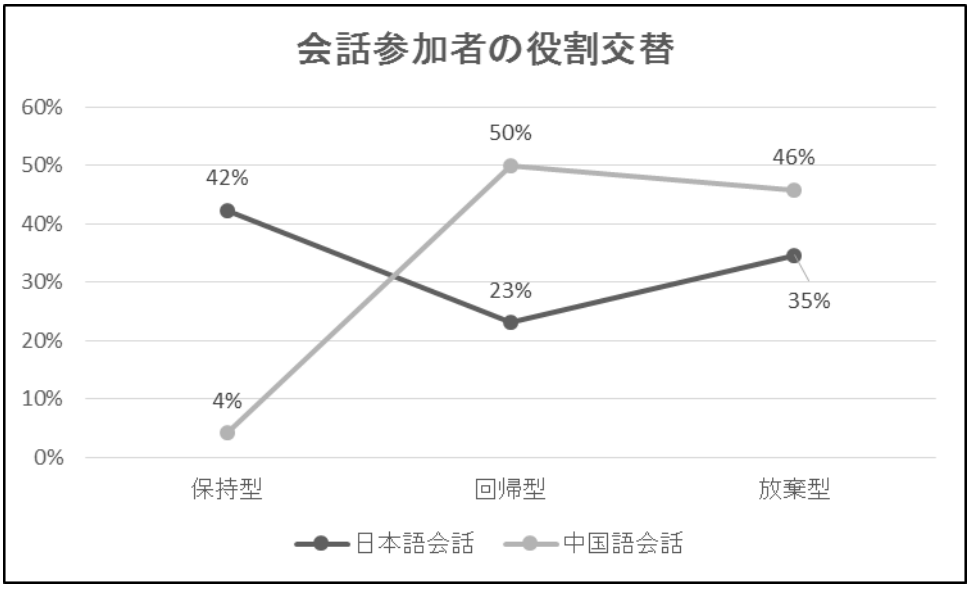

図 5－7　話者の役割交替のパターン（各パターンの比率）

図 5－7 からわかるように、日本語会話では一つの話題が展開する中で話者の役割が固定している「保持型」が多いのに対し、中国語会話では「保持型」がきわめて少なく、一つの話題が展開する中でほとんどの場合役割交替が起こる。前述のように、楊虹（2015）は、「日本語母語話者に比べ、中国語母語場面では、話し手と聞き手の役割交替が頻繁にみられ、聞き手側だった参加者が話し手役割の発話をする場合が多く見られる」、「日本語母語場面では、話題上の話し手と聞き手が比較的固定的である」と述べているが、本研究のデータでもそのことが確認されたことになる。中国語会話では、相手が情報提供を行ったら自分も情報提供を行うというように、会話参加者の間で情報提供のバランスをとることを日本語会話よりも強く意識されると言ってもよい。

そのことは、図 5－8 で示した日本語会話と中国語会話における情報提供数と情報提供者・情報受信者の役割交替の頻度（いずれも 1 組あたりの平均）を見ても明らかである。

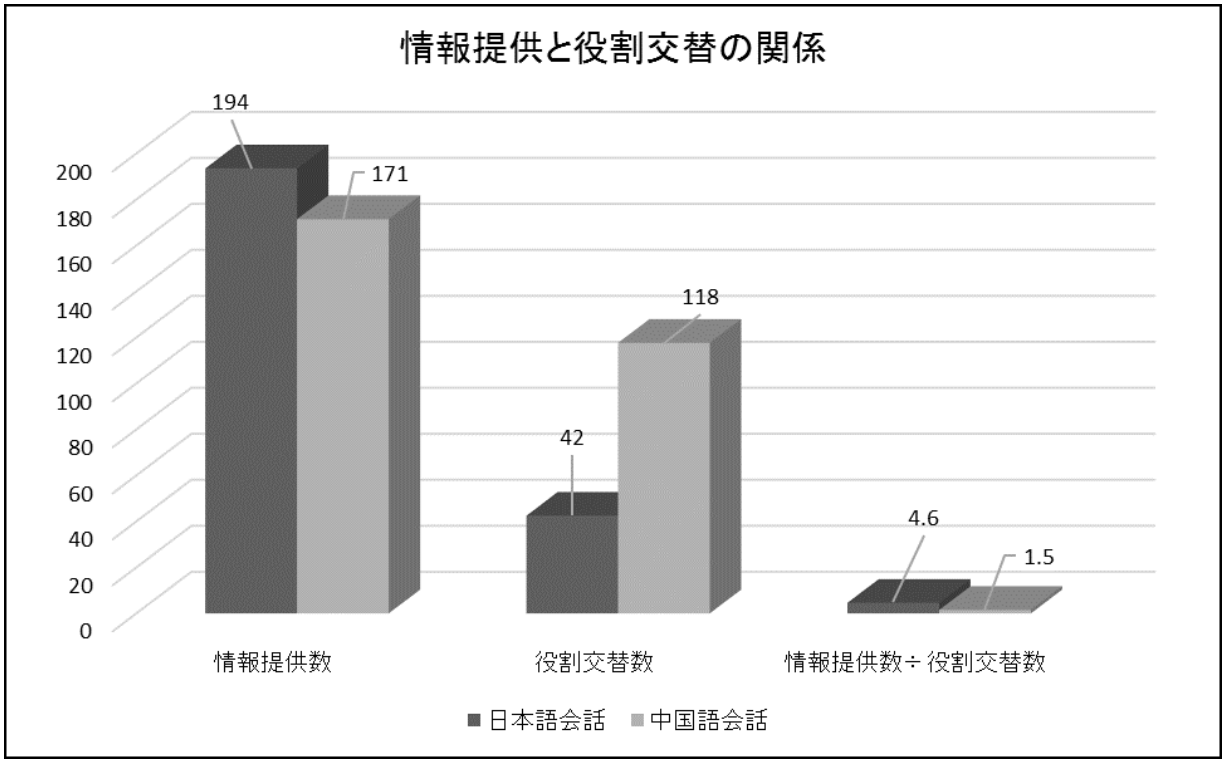

図 5－8　情報提供数と役割交替の頻度

日本語会話と中国語会話を比べると、日本語会話は中国語会話より情報提供数（日本語会話では 1 組平均 194 回、中国語会話では 1 組平均 171 回）が多いが、役割交替数が少ない（日本語会話では 1 組平均 42 回、中国語会話では 1 組平均 118 回）という結果になっている。「情報提供数÷役割交替数」、すなわちどの程度の頻度で役割交替が起こるかも、日本語会話では 4.6 なのに対し、中国語会話では 1.5 である。

日本語会話と中国語会話における会話参加者の役割交替の違いは、情報受信者の言語行動にも現れる。情報受信者の言語行動には「質問」、「相づち」、「役割交替」の三つがあるが、日本語会話と中国語会話ではその割合が明らかに異なる。

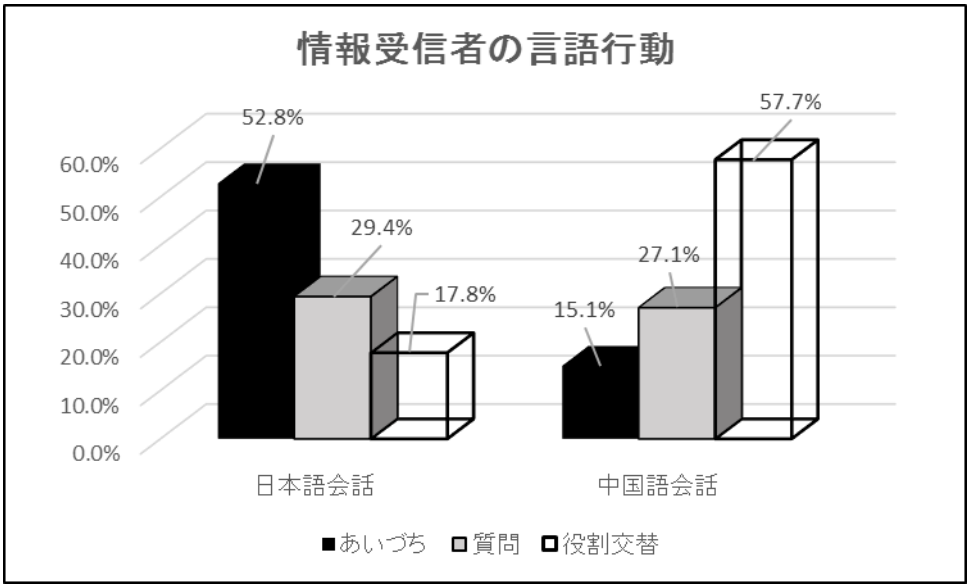

図 5－9　中国語会話と日本語会話の情報受信者の言語行動

図 5－9 からわかるように、日本語会話では「相づち」が最も多く、「役割交替」が最も少ないが、中国語会話では逆に「役割交替」が最も多く、「相づち」が最も少ない。ここからも、日本語会話では一人の話者が情報提供者の役割、もう一方の話者が情報受信者の役割を維持するのに対し、中国語会話では情報提供者と情報受信者の役割が頻繁に交替することがわかる。

5.6　まとめ

本章では、情報提供発話の出現パターンを「自発式」、「双方式」、「回答式」の三つに分類して、日本語会話、中国語会話においてどのようなパターンがどのような連鎖で出現するかについて分析をおこなった。また、「回答式」に関連して、日本語会話、中国語会話においてどのような質問発話が多く用いられるかについても分析をおこなった。いずれの分析においても、日本語会話では一人の話者が情報提供者の役割、もう一方の話者が情報受信者の役割を維持するのに対し、中国語会話では情報提供者と情報受信者の役割が頻繁に交替することが見られたが、そのことは、一つの話題が展開する中での会話参加者の役割交替の観察からも確認された。日本語の会話は、会話参加者のいずれか一方が情報を提供者として話題を展開させ、もう一方が相づちなどでそれを支えるのが基本であるのに対し、中国語の会話は、会話参加者がともに情報提供者として話題を展開させるのが基本であると言える。

第 6 章　まとめ

6.1　本研究の結果の概観

6.1.1　「①交換される情報の内容」について

6.1.2　「②情報交換の様式」について

6.2　本研究で得られた知見

6.3　日本語教育への示唆

第６章　まとめ

6.1　本研究の結果の概観

本研究では、「会話参加者間の情報交換のあり方」に焦点を当てて、初対面の日本語母語話者同士と中国語母語話者同士がそれぞれどのように情報交換をしながら会話を発展するのかについて分析をおこなった。具体的には、次の二つの観点から考察をおこなった。

①交換される情報の内容（どのような情報が交換されるか）

②情報交換の様式（情報がどのように交換されるか）

6.1.1　「①交換される情報の内容」について

「①交換される情報の内容」について、第 3 章では、三牧（1999）の「話題」の定義に従って、中国語会話と日本語会話の会話内容を区分し、蔡諒福（2011）を参考にして、一つの話題の中で複数の細かい話題が出現する場合、上位にある話題を「大話題」と呼び、大話題に含まれる下位の話題を「小話題」として分析をおこなった。

話題数については、会話に出現した大話題の数は、日本語グループは中国語グループより少ないが、一つの大話題に含まれる小話題の数は日本語グループのほうが多かった。日本語母語話者は一つの話題についていろいろな角度から話をしてから、次の話題に移行するが、中国語グループは一つの話題を続けずにすぐに次の話題に移行するということが窺えた。

話題内容については、中国語グループ、日本語グループともに出現率が高い大話題は、【個人情報】における「名前」「学年」「専攻」のような所属に関する大話題と、「出身地」「実家」のような地縁に関係する大話題に集中していた。プライベートな領域に踏み込んだもの、将来に関するものは中国人学生のほうが出現率が高かった。それ以外にも、日本人学生と中国人学生とで出現率が異なる大話題には、中日両国の大学生の生活や文化背景の相違によるものが多い。

両グループの開示方式を比べてみると、日本語グループは、会話の最初から自己紹介の形式で自分の所属や名前を開示したが、中国語グループは、質問に答える形で個人情報を次々と開示しており、自分から自己紹介の形式で個人情報を開示するケースは少なかった。

話題内容の変化については、20 分間の会話に出現する大話題を「会話開始から 5 分間」と「5 分以降」を比較した結果、次のようなことが見られた。

・「会話開始から 5 分間」の話題は、中国語会話のほうが日本語会話より大話題の種類が多岐に渡っていた。【個人情報】、【学校生活】に関する話題は、日本語会話、中国語会話に共通してまとまった形で出現したが、「年齢」「生年月日」「学歴」は日本語会話のみ出現した。学業以外のサークル、アルバイトに関する話題も、日本語会話のほうが多く出現した。

・「会話開始から 5 分間」より、「5 分以降」のほうが、中国語会話と日本語会話で共通に出現する大話題が少なかった。中国語会話では、会話開始から 5 分間に出現しなかった「年齢」「生年月日」「学歴」が出現し、「自我」「給料」「職位」というよりプライベートな領域に踏み込んだ大話題が出現した。日本語母語話者は、会話の最初で詳しい【個人情報】を開示して自己紹介を行ってから【好き嫌い】の話題を取り上げるのに対し、中国語母語話者は、会話が進行して相手とある程度親密になった後に詳しい【個人情報】を開示し、【社会】のような個人のレベルを超えた大話題にまで話題の範囲を広げていると言える。

会話の開始方法については、日本語グループは、「こんにちは」「はじめまして」などの定型的言葉で会話を切り出すのが一般的だが、中国語グループは、一人の話者がもう一人の話者の個人情報を聞くという直接質問の形で会話を切り出すことが多い。また、話題の開始方法について、日本語グループは、質問で始まる場合と陳述で始まる場合とでほとんど差がないが、中国語グループは質問で始まる場合のほうが多い。

「①交換される情報の内容」については、第 4 章で「自己開示」に焦点を当てた分析もおこない、「客観的自己開示」と「主観的自己開示」の二つの観点から、中国人学生、日本人学生が初対面場面で自分のことに関して、どのような情報をどのように開示するのかを探ることを試みた。

初対面の相手に対して、今回の調査では、中国人学生、日本人学生の自己開示の回数はほぼ同じであったが、どちらかと言えば、中国人学生は「主観的自己開示」の回数がやや多く、日本人学生は「客観的自己開示」の回数が多かった。

会話開始から 5 分間と 5 分以降を比較すると、中国語グループは、会話開始から 5 分間で主観的自己開示と客観的自己開示とで頻度に大きな差はないが、5 分以降は主観的自己開示が大きく増加していた。また、日本語グループは、会話開始から 5 分間では、

主観的自己開示の頻度が相対的に低いが、5 分以降は主観的自己開示の方が多くなっていた。

中国人学生、日本人学生ともに、会話の最初に両母語話者ともに基本的な所属情報を開示し、相手についての不安・緊張等の不確実性を減少させるようにするが、プライベートな領域に踏み込む開示は避けられる傾向がある。その一方で、中国人学生は「大学院入試」、「就職」といった将来志望の内容を、日本人学生は「サークル」、「ゼミ」、「卒論」といった現在のキャンパスライフに密接な関係がある内容を開示することが多く見られた。また、同じく出身地関係の情報を開示するとしても、中国人学生は「老家」（一族の出身地）を、日本人学生は「自宅」を選択した。自己開示の内容は個人差もあるが、やはり日本語と中国語とでは自己開示スキーマ（三牧・難波，2010）に相違があると考えられる。

感情や見解などの主観的な内容に関しても、中国語母語話者は、多くの表現を用いて感情を客観的に描写するが、相手の感情に共感を示すことは少ない。また、一つのテーマについて、まとまった話で積極的にお互いの意見を交換し、ほかの話題に移行することが多い。一方、日本母語話者が心情を開示する梅は、過去の心情をそのまま引用したり、「うれしい」「辛い」など形容詞だけで発話時に生じた感情をそのまま表出したりすることが多い。また、相手の感情に共感を示し、自分の意見をや見解を述べる場合も、一言で簡潔に述べることが多い。

6.1.2 「②情報交換の様式」について

「②情報交換の様式」については、先行研究で言う「話題上の話し手」、「話題上の聞き手」を「情報提供者」、「情報受信者」と呼び、情報提供者による情報提供発話の出現パターンという観点から次のことを述べた。

会話における情報提供発話の出現パターンを、①「回答式」（情報要求に回答する形で情報を提供する）、②「双方式」（相手が先行発話で提供した情報に関連する別の情報を提供する形で情報を提供する）、③「自発式」（相手が相づち発話をおこなったのに続ける形で自発的に情報を提供する）に分けると、中国語母語話者は「双方式」、すなわち相手の情報提供に合わせて別の情報提供を行うことが多く、日本語母語話者は「自発式」、すなわち相づちに続けて情報提供を続けることが多い。

また、「回答式」に先行する質問発話に注目すると、中国語会話では「確認要求」が

比較的少なく、「判定要求」と「説明要求」が同程度出現したのに対し、日本語会話において「判定要求」がきわめて高い頻度で用いられており、「確認要求」も中国語会話より日本語会話のほうが多く用いられていた。これは、日本語会話において「回答→回答内容の真偽確認→回答（情報の確定）」という形で用いられる「回答式」が多いためである。

「回答式」、「双方式」、「自発式」の連鎖のし方について見ると、中国語会話で「双方式→双方式」の連鎖が多く、日本語会話では「自発式→自発式」の連鎖が多いことがわかった。情報提供者と情報受信者の役割交替も日本語会話より中国語会話のほうが頻繁に起こる。一つの話題の中での情報提供者あるいは情報受信者の役割交替のパターンを、①「保持型」（一つの話題の中で情報提供者あるいは情報受信者としての役割が一貫して保持されるパターン）、②「回帰型」（話題最初の話者が情報提供者あるいは情報受信者として話題を開始し、話題展開の中でその話者の役割が一回以上交替するが、最終的には元の役割に回帰するパターン）、③「放棄型」（一つの話題の中で情報提供者と情報受信者の役割が交替して、そのまま元の役割に回帰しないパターン）の三つに分類してデータを観察した場合でも、中国語母語話者は「回帰型」と「放棄型」を多用するのに対し、日本語母語話者は「保持型」を多用することが分かった。日本語の会話は、会話参加者のいずれか一方が情報を提供者として話題を展開させ、もう一方が相づちなどでそれを支えるのが基本であるのに対し、中国語の会話は、会話参加者がともに情報提供者として話題を展開させるのが基本であると言える。

6.2　本研究で得られた知見

本研究で明らかになったことは、先行研究で明らかにされたことと大筋で一致している。

賈琦（2008）は、日本語母語話者は話し手の発話の関連する短い発話を入れて（ターン挿入）、協力的な姿勢を示すが、中国語母語話者は簡単に発話権を譲らず、他人の話す権利より自分の権利を重んじると述べている。これは、「中国語母語話者は相手の情報提供に合わせて別の情報提供を行うことが多く、日本語母語話者は相づちに続けて情報提供を続けることが多い」ということを、「中国語会話では会話参加者が互いに談話展開の主導権をとろうとするが、日本語会話では会話参加者の一方がもう一方の発話権を尊重する」という形で述べたものと言える。

楊虹(2015)も、話題上の話し手・聞き手の役割交替について分析をおこない、「日本語母語場面では、話題上の話し手と聞き手が比較的固定的である」、「日本語母語話者に比べ、中国語母語場面では、話し手と聞き手の役割交替が頻繁にみられ、聞き手側だった参加者が話し手役割の発話をする場合が多く見られる」と指摘しているが、本研究においてもそのことが確認された。

また、張麗（2010）では小集団デスカッションの場面で、中国語グループの話者交替の回数が日本語グループより 4 倍になることを指摘しているが、第 5 章で述べたように、本研究のデータとした 20 分間の会話においても、日本語グループと中国語グループにおける話者の役割交替の 1 組当たりの平均頻度はそれぞれ 4.6、1.5 であり、張麗（2010）の調査結果とほぼ同じであると言える。

難波・三牧（2010）は、中国語会話では、ある話題に関して自分の意見を述べ合った後に新話題に移行するという「議論型」のパターンが多く見られるのに対し、日本語会話では、ある話題が選択されたら、「導入→展開→収束」という順に次の話題に移行する「整然移行型」のパターンが多く見られたとしている。また、楊虹（2005b）では、日本語母語話者は主に協力的なやり取りのプロセスを経て次の話題を導入する協同的転換パターンが多く見られること、中国語母語話者はそれ以外に、話題の終了ストラテジーがないまま話題導入をおこなう突発的転換、無表示転換も 5 割程度見られることを報告している。これらも、中国語母語話者は相手の情報提供に合わせてその場その場で情報提供を行うことが多い、日本語母語話者は一つの話題が収束するまで情報提供者と情報受信者の役割が固定された状態が続くということである。

会話の話題内容についても、台・日の女子大学生の母語場面の会話を研究対象とする張瑜珊（2006a）は、日本の初対面会話フレームは開始部では形式をより重視し、5 分以内の身上的情報収集は公的自己に留まること、台湾の初対面会話フレームは開始部で内容をより重視し、5 分以内の身上的情報収集はより私的自己に関する内容に偏ることを報告しているが、本研究のデータに基づく分析でも、会話開始から 5 分の間に出現するテーマは、日本語会話、中国語会話に共通して【個人情報】と【学校生活】が多かったが、中国語会話では【進路】と【すききらい】に関する話題も多く取り上げられていた。

その一方で、先行研究と本研究とで調査結果が異なるということも見られた。蔡諒福（2011）は、社会人による日本語会話と中国語会話（いずれも母語場面）の話題内容を

比較し、日本語会話は名前（姓）、居住（出身）地以外の個人情報の開示が少なく、仕事内容や専門、趣味・楽しみに関する話題に絞って、そこから派生した話題を客観的な立場から触れる話題内容が多いのに対し、中国語会話は仕事（職業）の給料や待遇に関する内容が多いことを明らかにしている。本研究の調査結果でも、中国語グループの学生は、「給料」「奨学金」「進路」といった相手のプライベートな領域に踏み込む話題が出現したが、日本語グループではプライベートな領域に深く踏み込み開示した例は見られなかった。しかし、その一方で、本研究の調査結果を見ると、日本語グループでも中国語グループでも、【個人情報】における「名前」「学年」「専攻」のような所属の話題項目、および「出身地」「実家」のような地縁に関係する話題が多く選択されている。これには学生と社会人の違いが関わっている可能性が高い。また、本研究のデータを見ると、中国人の場合は友達と話すように会話をおこなおうとしているが、日本人は「よろしくお願いします」という趣旨のあいさつをしてから会話を始めることが多い。会話で取り上げられる話題は、会話の雰囲気によっても変わる可能性が高い。

また、張瑜珊（2006a）、謝韞（2000）では、会話開始から 5 分間を対象とした分析を行い、出身地や住まいといった個人的情報は日本語会話よりも中国語会話のほうが多く出現したことを報告しているが、5 分間以後にどのような話題が出現するかについては分析されていない。本研究の第 3 章と第 4 章では、会話開始から 5 分間の話題と 5 分間以後の話題とを比較し、次のようなことが明らかになった。

①20 分間の会話では、中国語会話、日本語会話ともに【個人情報】、【他者】、【学校生活】、【すききらい】、【進路】、【社会】、【その他】という 7 つのカテゴリーの話題が出現したが、これらは会話開始から 5 分の間にすべて出現した。

②会話開始から 5 分間の話題では、中国語会話のほうが日本語会話より多岐に渡るが、5 分間以後は中国語会話と日本語会話で共通に出現する話題が少なくなる。

③【すききらい】は、中国語会話では会話開始から多く取り上げられているが、日本語会話では 5 分間以後に増加した。

④【個人情報】と【学校生活】は、日本語会話、中国語会話ともに会話開始から 5 分の間に出現した。ただし、【個人情報】に関して、日本語会話では「年齢」「生年月日」「学歴」に関する情報は会話開始から 5 分の間に出現したが、中国語会話ではこれらの情報は 5 分間以後に出現した。また、日本語会話では出現しなかった「自

我」「給料」「職位」というよりプライベートな領域にふみこんだ話題が、中国語会話では 5 分間以後に出現した。

大まかに言えば、日本語母語話者は会話の最初で詳しい【個人情報】を開示して自己紹介を行ってから【すききらい】の話題を取り上げるのに対し、中国語母語話者は特にそのような順序にこだわらずに、【個人情報】、【すききらい】といった種々の話題について会話開始から少しずつ話題展開をおこなっていると言える。

第 3 章で述べたように、会話で取り上げられる話題を「大話題」と「小話題」に分けた場合、日本語グループでは大話題数は少ないが一つの大話題に含まれる小話題が多いのに対し、中国語グループでは開示された大話題数は多いが一つの大話題に含まれる小話題が少ない。このことも、中国語会話に比べて日本語会話では「大話題」レベルの展開が重要なことを示唆している。第 4 章で述べたように、会話開始から 5 分間と会話開始から 5 分間以後の一人当たりの自己開示の平均頻度を見ても、「主観的自己開示」と「客観的自己開示」のバランスの変化は日本語グループのほうが大きいが、これも中国語会話に比べて日本語会話では「主観的自己開示→客観的自己開示」というより上位のレベルの展開が重要なことによると考えられる。

井上（2013）は、日本語と中国語のコミュニケーション様式の違いを「天秤」と「シーソー」に喩えて説明している。

> 日本でも中国でも、コミュニケーションにおいて最も重要なことは、「自分と相手が対等の関係にある」ことである。しかし、「天秤」的な感覚でコミュニケーションをする日本人と、「シーソー」的な感覚でコミュニケーションをする中国人とでは、対等の関係を保持するためにおこなうことがおのずと異なる。
>
> 天秤における対等の関係とは、平衡状態がそのまま保たれることにほかならない。日本人は、自分と相手は領域を接しているという感覚が基本であり、ことばや行為のやりとりがなくても、互いに「関係あり」である。そして、すでに成立している互いの関係のバランスを保つことが、日本人のコミュニケーションの目標であり、ことばや行為のやりとりも、その目標のもとでなされる。
>
> 一方、シーソーにおける対等の関係とは、上下運動が一定のペースで持続されることである。（略）中国人は「しゃべるのが礼儀」である。これも、自分と相手は

離れており、ことばや行為のやりとりがあって初めて、自分と相手は「関係あり」になる――やりとりがなければ互いに「関係なし」になる――からだおう。いかにして自分と相手の間のやりとりを持続し、「関係あり」の状態を保つかが、中国人のコミュニケーションの目標となる。　（井上 2013：132-134）

会話には、「話題を展開させる」という側面と「会話参加者の関係を維持する」という二つの側面がある。井上（2013）の説明は、中国語は会話の「会話参加者の関係を維持する」という側面を日本語より重視しているということを述べたものと言えるが、本研究の知見をふまえると、本研究において明らかになった日本語会話と中国語会話の相違は、つまるところ次のようにまとめられるだろう。

・日本語は会話の「話題を展開させる」という側面をより重視し、中国語は会話の「会話参加者の関係を維持する」という側面をより重視する。

本研究では、第 3 章と第 4 章で「①交換される情報の内容（どのような情報が交換されるか)」という観点から、また第 5 章では「②情報交換の様式（情報がどのように交換されるか)」日本語会話と中国語会話の比較を行った。日本語は会話の「話題を展開させる」という側面をより重視し、中国語は会話の「会話参加者の関係を維持する」という側面をより重視するという上記の結論も、①と②の二つの観点からの考察をおこなった結果得られたものであり、本研究の価値もこの点にあると考える。

6.3　日本語教育への示唆

最後に、本研究の出発点に立ち戻り、本研究で得られた知見の日本語教育に対する示唆について考える。

第 1 章で述べたように、筆者が日本に留学したばかりのころ、日本人と話をしても、やはり会話が続かないと感じ、中途半端で終わってしまう場合が多かった。これは、第 5 章で述べたように、日本語会話では情報提供者と情報受信者の役割分担が明確であり、情報提供者が情報の提供を継続的に行い、その間情報受信者が相づちを打って情報提供者に情報提供を継続させようとするのに対し、中国語会話では情報提供者と情報受信者の役割が頻繁に交替し、相手の情報を補足したり、相手の提供した情報に合わせて自分

側の情報を提供したりして、互いに相手の発話に関連する情報を提供し合う形で会話を展開させるためである。「情報を提供されたら別の情報を返す」ことを重視する中国語会話は、日本語母語話者から見れば「人の話を最後まで聞かずにあれこれ言ってくる」ように見える。また、「情報を提供されたら反応する」ことを重視する日本語会話は、中国語母語話者にとっては「話を聞くだけで情報を提供してこないので、次にどう話を続ければよいかわからない」と感じる。

加えて、会話の話題についても、前述のように、日本語母語話者は会話の最初で詳しい【個人情報】を開示して自己紹介を行ってから【すききらい】の話題を取り上げるのに対し、中国語母語話者は特にそのような順序にこだわらずに、【個人情報】、【すききらい】といった種々の話題について会話開始から少しずつ話題展開をおこなう。これは、日本語母語話者には「中国人と話していると会話の展開が読めない」という印象につながり、逆に中国語母語話者には「日本人と話していると自分が言いたいことが自由に言えない」という印象につながる。

中国語母語話者に対する日本語教育、および日本語母語話者に対する中国語教育においては、日本語と中国語の会話のパターンが中国語とは異なることを理解させることが非常に重要である。具体的には、日本語を母語とする中国語学習者に対しては、中国語のコミュニケーションにおいては「相手の発話に合わせて話を続ける」（井上 2016）ことが最優先されることを理解させる必要がある。逆に、中国語を母語とする日本語学習者に対しては、「相手の話に反応したり確認したりしながら、相手がある程度話し終わるまで待つ」ことの重要性を理解させる必要がある。

話題の内容についても、日本語を母語とする中国語学習者に対しては、やはり「相手の発話に合わせて何か言えばよい（相手がそれに合わせてくれる）」とアドバイスすればよいが（井上優氏：個人談話）、中国語を母語とする日本語学習者に対しては、「相手の話の内容の上位にあるより大きな話題」を意識することの重要性を理解させることが重要である。

日本人中国語学習者には「気軽に話す」練習が重要だが、中国人日本語学習者には、「話す」練習のほかに、「話のまとまりを意識しながら聞く」、「上位の話題を意識しながら話す」練習が重要であると言えるだろう。

参考文献

安達太郎（2004）「質問と疑い」、宮崎和人ほか『新日本語文法選書 4　モダリティ』、くろしお出版

鮎澤孝子（1987）「「話しことば」の特徴―聴解指導のために―」『日本語教育』64 号、pp.1-12、日本語教育学会

安藤清志（1986）「対人関係における自己開示の機能」『東京女子大学紀要論集』36、pp.167-199、東京女子大学

井上　優（2013）『相席で黙っていられるか　日中言語行動比較論』岩波書店

井上　優（2016）「日本語から見た中国語の文法とコミュニケーション」『中国語教育』14、pp.1-22、中国語教育学会

今石幸子（1992）「談話における聞き手の行動―あいづちのタイミングについて―」『日本語教育学会創立 30 周年・法人設立 15 周年記念大会予稿集』、pp.147-151、日本語教育学会

伊藤博子（1993）「談話の指導―バックチャネルからの展開―」『日本語学』12 巻 8 号、pp.78-91、明治書院

宇佐美まゆみ（1993）「初対面の二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー：話者間の力関係による相違―日本語の場合」『ヒューマンコミュニケーション研究』21、pp.25-40、日本コミュニケーション学会

宇佐美まゆみ（監修）（2011）『BTSJ による日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011 年版』

宇佐美まゆみ・嶺田明美（1995）「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン―初対面二者間の会話分析より―」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』2、pp.130-145、名古屋学院大学留学生別科

薄井　明（2010）「発話番交替システムにおける「語り」の組織化と展開」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』17、pp.61-70、北海道医療大学看護福祉学部

梅木俊輔（2009）「ターン管理と発話連鎖への期待に関する一考察―韓日接触場面における情報要求場面を中心に―」『言語科学論集』13 号、pp.71-82、東北大学大学院文学研究科言語科学専攻

榎本博明（1997）『自己開示の心理学的研究』北大路書房

大谷麻美（2015）「話題展開スタイルの日・英対照分析―会話参加者はどのように話題の展開に貢献するのか」、津田早苗ほか『日・英語談話スタイルの対照研究』、pp.193-229、ひつじ書房

岡崎敏雄（1987）「談話の指導―初～中級を中心に―」『日本語教育』62 号、pp.165-178、日本語教育学会

小笠恵美子（2001）「会話の話題展開における規範の分析：授業中の話し合いを例にして」『言語文化と日本語教育』21、pp.110-121、お茶の水女子大学日本言語学文化研究会

奥山洋子（2000）「韓・日同国人女子大学生同士の初対面の会話―質問及び自己開示の時間帯による分析を中心に―」『日本學報』45、pp.117-132、韓国日本学会

―――（2005）「話題導入における日韓のポライトネス・ストラテジーの比較―日本と韓国の大学生初対面会話資料を中心に―」『社会言語科学』8 巻 1 号、pp.69-81、社会言語科学会

大浜るい子（1998）「日本人の言語行動―談話展開のためのストラテジー―」『広島大学日本語教育学科紀要』8、pp.97-105、広島大学教育学部日本語教育学科

大浜るい子・西村史子（2005）「日英のターン交替と相づち使用の実相：日本人学生とニュージーランド学生の比較を通して」『社会言語科学』7 巻 2 号、pp.78-87、社会言語科学会

賈　　琦（2008）「小集団討論場面における話者交替の日中対照研究」『世界の日本語教育』18、pp.73-94、国際交流基金日本語国際センター

郭　末任（2003）「自然談話に見られる相づち的表現―機能的な観点から出現位置を再考した場合―」『日本語教育』118 号、pp.47-56、日本語教育学会

河内彩香（2003）「日本語の雑談の談話における話題展開機能と型」『早稲田大学日本語教育研究』3、pp.41-55、早稲田大学大学院日本語教育研究科

金　志宣（2000）「turn 及び turn-taking のカテゴリー化の試み―韓・日の対照会話分析―」『日本語教育』105 号、pp.81-89、日本語教育学会

―――（2001）「turn-taking パターン及びその連鎖パターン―韓・日の対照会話分析―」『人間文化論巌』4 巻、pp.153-165、お茶の水女子大学人間文化研究科

金　珍娥（2003）「“turn-taking システム”から“turn-exchanging システム”へ―韓国語と日本語における談話構造：初対面二者間の会話を中心に―」『朝鮮学報』

187、pp.47-82、朝鮮学会
———（2013）『談話論と文法論―日本語と韓国語を照らす―』くろしお出版
金　文学（2012）『すぐ謝る日本人、絶対謝らない中国人』南々社
木暮律子（2002）「母語場面と接触場面の会話における話者交替―話者交替をめぐる概念の整理と発話権の取得―」『言葉と文化』3、pp.163-180、名古屋大学大学院 国際言語文化研究科日本言語文化専攻
串田秀也（2007）「第 16 回研究大会ワークショップ　日本語会話における WH 質問―応答連鎖」『社会言語科学』9 巻 2 号、pp.130-134、社会言語科学会
窪田彩子（2000）「日本語学習者の相づちの習得―日本人との初対面における会話資料を基に―」『南山日本語教育』7 号、pp.76-114
熊井浩子（1992）「外国人の待遇行動の分析（１）―依頼行動を中心にして―」『静岡大学教養部研究報告人文・社会科学篇』第 28 巻 1 号、pp.271-314、静岡大学
熊谷智子（1997）「はたらきかけのやりとりとしての会話―特徴の束という形でみた「発話機能」―」、茂呂雄二編『対話と知―談話の認知科学入門―』新曜社
———（1998）「依頼の言語行動におけるストラテジーの展開構造」『国立国語研究所創立 50 周年記念研究発表会資料集』国立国語研究所
———（2000）「言語行動分析の観点―「行動の仕方」を形づくる諸要素について―」、国立国語研究所編『日本語科学』７、pp.95-113、国書刊行会
黒崎良昭（1987）「談話進行上の相づちの運用と機能―兵庫県滝野方言について―」『国語学』150、pp.109-122、国語学会
———（1998）「会話を進展させる表現」『日本語学』17 巻 4 号、pp.104-113、明治書院
黒沼祐佳（1996）「会話における turn-taking と情報共有のイニシアティブの関係」『筑波応用言語学研究』、pp.103-113、筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域
国語学会（編）（1980）『国語学大辞典』東京堂書店（「文型の型」の項）
国立国語研究所（1960）『話しことばの文型(1)―対話資料による研究―』秀英出版
————————（1963）『話しことばの文型(2)―独話資料による研究―』秀英出版
————————（1971）『待遇表現の実態―松江 24 時間調査資料から―』秀英出版
————————（1987）『談話行動の諸相―座談資料の分析―』三省堂

小宮千鶴子（1986）「相づち使用の実態―出現傾向とその周辺―」『語学教育研究論巌』3 号、pp.43-62、大東文化大学語学教育研究所

小室郁子（1995）「“Discussion”における turn-taking―実態の把握と指導の重要性―」『日本語教育』85 号、pp.53-65、日本語教育学会

蔡　諒福（2007）「初対面会話における個人情報の対照研究―日台大学生を対象に―」、日本語日本文化教育研究会編集委員会編『間谷論集』1、pp.131-147

―――（2011）「社会人初対面会話における話題選択に関する一考察―日台中のデータをもとに―」『大阪大学言語文化学』20、大阪大学言語文化学会

―――（2012）「母語場面初対面会話における話題の派生に関する一考察―日中社会人のデータをもとに―」『日中言語対照研究論集』14、pp.49-65、日中言語対照研究会

斎藤里美（1989）「日本語教育における疑問文・質問文―コミュニケーション上の機能からみた日本語教材の課題―」『日本語学』8 巻 8 号、pp.41-56、明治書院

斎藤みちる・徐愛紅・多田美有紀・大浜るい子（1997）「談話分析から見た異文化間コミュニケーション―日本人の言語行動を中心に―」『広島大学日本語教育学科紀要』7、pp.185-193、広島大学教育学部日本語教育学科

佐久間まゆみ（1987）「文段認定の一基準（I）―提題表現の統括―」『文藝言語研究　言語篇』11、pp.89-135、筑波大学文芸・言語学系

佐久間まゆみ・半沢幹一・杉戸清樹編（1997）『文章・談話のしくみ』おうふう

ザトラウスキー、ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析―勧誘のストラテジーの考察―』くろしお出版

謝　　韞（2005）「日本人女子大学生同士と中国人女子大学生同士の初対面会話」『日本中国語学会第 55 回全国大会予稿集』、pp.296-300、日本中国語学会

申　媛善（2006）「情報のやりとりにおける受信側の働き―日本語話者と韓国語話者の比較―」『筑波応用言語学研究』13、pp.85-98、筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域

植野貴志子（2012）「聞き手行動の社会言語学的考察―語りに対する聞き手の働きかけ―」『日本女子大学紀要.文学部』61、pp.57-68、日本女子大学

杉戸清樹（1987）「発話のうけつぎ」、国立国語研究所編『談話行動の諸相―座談資料の分析―』、三省堂

杉戸清樹・沢木幹栄（1979）「言語行動の記述―買い物行動における話しことばの諸側面―」『講座言語第 3 巻　言語と行動』、大修館書店

杉藤美代子（1987）「ポーズとイントネーション」、国立国語研究所編『談話行動の諸相―座談資料の分析―』、pp.107-138、三省堂

曹　偉琴（1995）「日中両国間の発話行為の比較対照」『帝塚山学院大学教養課程研究紀要』3、帝塚山学院大学教養課程

丹野弘昭・下斗米淳・松井豊（2005）「親密化過程における自己開示機能の探査的検討：自己開示に対する願望・義務感の分析から」『対人社会心理学研究』5、pp.67-75、大阪大学大学院人間科学研究科対人社会心理学研究室

張　瑜珊（2006a）「台日女子大生による初対面会話の対照分析：初対面会話フレームの提案を目指して」『人間文化論叢』、pp.223-233、お茶の水女子大学人間文化研究科

―――（2006b）「台湾と日本の女子大生同士における初対面会話の対照研究―話題選択について―（第 31 回日本言語文化学研究会発表要旨）」『言語文化と日本語教育』31、pp.110-113、お茶の水女子大学日本言語文化学研究会

―――（2007）「初対面会話における対人関係構築プロセスの研究概観：会話データからの研究を中心に」『言語文化と日本語教育』増刊特集号、pp.94-118、お茶の水女子大学日本言語文化学研究会

張　　麗（2010）「話者交替にみられる中国人と日本人の「自己主張」のスタイル：小集団ディスカッションを通して」『異文化コミュニケーション論集』7、pp.147-159、立教大学

全　鐘美（2010a）「初対面会話における韓国人日本語学習者の自己開示の研究」『小出記念日本語教育研究会』18、pp.5-22、小出記念日本語教育研究会

―――（2010b）「初対面の相手に対する自己開示の日韓対照研究―内容の分類からみる自己開示の特徴―」『社会言語科学』13 巻 1 号、pp.123-135、社会言語科学会

伝　康晴（2009）「聞き手行動の認知科学に必要なもの」『認知科学』16(4)、pp.475-480、日本認知科学会

唐　　瑩（2013）「初対面会話における中日母語話者の自己開示の研究―大学生同士の会話を中心に―」麗澤大学言語教育研究科日本語教育学専攻修士論文

中井陽子（2003a）「話題開始部で用いられる質問表現―日本語母語話者同士および母

語話者/非母語話者による会話をもとに―」『早稲田大学日本語教育研究』2、pp.37-54、早稲田大学大学院日本語教育研究科
――――（2003b）「話題開始部/終了部で用いられる言語的要素―母語話者及び非母語話者の情報提供者の場合―」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16、pp.3-26、早稲田大学日本語研究教育センター
――――（2003c）「言語・非言語行動によるターンの受け継ぎの表示」『早稲田大学日本語教育研究』3、pp.23-39、早稲田大学大学院日本語教育研究科
中田智子（1990）「発話分析の観点―多角的な特徴記述のために―」、国立国語研究所編『研究報告集』12、pp.279-306、秀英出版
――――（1992）「会話の方策としてのくり返し」、国立国語研究所編『研究報告集』13、pp.267-302、秀英出版
永田良太（2004）「会話におけるあいづちの機能―発話途中に打たれるあいづちに着目して―」『日本語教育』120 号、pp.53-62、日本語教育学会
難波康治・三牧陽子（2010）「社会人初対面会話における話題展開パターン―日中韓の母語場面の調査をもとに―」『社会言語科学会第 25 回大会発表論文集』、pp.82-85、社会言語科学会
西田　司（1994）『異文化と人間関係の分析』多賀出版
――――（1998）『異文化の人間関係』多賀出版
――――（2004）『不確実性の理論―対人関係コミュニケーション学の新視点』創元社
西原鈴子（1991）「会話の turn-taking における日常的推論」『日本語学』10 巻 10 号、pp.10-18、明治書院
バーンランド、D. C.、西山千・佐野雅子訳（1979）『日本人の表現構造：公的自己と私的自己・アメリカ人との比較』サイマル出版社
橋内　武（1988）「会話のしくみを探る」『日本語学』3 巻 7 号、pp.43-51、明治書院
初鹿野阿れ（1998）「発話ターン交代のテクニック―相手の発話中に自発的にターンを始める場合―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』24 号、pp.147-162、東京外国語大学留学生日本語教育センター
深田博己（1998）『インターパーソナル・コミュニケーション』北大路書房
福富奈美（2005）「日本語会話における情報要求場面の発話交換―母語話者と非母語話者の相違を中心に―」『人間社会学研究集録』1、pp.199-214、大阪府立大学大

学院人間社会学研究科
舟橋宏代（1994）「談話の進行における日朝語話者の姿勢」『平成 6 年日本語教育学会春季大会予稿集』、pp.91-96、日本語教育学会
堀口純子（1988）「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64 号、pp. 13-26、日本語教育学会
———（2005）『日本語教育と会話分析』くろしお出版
松田陽子（1988）「対話の日本語教育学―あいづちに関連して―」『日本語学』7 巻 13 号、pp.59-66、明治書院
水谷信子（1983）「あいづちと応答」、水谷修（編）『話しことばの表現』、pp. 37–44、筑摩書房
————（1984）「日本語教育と話しことばの実態―あいづちの分析―」『金田一春彦博士古稀記念論文集　第二巻　言語学編』、pp. 261-279、三省堂
————（1988）「あいづち論」『日本語学』7 巻 13 号、pp.4-11、明治書院
————（1993）「「共話」から「対話」へ」『日本語学』12 巻 4 号、pp.4-10、明治書院
————（2001）「あいづちとポーズの心理学」『言語』30 巻 7 号、pp.46-51、大修館書店
水谷　　修（1982）「外国語としてみた日本語の言語行動」『講座日本語学 12　外国語との対照Ⅲ』、218-229、明治書院
三矢真由美（1995）「話題の適切性と自己開示度―日本人と中国人の比較―」『日本語教育学会春季大会予稿集』、pp.151-156、日本語教育学会
南不二男（1972）「日常会話の構造―とくにその単位について―」『言語』1 巻 2 号、pp.108–115、大修館書店
————（1981）「日常会話の話題の推移―松江テクストを資料として―」『方言学論叢 1　方言研究の推進』、三省堂
————（1987）「談話行動論」、『談話行動の諸相―座談資料の分析』国立国語研究所編、三省堂
三牧陽子（1999）「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー―大学生会話の分析―」『日本語教育』103、pp.49-58、日本語教育学会
————（2000）「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出―

「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして―」『多文化社会と留学生交流』4、pp.37-53、大阪大学国際教育交流センター
――――（2013）『ポライトネスの談話分析―初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版
三牧陽子・難波康治（2010）「日中韓の社会人初対面母語場面における自己開示の様相」『社会言語科学会第 25 回大会発表論文集』、pp.54-57、社会言語科学会
宮地敦子（1959）「うけこたへ」『国語学』39、pp.85-98、国語学会
村上恵・熊取谷哲夫（1995）「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62、pp.101-111、表現学会
村松　剛（1977）『察しあいの世界：日本人の何が「不可解」か』プレジデント社
メイナード、泉子・K（1993）『会話分析』くろしお出版
桃内佳雄（1983）「日本語質問応答会話における協力的応答について」『計量国語学』14 巻 2 号、pp.47-55、計量国語学会
森恵理香・前原かおる・大浜るい子（1999）「ターン譲渡の方略としての「繰り返し」と「問い」」『広島大学日本語教育学科紀要』9、pp.41-49、広島大学教育学部日本語教育学科
山崎敬一・好井裕明（1984）「会話の順番取りシステム―エスノメソドロジーへの招待―」『言語』13 巻 7 号、pp.86-94、大修館書店
山本　綾（2003）「話題転換についての一考察―アメリカと日本のテレビのトーク番組を資料として―」『えちゅーど』33、pp.57-81、お茶の水女子大学大学院英文学会
楊　　虹（2005a）「日本語母語場面の会話に見られる話題開始表現」『人間文化論巌』8 巻、pp.327-336、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
――――（2005b）「中日接触場面の話題転換：中国語母語話者に注目して」『言語文化と日本語教育』30 号、pp.31-40、お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
――――（2005c）「日本語母語話者による初対面会話に用いられる話題転換ストラテジー（第 30 回日本言語文化学研究会　ポスター発表要旨）」『言語文化と日本語教育』30、pp.83－86、お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
――――（2006）「中日母語場面の初対面会話における話題導入のプロセスの比較」『社会言語科学会第 18 回大会発表論文集』pp.16-19　社会言語科学会

――――（2007）「中日母語場面の話題転換の比較―話題終了のプロセスに着目して―」『世界の日本語教育』17、pp.37-52、国際交流基金日本語国際センター
――――（2008）「中日接触場面の話題転換の分析：中・日母語場面との比較から（日中韓３か国合同ジョイントゼミ」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書』、pp.209-211
――――（2011a）「初対面会話における「質問」の談話進行上の機能―中国語母語場面と日本語母語場面を比較して―」『社会言語科学会第 27 回大会発表論文集』、社会言語科学会
――――（2011b）「中日母語場面の初対面会話における話題開始の比較」『立命館言語文化研究』22 巻 3 号、pp.185-200、立命館大学国際言語文化研究所
――――（2015）「初対面会話における話題上の聞き手行動の中日比較」『日本語教育』162 号、pp.66-81、日本語教育学会
楊　晶（1999）「中・日両言語の相づちに関する一考察―頻度とその周辺―」『人間文化研究年報』、pp.28-38、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
――――（2000）「相づちに関する意識の中日比較―アンケート調査の結果より―」『人間文化論巌』3、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科、pp.87-100
――――（2001）「電話会話で使用される中国人学習者の日本語の相づちについて―機能に着目した日本人との比較―」『日本語教育』111 号、pp.46-55、日本語教育学会
――――（2004）「中国語会話における相づちの機能についての一考察」『高崎経済大学論集』47 巻 1 号、pp.31-44
――――（2006）「相づちのタイミングにおける中日の比較―異なる会話場面での相づちの先行発話に対する分析を通して―」『人間文化論巌』9 号、pp.305-313、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
吉田　睦（2008）「中上級日本語学習者と母語話者の談話展開―会話進行に伴う情報要求表現に着目して―」『筑波応用言語学研究』15、pp.139-152、筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域
李　麗燕（1995）「日本語母語話者の会話管理に関する一考察―日本語教育の観点から―」『日本語教育』87 号、pp.12-24、日本語教育学会
――――（1997）「日本語母語話者の雑談における「情報伝達行動の再開」」『日本語教

育』92 号、pp.48-59、日本語教育学会
————（1999）「日本語母語話者の雑談における「物語の開始」―発話順番のやり取りとの関係を中心に―」『世界の日本語教育』9、pp.221-239、国際交流基金日本語国際センター
————（2000）『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究』くろしお出版
劉　建華（1987）「電話でのアイヅチ頻度の中日比較」『言語』16 巻 1 号、pp.93-97、大修館書店
刘　虹（2004）『会话结构分析』、北京：北京大学出版社
渡辺恵美子（1994）「日本語学習者のあいづちの分析の分析―電話での会話において使用された言語的あいづち―」『日本語教育』82 号、pp.110-122、日本語教育学会
Clancy, P. M., S.A. Thompson, R., Suzuki and H. Tao (1996) The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics* 26, pp. 355-387.
Garfinkel (1967) *Studies in Ethnomethodology.* Englewood Cliffs. NJ: Prentice-Hall
Gumperz, J. J. (1982) *Discourse Strategies*. Cambridge University Press.（ジョン・ガンパーズ（出原健一ほか訳）『認知と相互行為の社会言語学―ディスコース・ストラテジー―』松柏社
Hymes, D. (1962) The Ethnography of Speaking. In T. Gladwin and W. C. Sturtevant (eds.), Anthropology and Human Behavior. pp. 13–53. Washington, DC: Anthropological Society of Washington.
Jourard, S. M. (1971) *Self-disclosure: An Experimental Analysis of the Transparent Self.* New York: Wiley-Interscience
Morton, T. L. (1978) Intimacy and reciprocity of exchange: A comparison of spouses and strangers. Journal of Personality and Social Psychology, 36(1). American Psychological Association. pp. 72-81.
Mukai, C. (1999) The Use of Back-channels by Advanced Learners of Japanese: Its Qualitative and Quantitative Aspects. 『世界の日本語教育』9, pp. 197-219, 国際交流基金日本語国際センター
Schegloff, E. A. and H. E. Sacks (1973) Opening up Closings. *Semiotica* 8 (4), pp. 289-382.（ジョージ・サーサス、ハーヴィー・サックス、ハロルド・ガーフィン

ケル（北沢裕・西阪仰訳）（1989）『日常性の解剖学—知と会話』、pp.177-241、マルジュ社）

Sacks, H. E, A. Schegloff and G. Jefferson (1974) A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation. Language, Vol. 50, No. 4, Part 1. pp. 696-735.

Watanabe, Suwako (1993) Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions. In D. Tannen (ed.) *Framing in Discourse*. Oxford: Oxford Univrsity Press. pp. 176-209

付録：会話データ例（日本語会話）

・発話の下線部は「自己開示」の部分。
・［　］で囲んだ相づちは、相手の発話の途中で発された相づち。

大話題	小話題	話者	発話	情報提供発話のタイプ
		JM0101	はじめまして。	
		JM0102	はじめまして。	
名前 （陳述で開始）		JM0102	△△と申します。 （客観的自己開示）	自発式
		JM0101	はい、ええと▲▲です。 （客観的自己開示）	自発式
		JM0102	▲▲さん？	（情報要求）
		JM0101	はい。	回答式
出身 （質問で開始）		JM0102	▲▲さん、中国人？	（情報要求）
		JM0101	いや、日本人です。 （客観的自己開示）	回答式
		JM0102	あ、日本人か。	（相づち）
		JM0101	はい。	（相づち）
		JM0102	中国人だと思っていました。 （主観的自己開示）	自発式
		JM0101	いや、あれなんでしたっけ、ネイティブの日本人です。（客観的自己開示）	双方式
		JM0102	へー。HHH	（相づち）
所属 （質問で開始）		JM0102	今○○（大学名）？	（情報要求）
		JM0101	あ、はい。 （客観的自己開示）	回答式
		JM0102	そうなんだ。	（相づち）
		JM0101	でも、4年です。 （客観的自己開示）	自発式
		JM0102	学部は？	（情報要求）
		JM0101	経済です。 （客観的自己開示）	回答式
		JM0102	あ、経済。	（情報要求）
		JM0101	はい。	回答式

ゼミ （質問で開始）		JM0102	ゼミは誰先生？	（情報要求）
		JM0101	ゼミは△△という教職系の。 （客観的自己開示）	回答式
		JM0102	ふとっちょの？	（情報要求）
		JM0101	いや、ちょ、ちょっと。	回答式
		JM0102	あの、メガネかけてる	（情報要求）
		JM0101	かけたりかけなかったりする。	回答式
		JM0102	あ、本当。	（相づち）
		JM0101	わりとふくよかな方。	自発式
		JM0102	hhh	
		JM0101	hhh	
サークル （質問で開始）		JM0102	サークルとかもやっているの？	（情報要求）
		JM0101	え、サークル、部活、弓道部です。 （客観的自己開示）	回答式
		JM0102	弓道。	（相づち）
		JM0101	はい。	（相づち）
		JM0102	弓道。	（相づち）
		JM0101	はい。	（相づち）
		JM0102	なんでまた？	（情報要求）
		JM0101	ええと、高校から弓道部だったんで。 （客観的自己開示）	回答式
	きっかけ	JM0102	へえー、弓道を始めたきっかけは？	（情報要求）
		JM0101	ええと、弓道を始めたきっかけはぼく付属の高校中、高校の△△△△というところにいたんですよ。　（客観的自己開示）	回答式
		JM0102	おー。	（相づち）
		JM0101	で、そこの、ええと、中学校は部活野球をしてたんですね。　（客観的自己開示）	自発式
		JM0102	うん	（相づち）
		JM0101	野球の、中学校で野球をやってるところのすぐ下に、弓道場があって。	自発式
		JM0102	んんん。	（相づち）
		JM0101	たまに球拾いしてた時に見てたんですよ。 （客観的自己開示）	自発式
		JM0102	あー。	（相づち）
		JM0101	そうしたら、かっけーなーとか思って。 （主観的自己開示）	自発式

		JM0102	hhh そうなんだ。	（相づち）
		JM0101	はい。	（相づち）
	弓道の楽しさ	JM0102	でもやっぱり、やってみて実際どう？やっぱ楽しい？	（情報要求）
		JM0101	楽しいです。結構はまります。 **（主観的自己開示）（主観的自己開示）**	**回答式**
		JM0102	ほんと。	（相づち）
		JM0101	はい。	（相づち）
	弓道の礼儀	JM0102	え、やっぱ礼に始まりみたいなところもある？	（情報要求）
		JM0101	あー、もうかなり、ありますね。	回答式
		JM0102	あ、そうなんだ。	（相づち）
		JM0101	はい。	（相づち）
		JM0102	へー。	（相づち）
	弓道のしくみ	JM0102	え、競技自体のその仕組みっていうかさ。	（情報要求）
		JM0101	はい。仕組みはですね、	**回答式**
		JM0102	［うん、ていうか］	（相づち）
		JM0101	とりあえず的に当てればいいんです。当たったか外れたかで。	
		JM0102	あ、そうなんだ。	（相づち）
		JM0101	はい、決まるんで。	**自発式**
	弓道の知識	JM0102	え、あの的に中心に近いとかは？	（情報要求）
		JM0101	は直接に関係ないですね。	**回答式**
		JM0102	あ、そうなんだ。	（相づち）
		JM0101	はい、だから本当に〇か×か、当たったら〇で。	**自発式**
		JM0102	へー。	（相づち）
		JM0101	外れたら×で。	**自発式**
		JM0102	へー。	（相づち）
		JM0101	すごい、だからかなり打ってて、分かりやすい競技だと思いますよ。 **（主観的自己開示）**	**自発式**
		JM0102	へー。	（相づち）
	弓道の試合	JM0102	例えば大会とかで、	（情報要求）
		JM0101	［はい］	（相づち）
		JM0102	ま、例えば〇〇〇×××だと、×〇×〇って人がいるとするじゃん、	

		JM0101	［はい］	（相づち）
		JM0102	で、そういう時は、	
		JM0101	［はい］	（相づち）
		JM0102	その時は、例えば、ま、結果的に○×一緒だったりするじゃん？ そういう時に、何でこうとこう勝敗を。	（情報要求）
		JM0101	ええと、そういう時、当たった数が同じ場合は、あの。	**回答式**
		JM0102	延長？	（情報要求）
		JM0101	延長戦というか、サドンデスというか。	**回答式**
		JM0102	あーあてて？	（情報要求）
		JM0101	当てて。	**回答式**
		JM0102	あ、そうなんだー。 じゃ的（まと）にあまり関係あるんだね？	（相づち） （情報要求）
		JM0101	はい。	**回答式**
	弓道の的	JM0102	あ、真ん中、赤だよね？ 真ん中。	（情報要求）
		JM0101	いや、真ん中黒いですよ、弓道は。	**回答式**
		JM0102	あ、黒い、黒い。	（相づち）
		JM0101	はい。	（相づち）
		JM0102	え、黒白黒白か。	（相づち）
		JM0101	ええと、大学は真ん中黒で後は白です。	**自発式**
		JM0102	へー。	（相づち）
		JM0101	はい。	（相づち）
		JM0102	で、黒に当てたからというのは。	（情報要求）
		JM0101	あんまないですね。	**回答式**
		JM0102	あ、そうなんだ。	（相づち）
	弓道の 個人戦	JM0101	でもその個人戦とかこうやってて。	**自発式**
		JM0102	うん。	（相づち）
		JM0101	順位を決める時に、1 位と 2 位が決まって、あと 3 位を決めたいときに。	**自発式**
		JM0102	うん。	（相づち）
		JM0101	3 位のところに 5 人ぐらいいたら、その一本と一本がついてて、中心に近い人が勝ち、	**自発式**
		JM0102	［あああ］	（相づち）
		JM0101	という風にというのもありますけど。	